

紀行八種

81  
283

022432-000-2

81-283

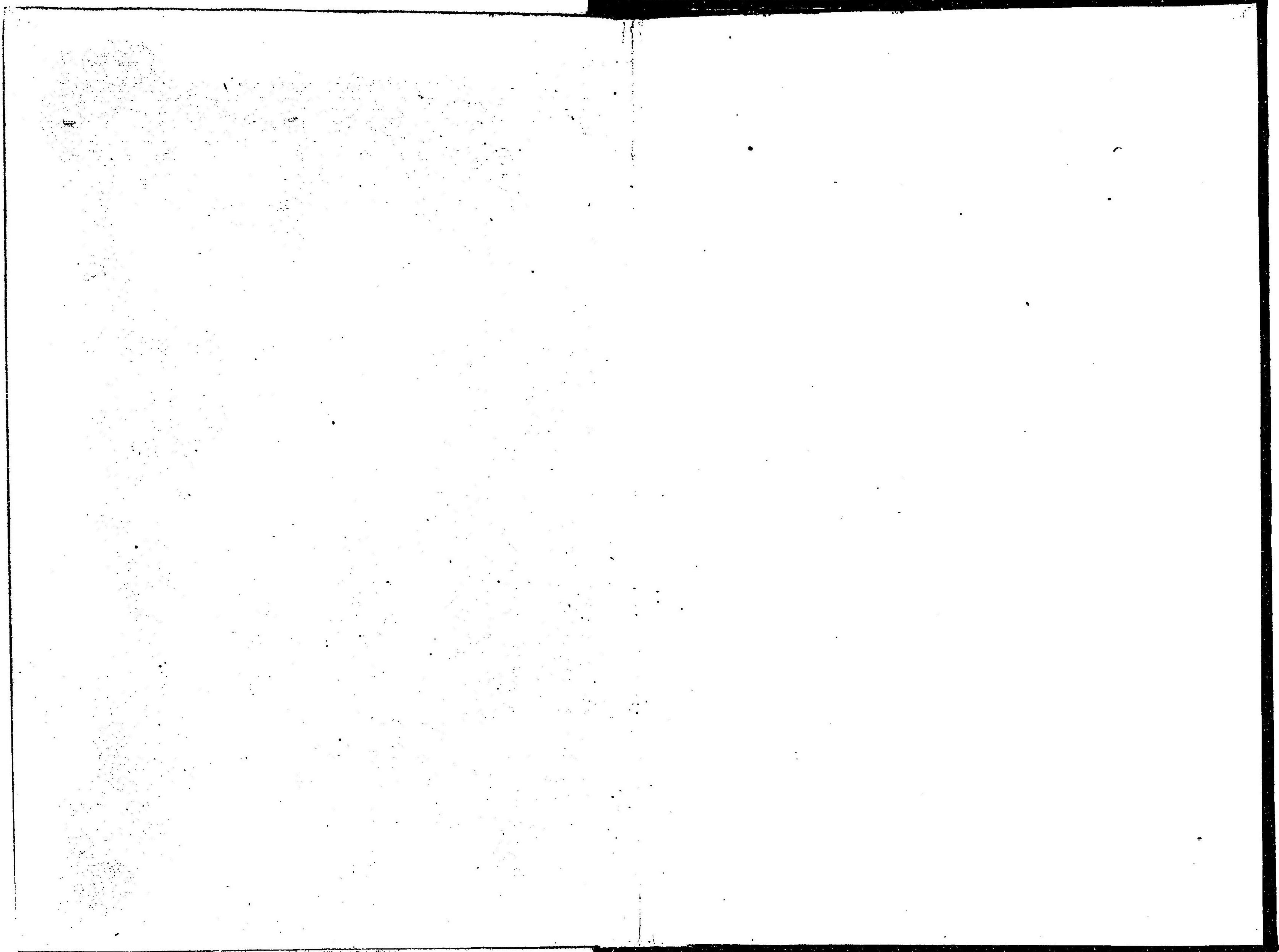
紀行八種

西村 天因(時彦) / 著

M3 2

ADB-0082







紀行八種

目錄

○奥山羽水

奥羽の山水を探りて浮島の奇境を寫せり

一頁

○雲の行方

木曾の山奥深く分入りて浮世に遠き山村の人情風俗を叙したり

一七頁

○風流順禮

遊びて山陽道を上れる道の記にして同伴は風流の一法師なり

四四頁

○金剛山

烈風雷雨の日金剛山に登り古山伏と雨後の月を賞し南朝の遺跡を吊へり

六二頁

○奈良巡

奈良巡の柔にとて名勝及び古寶物を訪ひて委しく品評を費せり

七五頁

○觀佛記

地獄谷の榛莽を拂ふて岩石に彫れる佛像を求め以て幽を闢き微を顯はせり

八七頁

○春珍輕節錄

九四頁

大和に天誅組を祭り伏見に九烈士の墓を訪ひ足利の木像を評して嵯峨野なる  
小楠公首墓の由来を録す

○河内紀行

一一五頁

天野山に登り觀心寺に遊びて南朝の古蹟遺物を觀て遂に楠母の菴址を索めた

紀行八種目錄終

紀行八種

天四居士著

○奥山羽水

かくばかり程がたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな、とは云へど都の月は何となく巷の  
塵に掩はれがらなり、春の田植するさま、桑摘の歌ののどかなる、分きて山自ら高く水自ら流るゝ田舎  
の景色こそ、世知らぬ顔にていと心憎くうらやましけれ、いでや柚の通路を蹈み、賤が伏菴の烟をも  
眺め、日暮の露をぬぐんとて、身輕に出立ちて紅塵十丈の裏を逃れ出では、時に六月九日なり、  
上野仙臺間の汽車は記すほどの事もなし、火龍一奔、山を劈き野を蹴り、十一時前には猶東京の紛華  
にもまれし身が、午後三時頃には那須山おろしの涼風に滿面の黄埃を吹去られ、白河二本松の城壁を  
左手に見て、古今の變遷を偲びつゝ、夜の十時には早や福嶋の逆旅に打臥しぬ、昔日の人は青鞋布襪、  
一劍飄然、野に臥し山に寝ねつゝ、修行遊歴して膾炙を鍊り聞見を博めけん艱難辛苦に引代えて、斯  
ばかり便利の世なるに、今の少年は、暑中の休暇にも下宿屋の隅に晝寝して、なまじかき文巻も取  
ひろげつゝ、空に日を送ること口惜しけれ、東京を出る折には、毛織物の一重にてはいと熱かりしが、  
此地は餘寒尙去りやらず、隙間洩るゝ夜風身にしみていも寝られず、

○奥山羽水

夜明けて窓を明くれば、四面の連山蜿蜒として一角をだに開かず、宿霧微茫、緑紗を繞りすが如く、南山の巔に残んの雪かすかに見ゆる。美人の衣のあはひより白き肌を露はすにも似たり、朝飯後直に汽車にて仙臺に入る、途上一面桑樹鬱茂せり、車中にて或人の語るらく、此處の長官は、鳥游の痴物にて好色の病あり、其管下なる旅籠屋何某とやらんが妻の眉目よきに迷ひ、權威もておとしつすかしつ、言寄りて遂に道ならぬ道に踏み入りしを、何某聞知りていたく憤り、處の長官とは云へ、やはか許すべきとて、人もて嚴しく掛合ひしに、長官打驚き、余が世に在らん限は、年給三分一を分け與ふべければ許してよと只管詫入りしかば、何某も金に迷ひて沙汰止みと爲り、年毎に少からぬ黄金を得て世を送れりとかや、聞くだに淺まし。

仙臺に至りて宮川子殿の寓を訪ふて宿借りぬ、子殿は其字、通稱熊三郎、熊本の火、予と同じく大學に學び、卒業して第二高等中學に教授たり、同職の岡田文平、字は文叔、及び當地の師範學校教師小川則要、字は士期も亦同學なり、世に別れて程經し故人に逢ふて舊事を語るよりし樂きはあらし、淹留三日、文酒徵逐、殆んど在學の日に異ならず、子殿の寓は前は伊達家菩提所なる瑞鳳寺の林に對し、右手に今は鎮臺兵營なる昔時の青葉山の城墟を望む、其下を流るゝは廣瀬川にして、夜深け人静なれば、水聲枕上に潺々たり、青葉山と瑞鳳寺との間なる丹崖に、大なる穴あり、木炭を出し湯屋の燃料に用ゆとかや、十二日土期と同じく木戸某の家に飲む、士期善く談し善く飲みて、故態依然たり、明くれば十三日なり、宿醒猶眉睫の間に留りて、頭重きこと山の如く、起も得やらざりしが、斯くて

は果てしと身を起して空を眺むれば、雲低く垂れて雨をばふ、いふせきこと言ふ計なし、晴日の山は晝の如し、山中の風雨こそ變幻窮なくして、景趣尤多けれ、去らば此より濕るゝも厭はで奥深く分入り、山中風雨の觀を極めんとて、車を雇ひて子殿の寓を立出でしは朝の八時過る頃なり、間もなく城下を離れて八幡の森を伏拜み、廣瀬川の流に沿ふて行くこと三里ばかり、但或る村里に着きぬ、名を問ふに愛子村と云ふ、折しも杉林の彼方に山柱鷗一聲血を吐く、弟は東京に物學びし、兄は限も知らぬ陸の奥に逍遙ひ、日毎に間に倚れる故郷の母君の、愛子の情如何ばかりぞと、思ひめぐらせば腸もちぎれんばかりなり。

游子駐筇愛子村、杜鵑啼血幾消魂、豈唯風雨征衫濕、雙袖不堪多淚痕、

と口占みつゝ行過ぎぬ、世に旅は物憂きはなく、又旅は面白きはなし、雲の色、雨の音、皆斷腸の媒にして、鳥の聲、月の影、盡く傷心の種なり、去れど又山容水態の一樣ならぬ、人情風俗の品變れるを見て、我胸中の物と爲し、此に史料を得、彼に文氣を養ひ、覺へず獨笑する時もあり、實に一得一失は免れぬものなりけり、雨は晴間なく、路は漸く爪先あがり、追々山に近くはせに、行手の方に奇峰兀然として立てり、巔は皆岩にして今や落ちなんとする景色いと險し、昔時鎌倉權五郎景政悍馬に鞭ちて此の山を乗越えしより、鎌倉山と名けしとかや、晝過くる頃、作並温泉に着けり、下なるを古湯と云ひ、上なるを新湯と稱す、其間一町もやあらん、古湯に憩ひて午食す、此地仙臺を距るを七里、關山の洞門までは三里餘にして、皆群山重疊の中を行くものあり、浴するひまもなく立出で

關山は名にし負ふ奥羽の險要にして、伊達の庄内に對する箱根の關なり、去れば山深く路險はしく、一夫之に當れば、萬夫遂巡すべし、足指漸く仰ぎて、車窓天に朝せんばかりなれば、雨頻に面を打ちて目も開かれず、斯くては山中の風雨を觀んとて立出し甲斐なければとて、車蓋を取棄てさせ、腰より下のみは雨具もて引包み、被笠引擔ぎて車上に坐しつゝ、景色を眺めゆくは色に、崖の崩れ掛りたる、深橋の危ふげなる、又は關山おろしの風に車のゆらくと跡もせんとするなど、危険を極めたり、笠を傾けて打見遣るに、處々の溪間に見ゆる草の屋は袖小屋にや、山の脊に朧氣に糸をひきたるは、樵の通路なるべし、折しも此處の邊は藤の眞盛にして、ゆかりの色雨に沾ひて、なまめける中にも世裏顔なる、いと憎し、或は白或は淡紅、名知らぬ花をもいと多し、漸く登りて半腹に至り、車を駐めて眺め渡すに、雲の往來忙はしく、西の峰を掠め來りて、忽ち東の巔を奪ふ、五月雨の頃の癖とて、溪間より立登る雨雲の、次第に山の上を遊びつゝ、樹をくぐり枝を宿として去りもやらず、やがて吹く風に連れて雲脚低く飛來りつゝ、瞬くうちに吾目の前も辨まへ難く、袂に入り懷に宿りて、冷なること氷を抱くに異ならず、高處より山下の雨脚を見下せば、斜に颯と吹下すさま、銀竹の籟を抛つが如し、四五年前徠天行重野逸夫と加賀の白山に登りし時も大風雨にて、雨は山下より山上に吹揚げ、笠の緒もちぎればかりなりしが、此處は群山各其高さを同じくするが故に、左程にはなし、車夫もさる者なりければ、山路の泥濘も厭はず、一歩一喘、立休るよひまもなく、やがてさし

に藪き絶頂にたどり着きたり、岸に立ちて山下を見おろせば、懸崖削るが如く、傑然として其幾千仞なるを知らず、さゝやかなる小川に沿へる人馬の形豆の如く、目眩み神昏する險阻に、覺へずも二三歩遂巡せり、前年確氷嶺にて、行客従吾脚下來と吟せしも、斯は色にはなかりき、顧みれば一茶店あり、其傍に一大洞の遷然たるを見る、此れ即ち關山の隧道なり、三嶋通庸氏山形に令たりし日、四境の路を開きて以て交通の便を圖れりしが、栗子關山等は其大なる者なり、當時人民賦課の重きに苦しみて、怨讎沸くが如く、抗議交生せしも、氏は屈する色なく、遂に此の大業を成せり、是より昔日四塞の山河蹄輪の馳驅に任せ、行客夢穩に山阻水涯を涉ることを得、隨ひて文化の光も亦盤底井裏を照すを得たり、民は與に其成を樂むべく、其始を圖る可らずとは、此等をや言ふらん、洞は暗黒にしてわやめも分かず、中はせより始めて前面一點の明を認めて蘇生の心地しつゝ、此の日の奇觀此に至りて全く盡きたり、

洞門を出れば雨をばふるのみにて、山の彼方は雲もなく、天いと晴れたり、茶店に憩ひて天氣は如何にと問へば、此處の邊は降りみ降らすみながら、山の下一里も行かば晴天なるべしと云ふ、天公の戯も亦極まれり、茶店より見渡せば、新緑蒼々として枝の風を迎へて動けるさま、翠の波とや云はん、山のわはひより麥隨菜圃も見えて、滿目皆緑なり、仙臺より此處まで十里、吾が志す谷地までは七八里の路程ながら、日は猶高し、急がば行かれぬ事あらじとて、車夫をばけましたつゝ立出でぬ、路險はしからねばいと早し、關山の驛をも過ぎて、楯岡に着きし比は早や日は暮れたり、茶店に入りて酒や

ある、飯はなきかと問ふに、怪しげなる媼おきなの聲して、今比來まして飯や酒のあるべきかは、とつぶやきて見も返らず、車夫は腹空しくなりて一步も引かれずと云ふ、余も困ふと果てしが、酒饒多く取らせん、疾く行かずやと云へば、一步も引かれずと云ひし車夫の勢よく馳するもをかし、三里ばかりも走りて最上川を渡り、夜の十時比谷地に着き、横羽南が許を助づれ、暫し此に筈を駐めつ、横羽南は正之助と稱し、嘗て我師成齋翁の門に遊び、又嶋田篁村翁に従遊せり、余を見て此は思も掛けずとて、俄に酒肴を命じ、夜深くるまで語り合へり、其より日毎に意を盡して待遇等閑ならず、田宮高梨など云ふ人々、此地の知人なるが、朝夕往來して、村醪尊榮に興を添へ、或時は山に登り水に臨み、或時は毫を揮ひて詩を寫し、又は新知の人々の徵逐に應じて、文酒の會に暇なし、此地四面皆山にして、五所山、關山、白面山等、蜿蜒委迤として北より東南に走れる、翠の屏風を繞らすが如く、峭然として群峰の間に傑立せるは藏王山にして、山靈の栖家にやめらんと見え、旭山月山は其西に峙立して、積雪せきせつ嶺ねを封じたる、白衣冠の神仙を望むにも似たり、右手に峙らて蒼翠滴るが如きは葉山なり、山後を歴して藏王山と相對するは飯岳いひだけなり、其間周圍凡そ六七十里、渺々たる田の面に雲の往來のありくと映れる景色、長閑さ言ふ方なし、谷地の西は寒河江村、其前面は楯岡天童にして、其間を流るゝを最上川と爲す、混々たる長流屈曲して神龍の大地に横はるが如し、此地海に遠ければ、白首の翁おきな猶海鮮の味を知らぬ者多けれども、鯉鱒等最上川より漁る川魚は、其味甚だ美にして、齒牙尤香ばし、最上川の冠詞にいな舟と云へるは、流急に氷疾きこと富士川にも劣らで、舟

の下流より廻らんとする時、船首ゆらくと動き、頭を掉りて廻るを否むに似たればなりと或人の云へり、序なれば記しつ、氣候は仙臺より寒し、綿入に羽織を借りて着たれど、猶肌寒き心地す、梅雨の季節には似て、雨いと少し、折しも盃時なれば、家々庭にわ放さまで桑の葉取ひるげ、晴日深窓風雨響の趣あり、山中曆日なしと云へりし如く、暮春初夏一時に來りしかと思はれ、此の月廿日頃より空曇りがちにて田植忙はし、予が谷地竹枝十首の一に、  
 小樓三四繞疎楊、夜久村郎窺短牖、勿恨吾來相見晚、春風六月挿秧忙、  
 と云へりしは實を記せしものなり、惣じて此の邊は松前節とて鄙びて面白き歌流行す、年若き賤の女の酒に待りて興に入りし比、濁みたる聲張上げて歌ふ、いみじう哀深し、又尺八流行し、松前節に連れて吹きすさぶ、いと哀まざりて、人をして故郷の思に堪へざらしむ、口に浮ぶま、  
 欲寄相思夜上樓、新愁一片入雲悠、乞休明月吹悲曲、萬里行人不勝秋、  
 天いと晴れし日、近き邊の村落をも遊覽せばやと思ふ折、不圖東京を立出る時、阪部生が和合村の清野氏を尋ねよと云ひしを思出で、破笠片手に立出ぬ、和合村は谷地を去ること六里、米澤に通ふ道の邊の一山村なり、谿川をいくつともなく渡りて、慈恩寺村をも過ぎ、臥龍橋の奇絶をたへえて、詩を思へども一句をだに得ず、猶幾村里を打過ぎ、畦道を傳ひ、小高き丘を下りて左澤と云ふ處を過ぎ、棧摺橋を渡れば枕流亭と云ふ旗亭あり、前に丘あり、其間を流るゝ谷川の水はいと清く、丘に沿ひて曲れる處を堰止めて築と云ふものを作れり、築は木もて格子を作り、其下に竹もて編める築を置きて流



れ来る魚の格子より落入るを受くるなり、右手に橋あり、長虹の如く、其下を流れ来る筏の丘下に至りて頓に曲折しつゝ、一棹を勢せずして影も見えずなりゆくさま面白し、やがて富澤村を過ぎ、晝過ぐる比和合村に着きて、清野氏を訪ふ、氏は昔て大學に遊びて醫を學び、今は糞糞を繼ぎて山村の司命たり、折しも例の養蠶にて、蠶棚室に滿ち、桑摘む下男ども忙しげに立働けり、いざとて一間を掃き清めて請じ入れつゝ、主人振いどまゆやかなり、打連れて鈴木某を訪ふ、地押に行きて在らず、村端の一旗亭に入りて一酌し、誰彼こる車履ふて諸共に左澤に至る、左澤は此の邊の小都會にして、桑市なほもある處なり、但或る酒樓に登り、例の松前節を歌はせて盞を擧げ、地酒の猛烈なるに酔倒して晩に及べり、翌日清野氏に別れ、寒河江を経て谷地に歸れり、

斯くて谷地に留ること十四五日にもなりぬ、今はとて羽南に別を告げて歸途に上りしに、後の方にて客人待せ玉へ、こや喃々と呼止むるものあり、振返り見れば前の日羽南の紹介にて相知れる森谷ぬしの家の子なり、是より先森谷ぬしに招かれし時、座に良隨と云ふ和尙も居合し、が、此の地に來まして浮嶋見給はでは、崑岡に入りて玉を拾はぬに等しとて、人々のいたく遊覽を勧めらるゝに、日を期して同遊すべしと約し置きつゝ、其後良隨のがれぬ用ありて鹽釜に赴き、日を経れども返らず、己も前約を忘るゝにはあらねども、今は餘に倦みて都の天なつかしく、歸を急ぐことゝはなりぬるが、彼の男 近きて、此は客人には前日の約束を忘れ給ひしか、なとて歸を急ぎ給ふぞ、良隨の歸らんまではまげて逗留し給へと森谷ぬしのわりなく申させ給ふに、此のまゝ御身を最上川の彼方にいなして

は、小生いかばかりか恨まれん、いざ歸らせ給へとて啣言がましう引止むるに、人の情にもとらんは心なしと思返して、二度の嫁入すらん心地しつゝ、森谷の家に赴けば、待もうけたる主人は、此は早かりき、先生には東京に返らせ給ひしと聞きしに、いかなる飛行の術ありてか、斯くは往來の速なる、と打戯れてしたり顔なり、是より毎日の發應一方ならず、藻川の鯉、糸江の鮎、都人の得知らぬ味いと多し、主人は此地の豪農にして、性質篤實、慈悲心深く、此の邊の小民其恩庇に預らぬはなしとぞ、家を古楓園と號し、俳名を釣虹と云ひ、風流の道にも暗からず、常に客を愛し酒を好み、母屋の傍に一棟の土藏あり、其傍なる一室を客間と爲し、僧俗の此に飲食起臥する者絶へず、谷地の小孟嘗なり、予昔て詩一篇をものして之に贈れり、曰く、

戴簪萍游布履輕、天涯到處結鸚盟、美人醇酒吾生命、和氣春風君性情、坐有幽僧談不俗、庭多古木境愈清、世間無限仲々事、付與燈前一巨甍、

其番翁模五鳳は年六十有餘、壯にして京攝に遊び、書名あり、尤花鳥に巧なり、扱待てせもく良隨は返らず、兎角して又も十三四日をも遊び暮らしつゝ、借りて着たる羽織をも袷も脱ぎ棄て、今は更衣の好時節と爲りぬ、或る夜森谷長嶋等のの人々と酒飲みて一酒樓に打臥したるに、其翌朝良隨歸れどもと知らせ來つ、行きて見るに法師頭かさつゝ、歸の遅かりしを打わびけるに、人々は衆生濟度の身とを以て人困らせの出家かなと怒むもあり、其は見まれ、約束の人々打揃ひし上は、明日はつとめて打立んとてせよめき合へり、

明くれば七月八日なり、甲斐々々しく出立つ、一行は森谷釣石、良随和尚、霞芳と云へる俳人、福田某、外に森谷の家の子二人と、子を併せて七人なり、羽南及び田宮長嶋等は障る事ありて得ゆかず、朝まだきに谷地の里を跡にして、道芝の露踏分けつ、田の畦を傳ひ、小川を打渡り、左澤にて晝餐ものし、富澤村に着きし比は午後二時を過ぎたり、此處より路二に分る、左は和合村に行き、右は大谷村にゆく、大沼の浮嶋へは大谷よりするを順路と爲す、大谷村までは野路にて、大谷以北は山深く、路峻しくして車通せず、本道は歸るに便なれども、登るに利ならず、横道は峻はしけれども登るに便なり、因て横道を取る、此道は山腹を切りて溝と爲し、大沼の池水を引きて田畝に灌ぐものにして、其溝に沿ひつゝ細道をゆくなり、仰げば懸崖の腹に踞まれる岩石、今にも落ちなん風情おそろしく、俯すれば絶壁の下に潺々たる谷水の響幽にして梢の嵐に咽び合へり、只一筋の小徑の前面に榛荆茂り合ひてあやなま闇をなし、徑崩れて爪と踵とを接しつゝ猶渡り苦しき崖を傳ふ、幾度となく繞り曲りてたゞゆるゆきはさに、山漸く深くして巨驛の住家もやと疑はれ、人のけはひだになくして漫に物すとし、人々足疲れて暫恨然としてちりちり折しも、一尾の耕鯉小篠が根より遊ぎ出たり、供人の血氣なるが、よき獲物をさんなれと云ふより早く、仕込杖抜きもちて突きしに、鯉は其鬣を刺されたり、良随は見も返らず、よしなき殺生よとつぶやく、森谷ぬしも供人を叱り懲らしつゝ、又もゆく、頓て溝は盡きたり、此より胸突くばかりの坂にして、萬を傳ひ木の根を攀ぢ、喘ぎ／＼登るとすれど、疲れ果て、小なる岩根にも蹶くを、扶けつ曳れつ、漸くにして稍平なる山腹に出たり、一息つかばやとて

携へし瓢を酌み、行厨を開きて握飯食ふ、其味言ふべうもなし、又も登りゆくに袖小屋あり、路のはきを問へば十四五町と云ふに、去らば續けと云ふまゝに、息絶えんばかりに走りて、やがて大沼神社の鳥居の下に着きたり、

此は大沼の縁起を尋ぬるに、人皇四十代の帝、天武天皇の御宇、白鳳年間役の小角の開基にて、菴稻魂神勧請の地なり、今は縣社にして稻荷神社と號す、此の山に池ありて大沼と云ふ、池の形畧大の字に似たるをもて名けしとかや、池の中に六十六の小嶋ありて、我日本の國にかたどる、其島時々水面に浮游す、昔日實方中將浮嶋を見給ひて、

四の海波靜なるしるしにや

おのれと浮きてめぐる嶋かな

と詠み給ひしとぞ、此の事人々の語るを聞きて、何條去る奇しき事あるべき、例の處自慢にこそと心の中に思ひひがめつるものから、勸めらるゝまゝに此の地に詣でしなり、

扱鳥居を入りて、石階いくつとなく登りて見るに、樹木皆老ひて、枝葉天を掩ひ、森々鬱々として神々しさ言ふ方なし、祠は言甲斐なく破れ、軒傾ぶき椽壞れて、いと物哀なり、去れども何ぞなく神さびて、五七の桐打ちたる金色の光、鈴の音、幽に威徳を顯はせり、階下より伏拜み、祠の右手を下れば細やかなる徑あり、繪圖には此に鳥鶴橋といへる橋あれども、取棄てたるにや今はなし、又小徑を登れば松の林あり、林の下に一面の玻璃鏡を開く、是ぞ大沼の池なりける、吾より先に人ありと覺しく、

われよ〜と叫ぶを聞き、急ぎて池の面を打眺むるに、一の小嶋二疊じきばかりなるが、上に葦生茂りて、燕子花一本二本咲出でつ、水の上を香ながら彼方此方に遊び廻る、扱も〜と大聲揚ぐれば、後れし人々も集ひ来て、阿と叫びて脇目もふらず、實に世に嘘言は無かりけりとして、日頃の疑も雪の日に遇ふが如し、暫くして風もなきに、又もや左手の岸より小嶋一三疊じきばかりなるが、葦の茂れるまゝ自ら遊び出で、前の小嶋の邊に着き、少時ゆきもやらす友待顔なる折しも、右手の方より小さくして長き嶋浮び出で、三嶋一處に集ひて、或は離れ或は合ひ、西へ東へ心わりげの神遊び、面白しとも警ふるにもなし、予れやがて吾に返りて四方を見廻すに、松林鬱々として千歳の緑を湛え、寂寛たる神境鳥の音もなし、林の彼方なる茶店には、見物の男女三人四人集ひ居たり、池は湛々として藍の如く、其状實に大の字に似たり、岸は四面皆葦にして、燕子花處々に折知顔なるもをかし、此は皆浮嶋の休息せるものなりけり、長さ三四尺ばかりなる緋鯉折々水の面に潑刺として躍り、浮嶋を學ぶにやと見えて四五羽渚に遊べり、茶店に腰打掛けて猶目も放たず守り居たるに、茶店の老婆酒の香を嗅ぎつけて、やゝ殿達よ、姐にも酒を振舞ひ給へ、浮嶋の昔語りて聞かせ申さんと云ふ、此は面白し、俺まで飲みて物語り候らへ、とて蓋とらすれば、老婆打喜びて舌打しつゝ、抑此の池は浮嶋明神の鎮守まします處にして、嶋の数は六十六、日本國にかたどり、あれなる右手の嶋を葦原嶋と申す、此は鎮守なれば動き給はず、嶋の浮ぶは池中に白蛇ありて神託を承け、嶋を負ふて遊ぶなり、此の山中にして池の面に枯葉一つ候はぬは、毎朝乙姫君の掃き清り給ふに因れり、扱前岸なる二本の松をお

狩屋と申す、此は實方の中將游覽の跡にして、浮嶋のけしきの不思議さに、扇を開きて日本一日本一と唱へ給ひしに、池水俄に波立ちて、烈風雷雨凄まじく、波此の松の枝に及びしかば、波揚の松とは名づけられたり、中將やがて扇を開き、三國一三國一と叫び給ひしに、風雨忽ち収まりて、波靜に池平になりしとかや、斯迄靈驗いやちこなれば、遠近の信仰今も昔に變り侍らず、あなごぞまし、お池の長物語に、酒は留主になりぬ、今一盞をど請ひて呑みはしたり、

橋南銘が浮嶋の記にも、終日見居たれどもいかなる故と云ふことを知らずと云へりし如く、浮嶋の事は昔より神靈に託して、其理を究めしものあるを聞かず、或は枯芝枯根の固着したるが、年を経て葦などの其上に生茂りけるに、池の水の流動につれて浮ぶなりとも云ひ、或は葦の生茂れる岸をいくつにも切離ちけるに、歳を経て其根腐りて軽くなりしものなりとも云ふ、實にも草木の根の腐朽せるより、自ら軽やかになりて水面に浮び出でつゝ、天然の浮根舟を爲し、久しきを經て土泥其上を掩ひ、風葦などを生せしにや、空曇りて風靜なる時は、嶋の浮動すること多しと云へり、左もありなん、風吹く時は岸に吹きつけられて、游動の力を壓せられ、風靜なれば縁に池水の流動に伴ひて、薄弱なる浮游の力を順はすなるべし、風起りて蘆葦を吹けば嶋自ら動く云へるは、實地を見ざる臆説に似たり、去れど何が故に斯くまで數多の浮根舟出来しか、白鳳の昔より今日に至るまで、其名と共に存じて亡びざるは如何なる理かある、老婆が云へりし如く、誠に神靈の爲す業にもや、いと訝かし、同行の福田某は是より先き二度も此の地に遊びけるが、人には浮嶋見つと言ひしも、其實はいつも折あし

くて嶋遊を見ず、見たるは今日を始なる、と吾れ知らず白狀したり、南嶽も日暮まで守り居たれども、それと云ふべき事もなし、早や日影も西山に傾ふき鳥は樹に宿し、雲は高嶺に歸ればいと物すごくなりゆくはせに、空しく大行院に歸れり、と嘆ちて其翌日やうく浮嶋を見たるよし遊記にものせり、昔より日によりて動かぬ事もありけり、余は五百里外の游子にして、嶮を冒して杖を曳きながら、得も見ずして歸りたらんには、左こそ本意なく、浮嶋は名のみなを筆にものし、人にも物語りて、靈域神境の奇を榛莽荆棘の下に埋没せんには、いと口惜しかりけんに、浮嶋の神も心ありてか、此の奇絶を眼前に示し給ひしぞいと畏さ、たとひ文は南嶽に劣りたりとも、幸は之にまされり、嗚呼なれども余が筆を借りて僻遠の奇勝を世の人に知らしめんとの神慮にもや、と思へば我ながら心動きて文氣躍れり、南嶽の記面白からぬにあらねども、いたく略しねれば、世人聞知らぬも多かるべく、知れるも其勝を詳にするもの少かるべし、去れば靈境徒に奇を埋めて、千言万語分けて、尋ね入るものもなく、天下の勝を松嶋見山の一句一杯に奪はれぬること又なく口惜しけれ、事新らしく言ふまでもなければ、世に時めける富貴の人權勢の輩、概ね皆斗筭の小人にして、柴折戸の中に海藻のやうなる衣をまとひて、大道を爐頭に講ずるものにてこそ、濟世の俊傑はある習ひ、隱見顯晦の理は山も人も免れざりけり、など人々に物語るうち、浮嶋は何地ゆきけん影も見えず、懐の玉を落したらん如き心地して悔めども甲斐なし、日も早や山の端に暮さ、さうでも物すごき深山の何處ともなく暮れ果て、いとどびしきに、いとどて今宵の宿に赴きぬ、

此の夜は祠官の家に宿すべき約なりしかども、さゝわる事ありて村役人の許に宿りぬ、人々歌なり句なり家土産にせん、とてとさまかうさま首をひねれども、一句も出でず、皆疲れしまゝいつとなく軒の聲のみ高し、余は良隨法師と柏餅して臥したりしが、のみに攻められて寝ねられず山里は猶寒くして蚊の援兵なきは幸なりけり、

翌九日大行院の賣物見ばやと云ふもありしが、家路の急がれてや、歸らんと云ふもの多くして遂に歸路に就きぬ、朝霧深く立籠りて、道の邊の露を濕らし、心地清々しく、さのふの山路の苦には似ず人々元氣よく笑ひとよめきつ、池の上に出れば、老婆が云ひつる如く、乙姫の掃き給ひしにや水の面湛然として油の如く、枯葉の一片だに浮ばず、嶋は眠まだ覺めずや、皆岸につきてあり、稻荷の社伏拜みて別を告げ奉り、歸途は本道を取り、下りつ上りつ、辛ふじて大谷村の上に出づ、此より米澤の小島海山、又は藏王山など遙に右手に見え、朝日山も遠く其頂を露はせり、左澤にて酒飲み、酔脚踏々として燈の見ゆる比谷地にたどり着きぬ、森谷の家人等出迎へて、山は如何に、浮嶋は見給ひしやなど聞ふに、去ればとよ、吾等は宿世如何なる幸やありけん、池に着きて待つ間もなく云々なりきなど、誇りがに答えて、彼一口此一口、物語いとかしまし、此の行の路程は谷地より左澤まで二里、左澤より大谷まで一里半、大谷より大沼まで二里半、都合七里餘にして險途其半に居り、十里の勢はあるべし、

三日過ぎて足の痛も去りぬ、明日は打立んと云へば、森谷田宮及び羽南等、去らば別の酒酌まんとて

風月樓と云へるに登りぬ、此度は谷地の酒も全膏を限なりとて盃をめぐらせば、例の給仕の賤の女鼻打かみて、明日はお立かお名残惜しや雨の十日も降ればよいと云ふ俚語を節哀れに歌ふ、一座何とならしめり勝なり、明くれば十四日旅装して人々に別を告ぐるに、羽南の老父母門邊に立ちて、二度目は初に比べて路の近くなるものなれば、又も來ませ、よき酒造りて待ち侍らんとていと懇なり、羽南の家は酒造を業とすればなり、見返勝に立去りて森谷許ゆけば、主人は猶とにかくと止めん風情なるを強ちに別を告げて立出づると、森谷は羽南と共に最上川の渡場まで見送れり、いつまでも名残は盡きじ、去らばとて舟に乗れば、渡守は早や中流に漕ぎ出でつ、岸にて何やらん物いふさまなれど、遠ければ聞へず、岸に着きて車に打乗りて、兩岸のゆく者送る者互に帽を打振りて別れぬ、此の日空曇りて雨氣ありしが、關山に着きし比颯と降り、去れど驟雨朝を終へずして晴れたり、夕方仙臺に着き、再び子殿の寓に投ず、

斯くて次の日は仙臺の諸友に暇を告げ、汽車にて福嶋に戻り、翌日は遂に奥の山羽の水に別れて、又も紅塵十丈の東京に歸れり、破机にもたれて紀行をものするに、烟雲筆下に練結して、身は猶關山の洞門の邊に立つ想しぬ、

此は明治二十一年の夏の初つがた始めて游歴と云ふものを試みし時の路の記なり心も詞も稚くて浮嶋の秀靈奇幻を盡すに足らざれど一劍飄零の際故人を訪ひ靈境に遊びし遭遇の奇を筐底に没するに忍びず是れ取出して紀行八種の第一と爲し、所以なり卅一年夏大磯客棧濤聲如鼓處に於て天

●雲の行方

好 伴

世の要事としのふ摺、陸奥の旅より歸りてこのかた、都のたゞすまぬいとわびしく、夜も夢だに結びあへず、七夕祭もすみてやうく夜寒になるはせより、四面楚歌の聲は一身に集りぬ、天道はいざ知らず、戦の罪に因りて埃下に陥りし我身、今は是迄なり、

あすよりは都の塵をよそにして雲のゆくゑに身をやまかせんとて旅の用意する折、兼ねて深く交れる山内愚仙も、諸共にゆかばやと云ふ、愚仙は洋書に巧にして、余が著作の挿畫も其手に成れり、尤寫景に妙を得たれば、此は好き同伴なり、文書の道は變れども、何れも同じ筆の筆毛、行方定めぬ同行二人、今日は必ず打立んと、二人三人の朋友に別を告ぐるに、例の氣まぐれもの珍らしからずとて、袖引止むるものもなければ中々に心安し、中に旅の用意は如何にとて風呂敷包引はせしものあり、尊蘇詩抄二冊と筆硯の外に一物なかりければ、ひたと呆れて物も言はず、兵法に言はずや糧に敵に因ると、山靈水伯の待ち給はんに、いざとて明治二十一年九月六日の夕間暮、上野より汽車に乗る、早や相圖の鈴打振れば、車は名残惜し氣もなく走り出でぬ、家弟時輔停車場の柵にもたれて見送りぬ、都も遂に住家ならねども、流石に忍ばるゝもの東台墨陀の風月のみならず、

旅 装

王子の祠を伏拝み、夕日の影の赤羽や、風もなきたる浦和の里、再びめぐり大宮の、驛を烟の中に過ぎ、久岐栗橋古河小山、二十八里を三時が過ぎに走りて、初更の鐘をうつの宮に着きて旅宿に投じ、翌朝同縣人なる小野昌速氏を訪ふ、款待大方ならず、其寓は明神山の下に在り、庭園極めて廣く、泉石樹竹、又風流を極め、折しも垣に庭前葛の花開き、百日紅も亦盛にて、竹垣の此方に萩の咲きこぼれたるも可笑し、樓の前面に蜿蜒たる荒邱あり、此は城跡なり、東南の雲烟微茫の中に一螺の遙髻を認むるは筑波山にして、遠く青を几席の間に送り、西北の窓より望めば、見山の翠顔、晨粧を理めて朝日に笑ふさま、大真出浴の姿とも見ん、樓高ければ欄干に憑りて市街を見渡すに、家居打續ける中には、白壁蒼臺のいと宏壯なるも見ゆれど、惣じて之を評せんには、只是れ一道の長驛のみ、殊に大道に游女屋の軒を並べたる、いと見苦し、明神山に蒲生君平の建碑ありと聞きしかば、登りて見るに、表木ありて石なし、山は市街の北に在りて、古城城と相對す、兀然たる一杯の土なれども、其下は平地なれば、稻田の色つきたる、遠近の山の横雲を帯びたるを一目に見ゆ、夕方大郵芳樹ぬし訪問せらる、師範學校の教諭にして、音楽に精通せし人なるが、此の夏中禪寺に遊び、舟を湖上に泛べて、糸竹の合奏ありけるとぞ、風流想見すべし、

八日より雨降續きしかば、垂れ籠めて日を送り、或時は大村高城奥平など舊知の人々と打集めて物語し、或時は小野の老殿山装翁と風雅の道を論じて、腰折の恥をさらすも旅の興とや云はん、愚仙は翁

の肖像を寫すに暇なし、

扱も小野氏の盛を得て旅やう／＼調ひしかば、笠股引などの用意も出来つ、十三日の夜は空晴れ渡りて月影さやかに、高城ぬしに招かれて酒酌かはして別を惜ひ、翌十四日朝まだきに備して、人々に名残を惜みつゝ、立出づ、大宮にて高崎行の汽車に乗代ゆ、車中の放吟に曰く、

翻々矣彼都人士。役々畢生爭青紫。唯知人間有膏粱。不知天下有山水。離離慚吾與之居。短笠野服拂袂起。山自高兮水自流。問雲野鶴去悠々。

合 宿

横川に着きて鐵道馬車に乗代えし時は午後二時なり、予れ今年の春、信州善光寺に詣でし時は、鐵道馬車なかりしが、世は瞬く間に便利と爲りぬ、去れを車通くてもどかし、登り果て、いさ／＼旅を信濃路に入り、せめて追分までと思ひしに、愚仙は淺間の夕景色に見とれて、早や寫生に取掛らんとするに、詮方なくて輕井澤の怪しき宿屋に一夜の宿を求めつ、客人込み合ふて候らば合宿にても苦しからずやと云ふに、今更否とも云はれず、入りて見るに一室に枯木の如き翁と旅商人めさし男三人、先づ坐敷の隅に城廓を構え居たり、膝組合せて物語す、翁は東京の淺草邊の石檢屋にて、外の三人は越中の賣藥商なりけり、賣藥商の云ふ、我等の如き旅商人は、すべて八月に故郷を出で、來年の二三月頃までに、關東數ヶ國の得意千三百戸づゝを廻る事なるが、賣藥も昔の様には賣れぬのみか、

代金も集らず、雑用のみ多くなりて、妻子も育みかねつ、と啣つも哀なり、翌朝旅商人どもの汽車に  
をくれじとせよめさつ、立出るに驚かされて、生來稀有の朝立、草鞋の紐もさぐりながらに穿く、  
沓懸にて朝日さし昇りぬ、

村祭

追分にて道二に分る、右は越後路、左は東山道なり、中山道とも云へるは、東海北陸の中間にして山  
路なればにや、美濃に中山と云ふ處ありて、其處へゆく道をこそ中山道とは云へ、東山道をも斯く稱  
するは誤れりとも聞さしか、今は惣じて斯く唱ふるに似たり、淺間の畑に送られつ、ゆく、追分の原  
に名も知らぬ草花多く咲亂れたり、御田井と云ふ處にて去年温泉を發見したりと聞き、往きて見るに、  
十數丈の幽谷に小屋あり、窪澤の湯と云ふ、溫度ぬるく、薪を用ゆとぞ、浴せずして去る、岩村田に  
て班餉し、車履ふてゆく、千隈川を渡りて桑田村に至れば、秋葉神社の祭なりとて、鼓を打ち鉦を鳴  
らし、年若き男等の酒に酔ひてよろめきながら、だみ聲あげて歌ふさま賑なり、女子ども今日を晴と  
着かざりて、新田の娘も残んの奥齒を染め、古宿の娘も標招の髪を結ひて、ぼこり顔なるも太平の象  
なれや、山里の人は斯る時にこそ一年の苦勞を忘るらめ、此夜は望月と云ふ處に宿りぬ、

笠取峠

十五日昨日の疲に寝忘れて朝遅く立つ、茂田井蘆田など云ふ村里續きて雞犬の聲相聞ゆ、破垣をまど  
ふ朝顔の花落ちて葉のみ茂れる、自ら榮枯を示し、草の屋を掩ふ桑の樹の蔭鬱々たる、一家終年の衣

食と見ゆ、折ふし糸繰の比なれば、家毎に繰車の響高く、賤の女の二人三人集ひ居て糸たぐりつ、笑  
ひとよめく聲す、笠取峠にて茶屋に憩ひしが、愁仙取敢へす

時雨ふるあしたの里も晴れ渡り淺間面出す笠取の峰、とこじつけたり、此處は遙に淺間山と相對し  
て、手もて頂を撫でんばかりなり、茶屋の老婆奇石を示して誇りしかども、玉石何れとも分かず、峠  
の下なる長久保と云ふ處に標木あり、距東京鎮臺四十九里、距長野縣廳十五里餘と記せり、遠く來つ  
る心地せしか、東京へ五十里は隔てざりけり、落合村にて雨に遇いしかを程なく晴れぬ、

落馬

望月より和田まで五里なり、此より和田峠の山路なるが、足痛みしかは馬を雇ふて乗る、鞍の兩方に  
四角にして井桁の如く炬燵のやぐらの如きものを結付け、兩人各其一に乗る、其狀八犬傳の尺八力二  
に似たり、之を「こうじ」と云ふ、格子なるべし、弓手に明神山をながめ、依田川に沿ふて登る、村雨  
さど降來しかば茶屋に憩ひ、晴間に又も格子に乗りしに、何とかしけん鞍はする、馬の横腹に垂れ  
兩人とも真逆さまに落ちぬ、よき大將と引組みての此狀ならば兎も角、愁仙が上に落重りての見苦し  
さ、怪我なきこそせめてもの幸なれ、とて苦笑しつ、又も乗る、此の日は諏訪泊と思ひしかど、馬士  
の肯はされば駄止せしが、此の過につけこみ、斯く客人に落馬させては馬士の役目すまじ、其罰と  
して諏訪までゆくべしと責むれば、馬士は年の比十五六なるが、泣んばかりに、我身は糞子なるが、  
日頃些少の事にも目に角立て、打叩かれ、昨日も禰神一枚にて追出されんとせしを、巡査さまのお世

話にてやう／＼わびて事すみぬ、今日も時までの言付なるを、諏訪までゆきて歸の遅くば勘當沙汰なり、許し給ひてよと云ひて打わびるに、思はずも袂をしぼり、たどひま／＼しき中にも、親の云ふことは負かぬものぞ、去らばよし／＼とて、今更おとしつすかしつせし事を悔ひたり、日暮る、比東餅屋に着き、木曾屋と云ふに宿りぬ、此處は和田峠の絶頂なれば、夜深くるまゝに襟元寒し、

香爐巖

十六日朝日さし登るころ立出づ、雨を経たる山々翠を添えて朝景色殊によし、此處は中山道の難所なりけるが、明治十五年頃道普請ありしより、荷車すら通ふやうになりけり、山深くして霜早く、溪川の楓薄紅葉せり、半里下りて西餅屋、一里ゆきて樋橋の入口なる島の上に、一基の石塔あり、由ありげなれば草踏分けてゆきて見るに、碑面に不動院全海横田己之助岡田久次郎以下六人の名を記し、碑陰に元治元年甲子十一月廿日討死とあり、此なん筑波の殘黨武田伊賀以下、兵敗れて京に走る道すがら、諏訪松本勢と激戦せし跡なりける、墓の上に巨巖あり、之を香爐巖と云ふ、水戸勢此の巖を楯とし、樋橋より進める敵を避けつゝ、砲丸盡さし比不意に討ちて出で、遂に圍を潰して走りけるとぞ、不動院は今辨慶とて驍勇無二の者なりけるが、敵敵多討取りて切死しけるとなり、一時を賦して之を祭る、

風雲昔日學陳吳、八千子弟雄骨枯。不渡烏江見父老、猶鼓餘勇試馳驅。敵袍折戟走且倒、指關直向東山道。咄阻我行何爲者、叱吃瀆園血染草。秋風時節我此來、英雄暮年獨徘徊。怪力無前今辨慶。

空作香爐巖下苔。勿將成敗驗豪傑。亦何區々責末節。死雖異處志則同。千秋之下傳偉烈。君不見炎漢事業榮可觀。陳吳之功豈讓蕭韓。

此の塚より五六町下れば樋橋なり、此より諏訪郡に入る、

諏訪湖

一里半もゆきて、前面忽ち澄然たる一泓の碧玻璃を見る、此れ即ち諏訪湖なり、四山環繞の中に油を漾えて翠黛の粧を照す、左手なる連山の一角より遙に芙蓉の八面玲瓏たるを見る、其左に逶迤たるはなまよみの甲斐の八ヶ嶽なり、山又山を越え來りて、此の清明秀媚の境に遇ふ、愚仙と相顧みて嘆賞己まず、路の傍に年古りし杉林あり、此ぞ當國一の宮諏訪大明神宮なりける、祠殿いと壯嚴なり、伏拜みてゆく、下諏訪に着きて、龜屋と云ふに入りぬ、湯の名所なれば到る處に湧出で、共同の湯盡數處あり、富めるは内湯をしつらへるも多しとぞ、

十七日上諏訪に赴きて岩木某を訪ふ、諏訪宮司の子にて嘗て大學に學びたりと云ふ、此處の邊の山々には武田の古城跡も多く、某寺に越後少將忠輝の墓もありと聞きしかども得ゆかず、當國には名所古蹟も少からずとて、信濃地名考と云ふ書を出して示されしも、熟讀の暇なかりしは遺憾なりとぞ、

諏訪は無二の寒地にて、朝な夕延の氷ることあり、鐵火箸の手に固着する事もありて、極寒の候には湖水の氷厚さ八寸ばかりにして、人馬湖上を往來すること自由なり、去れど湖中にも温泉數箇所湧出で其處丈は冰らずして自ら穴を爲せり、之を釜穴と云ふ、風激しく釜穴に吹る入れ、霧々として雷



鳴の如く、叫號の聲終夜絶へず、釜穴の邊は湯氣の爲に氷自ら薄きをもて、深夜なほ近道を貪りて湖上を行く者、往々誤りて薄氷を蹈み、釜穴に葬らるゝもの年毎にいと多し、と岩木氏の物語なり、世の危きを薄氷を蹈むに譬へたるも理にこそ、往時は舟直に諏訪の社の門前に着きたりけるも、年を経るまゝに陵谷の變を免れずして、湖面自ら縮まり、烟戸稠く、田畝開け、明神の鳥居より數十町歩の渺々たる青田を見るに至り、今は三里に足らざる周囲と爲れりと、同じ人の語れりき、實に桑滄の變こそ限知られぬ、牧童馬を帝王宮殿の墟に放ち、樓閣臺を曠原平野の上に連ぬ、山裂けて城を埋め、海溢れて市を没するは、世に其例多かり、萬劫の末の世如何かなりゆくらん見まほし、此の地の人、概ね皆蠶糸を以て生計と爲す、聞く製糸の釜數四十に餘り、組合廿五ばかりに及ぶとなん、

月 明

晝過る頃より打立ち、歌舞の湖にも別れて鹽尻峠を越え、三里ゆきて鹽尻に宿る、此より筑摩郡なり、十三夜の月さやかに野山を照らし、心ありげに旅寐の床をさしのぞくに、寢よどの鐘は聞けども戸も閉さず、折しも鄙びたる歌に交りて、糸の音の耳近く聞ゆるは、遊女などの寝もやらぬ旅人ありとしも知らぬにや、雲霧萬里を隔つる故郷の空は何處ぞ、都にも思ふ人なきにしもあらず、東西各天に相別れて、同じく眺むる雲井の月、さやけき影を傾とや見ん、常には山河を跋涉して英華の氣を吸ひ、昂然として野鶴を學べる身も、月見ては心弱りぬ、愚仙例の長笛を取りて、九州鈴墓の一曲を、妙に面白う吹さすふに、今まで垣根にひせばし虫も音を止め、山の端に宿れる雲も栖を出んとせ

り、思に堪へがたければ襖引かつきて臥しぬ、世の旅する人、努寢忘れて月な眺めと、

柴 宮

十八日宿を立出んとして西北の方を眺むれば、群山の上に高山ありて天半た聳えたり、名を問へば飛信の境なる館ヶ嶽なりと云ふ、雪は終年消えずとなん、十町ばかりゆきて右手に小やかなる社あり、此なん柴宮なりける、南朝の比、信濃は無二の宮方にして、後醍醐第五の皇子宗良親王、一度は遠江の方より、一度は上野の新田より、諏訪に下らせ給ひて御方をかたはせ給ひしかば、信濃宮と稱し奉れり、此の柴宮こそ親王の當時の御坐所なりと云ふ、柴もて葺きしより斯くは名けん、親王に仕へまつりし女房の、後剃髪して行ひすまし、故蹟を、尼堂が原といふよし聞さしかども、此邊はすべて桔梗が原といひて、尼堂の名を知るものだになし、人家は皆玄關構にして、竹籬を垂れたり、賤の屋には似てみやびたるも古の遺風を存するにや、須磨の浦の戸毎に籬を垂れしをも思合されていとゆかし、此處より洗馬まで一里半なり、

洗 馬

洗馬の入口に一老松あり、洗馬の脇松といふ、古き傳説に

せばの脇松ひではの青木お江戸屏風の書にござる  
ひではの青木とは如何なる事といふにや、お江戸屏風の書にも出ではこの名所なるを誇れるなるべし、此處にて兩道に分る、左は中山道にして、右は北國往還なり、西の方より來る人の言葉や、京め

けるに、東京を去るとの漸く遠きを知れり、洗馬の下を流るゝは犀川の上流にして、川の北方に清泉あり、木曾義仲の戦馬を洗ひし古蹟なりと云傳ふ、

せばちよ出離れて太田の清水飲んで別れた事もある

といふ土語は此處なりとぞ、此の邊より男女皆袴袴を穿きたり、此は野原を驅けるに便なればなり、會津邊にて「猿袴」といひ、山形邊にて「門閉」と云ひ、米澤にて「マタシヤレ」と云ひ、此の邊の葦原にては「半カマ」、福嶋にて「カルサン」と「ンンヨム」とも云ふよし、昔同物にて名のみ變れり、

木曾路

此より西は名にし負ふ木曾路にして、深間をゆくものなり、櫻澤と云ふ處に橋あり、櫻竹相交りて自ら番圖を成せり、昔日此處を尾州領と松本侯領の天領との境と爲す、茶屋にて名物のお六橋を賣る、實川平澤の邊に久米おとすべし尤物多し、水の清らかなるに因れるか、古の巴をも思起しつ、山いよく深し、冬は鹿或は熊の獲物多しとなん、奈良井に至りて垣途盡きたり、

薫風樓

此より鳥井峠の山路なれば、彼の落馬にも懲りて、又も馬を雇はんとて、越後屋といふに入りに、主人は目ばかりも余が被れる笠の上に、何やらん書きしを見て訝る面色なりしが、頼て走出て頻に一泊を勧む、急がぬ旅なれば遂に杖を留めぬ  
主人の名は藤兵衛とて、頗る好事の人と見え、やがて予等の室に入來りて、種々の物語し、愚仙が書

と善するを聞きて肖像を頼み、且つ予にも毫を揮へど紙筆なんぞ取出でたり、性來書畫を好み、風流の士と見れば家に留めて揮毫を乞ふを樂と爲すなぞ物語る、誠山中の奇人なり、家を薫風樓と號し、山に對し水に臨む、愚仙やがて樓上の欄目を寫す、其上に

溪邊秋來早。由高日出暈。把毫樓上坐。雲水是吾師。

と題しぬ、所藏の書畫を展覽す、中に明人某の書、筆氣遒勁、飛雲激浪に似て、いとめでたし、主人の紹介にて小學教師北原某訪來り、夜深くるまで物語す、大雨曉に至る、

翌廿日風雨尤甚し、今日は舊曆八月十五日なり、客中の中秋無月は、なか／＼と物思はで心安きに似たれども、旅旅に暗闇を待つも亦憂し、夕暮より北原某酒を携へて訪來つ、其が物語に奈良井の東に天照山といふ高山あり、其頂は平坦にして神欄を結へり、薇を採らんとて此の山に登るものは、皆天狗の怒に觸れて谷底に突落され、一人として生きて還るものなし、去る比御岳の行者ややしき歌よみて祈禱せしかと、人は猶恐れて登らすとなり、首陽の山靈も夷齊の爲に探薇を吝ます、まして罪なき民艸の食を惜まんやうなさをや、此は杣も通はぬ高山なれば、木の根莖を焚ちて登りしもの、菜を失ふて懸崖なぞに落つるなるべし、

此の日愚仙主人の肖像を寫す、低き鼻を其儘に寫生せしに、氣に入らぬ風情なり、因て再び寫生して、鼻を稍高く寫せしに、扱もよく似たるかなとて打喜べり、愚仙いつの間にか旅書師の苦心を習ひ知りけん、愚仙恐ならず、

肩組祭

廿二日天の色は覺束なけれども雨は止みたるに、いざとて馬を履ひ、例の格子に乗りて立田づ、主人藤兵衛驛端なる鎮守の森まで見送れり、此より鳥井時に掛り、山路峻しくして急なり。折しも霧深くして咫尺を辨せず、絶頂にて霧晴れたり、稻田にさす朝日影いと麗なり、半里下れば藪原宿なり、馬士の歌ふを聞けは

木曾の習か藪原宿は婿を取らずに孫を抱く

所謂を聞くに、毎年七月廿一日藪原にて鎮守の祭あり、此夜ばかりは問屋の娘も馬士の伴も、思ふどち手を握りて肩を組み、隙を成し群を爲して市中を踊り廻る、之を肩組祭と申す、一年一度の事なればとて、親も許して夜深くまで遊び戯ふるはとに、思はぬ縁の出来る事も多かりと云ふ、鹿鳴館の舞踏會、或は此の肩組祭を學べるにや、いと淺まし、此處にて馬を下り、例の笠打かふりて木曾川に沿ふてゆく、上流なれば川幅も狭く、水淺くして急なり、菅村の橋を越え、垂澤の森を過ぎて、巴か淵を問ふに森の彼方なりと云ふ、湛然として水稍よどみて淵を爲せり、

舊里碑

又も雨さど降來ぬ、足早にゆくはとに、右手に朝日將軍木曾宣公菩提所德音禪寺といふ札あり、橋を渡れば左手に木曾宣公舊里碑と題せし碑石あり、笠傾むけて之を讀むに、木曾の代官山村伊勢守良由の建てしものにして、文も亦其撰なり、義仲千壽丸といひて庄司兼遠に養はれたるし始より、粟津の

没落、家村の中興、其子孫義昌義利迄の盛衰を叙して功德を稱えたり、義仲一たび粟津の露と消えしも、子孫復榮えて木曾を保つと十數世に及びしは、其徳頼朝の靈業思深く鶴鶴情淡さに比してまされる所ありしか、山村氏の先は木曾義元に仕へしものなるが、其後徳川氏に従ひ、大坂の役木曾路を截定して功ありしより、世々木曾の關を守れり、余は斷碑の下に立ちて懷舊の涙なき能はず、

信山窮處岐嶺谷。嶽嶽夾流多熊鹿。秀氣氤氳出偉人。使向中原試角逐。運謀帷幄太夫坊。決勝千里四天王。有婦名巴多怪刀。乃公將將威遠颺。春永之秋秦鹿逸。諸源同時相唱率。一片白旗閃山嶺。天下震驚號朝日。火牛所向血殷々。積屍埋溪粟殼山。平軍閉風遠遁走。奇功第一先入關。驕心僅萌運已戾。又有忍人伺其側。與亡反掌自古然。昨日功臣今日賊。大事去矣無由爭。果使豎子遂成名。千古粟津原上恨。英雄末路空吞聲。有妾山吹抱公子。潛伏京師得不死。避仇六世居關東。變姓沼田依勇氏。看取盛衰皆在天。彼此一時無千年。仇亡時遇風雨會。勃興復保舊山川。山川依舊風光好。如今城堡難探討。殘燕飛入百姓家。滿目荒烟封墓冢。蔓艸之下讀殘碑。短箋輕笠行多時。客衣豈無數行淚。口吟吊古一篇詩。詩成低徊駐孤杖。英雄殺魄來融澤。瀾瀾谷鳴山欲震。如聞當年鼓鼙響。

或人の書さつる心計記と云ふものに、庄司兼遠は原野上田の間なる此所と云ふ處に住みけるよし記したり、此の山奥にもやと思へども、雨急なれば尋ねんどもせず、急ぎて宮の腰に至りて午喰す、此比は御岳登山の時節にて、精進なれば川肴も用ひ申さずとて、枯菜のやうなる野菜を出されて閉口千萬

なりき、

枕水樓

雨止まざれば車に乘る、右手の山の脊に大岩あり、松一本其上に生ひたり、車夫指して彼は河鹿岩とて、松の根に水あり、年経る河鹿住み、諸人之に祈れば靈驗ありと語る、例の廟の頭なるべし、西田を過ぐるに、路傍の森の中に碑あり、車を下りて見るに、山村氏の巨石作駒石の碑にして、紀徳民の撰文なり、駒石文學あり、經濟に長じたりとは、先哲遺蹟にも見えたり、山中の偉人なり、小高き丘を過ぐ、此處は昔の關所の跡なりと云ふ、下は木曾川に臨み、上は山を負ひたり、關の西は福嶋なり、枕水樓と云ふに投宿して暫らく筆硯を安んじぬ、

枕水樓は、前は蒼翠瀟らんばかりなる青山に對し、下は沼々として晝夜を棄てざる木曾川の流に臨む、川幅いと廣し、苔滑なる大小の岩石に咽々水音すさまじ、右手に見ゆる橋を大手橋と云ふ、巨材を兩岸より懸き合せてあやしき橋を成せり、上流にも橋見ゆ、岩石峙ちたる上に楓あり、下葉はまだ色づかねども、遠くより望めば鮮紅なり、

此の日郡書記山中助藏氏に書を馳せたりしに、早速來訪せらる、氏は予が學友赤沼天心の姻戚なりと云ふに、先づ宿縁あるを喜ひつ、氏の紹介に因て郡吏議員連の來訪する者多く、或は舊記を借りて木曾の故事をも知り、或は水明樓と云ふ煙屋に會飲して、土地の物語に益を得しことも尠からず、山あり、水あり、朋友あり、枕水樓の居心地も亦よければ此に淹留と決心しぬ、

木曾谷

木曾谷は東麓川の櫻澤に起り、西は美濃境なる馬籠時に至るまで二十一里餘、南北七里餘の山間を纏稱するものにて、無数の峰巒其中に起伏し、目を迷るもの深山大澤ならざるはなし、中にも御岳駒岳の二大山は、群山の父母とや云はん、積雪絶ゆる時なし、木曾川の急流は萬山の中を屈曲して、千溪萬澗之に會同す、或書に木曾谷の橋數三百九十九と見えたり、今は其より増せしや知るべし、國道も亦物換り星移りて、易を擇び坦なるを取り、古の棧橋も今は名のみぞ残りける、

去れば街道の宿々こそ流石に人にもまれて、虚偽の道も知れるものから、猶他所に比しては其狡黠も拙き狡黠にして世慣れず、まして山中は鷄犬の聲相聞ゆれども、老死に至るまで相往來せざるもの多く、不見縣門身即樂の趣あり、去れど風俗の淫鄙なるは、婿を取らずに孫を抱く」の歌之を題する如く、「おこそ頭巾で茶屋道入」とやらん歌ひていと亂れたり、

中にも福嶋は昔日木曾義元の治所にして、其後山村氏も其館址に居り、今に至るまで山中の一小都會と稱す、人家凡そ八百ばかり、市街も相應に賑にて、山奥より買物に出づる賑なきは、此處を東京とも京都とも思ふなるべし、此頃は名古屋より旅役者來りて芝居すとて、女子ともいとう喜ひ騒ぐも、鄙びたるやうにもあり、都めけるやうにもあり、酒樓三軒、各藝者と云ふもの一人つゝ置く、小繁華なる丈に風俗はいたく下れるに似たり、一昨年中の私生兒は一郡十二人なりしとか、物産は問はでも、「木曾へ」と書ゆまたがる木曾に御山がめればこそと語ふにて知るべし、近來藩伐の弊甚しく、保

謹規約を設けたりとぞ、昨廿年の調に依れば、山中出す所の檜笠二十三萬蓋、價三千六百小自木四千四百價三千、楠三百四十個、二千四百漆器三千四百三十四個、七千九百と聞ゆ、山岳其半に居て田畠少く、二百四十瘦瘠登らざれば、土語に「木會へく」とつけ出す米は伊那や高遠の涙米」と云へるが如く、皆他處より取り、常食は馬鈴薯蕎麥等なりとぞ、川肴尤よし、尤鯉鱒は他處より来る、たけのこ藪類殊によし、名物は百合根にして、土蜂の兒は此處の鮮魚なり、海魚は幾世經ぬらんと覺しき物のみなり、

信濃は開へし寒國なる中にも、木會は又寒く、雪は十一月の末より降積みて、四月下旬ならでは解けず、華氏十五度を最低とす、去れば「木會の御岳おんたけさんは夏でも寒い袷やうたや足袋とえて」と歌ふて、御岳行者を送れるにも徴すべし、今は九月の末にして他處は残暑なるに、此處は早や霜見えて、朝夕は肌寒し、予等は一重にシツヤ一枚にて身振しつゝ、酒を借りて何ともなき装を爲すことゑられ、

青義館址

一日青義館址に遊ぶ、此は山村氏の建てし郷學の址なり、壽永の昔、旭將軍羈旅の中に勃興して、風は虎に雲は龍に従ふ習、武勇の士雲の如くなりしには引換え、文學には太夫坊覺明の外に聞く所なかりしに、保武二百餘年、文學鬱然として起り、山村僻邑も亦歌謡の聲を絶ざりしこそめでたけれ、山村氏武功を以て徳川氏の祿を食むこと十餘世、甚兵衛良田に至りて、伊勢守に任官し、五位の從下に叙せられ、退隱の後亦召されて尾藩の國老となれり、此の人蘇門と號して文學を好み、江戸の處士渡邊方齋を聘し、郷學を起して子弟を教授せり、青義館是なり、予れ其作る所の文を讀むに、典雅にして流

暢、之を文士に求むるも得易からず、詩を清音樓詩集と名づく、清麗誦すべし、去れば其家臣にも、儒には石作駒石其名、醫には三村石牀其名を始として、下は里正厨丁に至るまで、文字あらざるなく、僧道の文、蘭蘭の詩、蔚然として觀る可し、所謂山川秀靈の氣人間に鍾まりて此の盛を致せしにや、今や者宿凋落して、文學大に衰へ、山川耻ち松蘿悲むの趣あり、唯村童の杖に上るを見て、雅流の山に嘯くを聞かず、青義館の碑、墓艸に委して遺業蕩然たり、

狐法師

此の地世に名高き處なれば寺院なども多く、随分壯嚴なりしやに見ゆれども、福嶋の興禪寺、長福寺、宮腰の徳音寺など、皆門前雀羅を張れり、或日興禪寺に遊べり

興禪寺は山の東に在り、丘陵を負ふて木會川に臨む、寺僧智仙稍文字ありと聞さしかは、往きて訪ひしに遇はず、詩を留めて去り、翌日又も門を叩きしに、智仙客室に延きて面會せり、年の頃は六十ばかり、去頃より中風にて半身不随と爲れりしよし、病瘠へうせう眼まなこおれとも人を知らず、昨日の無禮許し給へとて、爐を擁して種々の物語す、庭いと廣く、老松天矯として人に媚ひ、芭蕉の葉茂り合ひて、蒼翠を誇れり、夜に入りて雨をばより、一穗の燈、兩人の影、寂然として世外の思を爲せり、雜僧の勸むる齋飯をも食して猶歸を忘れ居しに、智仙雜僧をして一軸の經卷を取出さしめつ、展覽すれば寫本の心經なり、筆氣字體、並に空海に似たり、別に模刻一本を贈りて曰く、此は山村蘇門君寫經の或は祝融の爲に奪はんとを恐れて模刻せしめ、自ら其緣起を叙して寺中に藏せしめられしものなりと、蘇門の文

は詳に由来を叙したり、其文に因れば此は狐法師の蛻菴の寫す所なり、  
 蛻菴は飛州參議秀綱に事え、秀綱滅びて後、信州に亡命し、諏訪侯の門に立ちて請ふて曰く、弊邑不  
 申さしむに堅き金湯も一朝沼池と爲りて候ふ、亡國の臣、進退惟れ谷まれり、願はくは枯魚をして  
 斗米の活を蒙らしめ給へど、汝如何なる才能ありやと問ふ、蛻菴別に異能あるに非ず、書は姓名を  
 記し、劍は一人に敵するに足るのみと云ふ、千野兵庫は諏訪の國老なり、之を聞きて召抱へしは實に  
 夫正十三年なりき、其後事毎に之を試むるに、穎異比ふ可らず、兵庫身まかりて後、嗣子幼にして職  
 を襲ぎ、又兵庫と稱す、蛻菴夙夜輔翼して至らざる所なし。一日蛻菴假寐しけるを、一人の同僚之を  
 窺ふに、人にはあらで一老狐なりけり、驚きて斯くと主人に告げしに、蛻菴夢さめて人に悟られしを  
 知り、兵庫に暇たまわれと乞ふ、兵庫心をな痛めそ、汝手に事へて甚た忠なり、たとひ異類なればと  
 て暇を遣はさんは本意ならずとて許さず、蛻菴遂に木曾に出奔せり、興禪寺の桂岳師は飛彈の人にし  
 て或は秀綱の麻弟とも云へり、蛻菴桂岳師に謁して救を求めければ、師は之を度して副司と爲し給ふ、  
 師も亦やかて其人に非ざるを悟り、待遇いよく懇なり、或時蛻菴を使として書を飛州安國寺に贈り  
 給ひしに、蛻菴日和田村を過きし頃、日暮れしかは但或る草の屋に宿れり、夜に入りて主人獵して家  
 に歸り、小唄き所にて鳥銃の筒を試ひつゝ、不圖筒口を爐火の邊に坐したる蛻菴に擬してすがし見る  
 に、今まで人と見へしは袈裟着たる一老狐なり、打驚きて熱と見れば、宛然たる一比丘なり、再び銃  
 を執りて之に擬するに狐なり、此の鳥銃は名工國友の作る所にして、能く魘魅罔兩を辨する者なりけ

り、主人其人に非ざるを知りて、更に蛻菴に擬して一聲するに、聲に應じて仆れたりしを、近きて見  
 れば果して儂形したる老狐なり、頸に掛けし書簡に因て、興禪寺の使僧なるを知り、又も驚きて桂岳  
 師に詫入りしに、定業なればとて咎なく、事濟みけり、其後日和田村に時疫流行し、枕を並べて斃る  
 もの數を知らず、村人大に懼れ、此は必定狐法師の祟ならん、桂岳師は狐の師にして、道德廣大な  
 りと聞く、村中擧りて其檀越と爲り、多く楮幣を焚きて狐の再生を祈るに若かずとて、官に乞ひて村  
 を擧りて興禪寺の檀越と爲りければ、其後疫癘やうやく止みけりとぞ記したる、(原漢文)。  
 予れ智仙に向ひ、此は空海の寫經ならずやと云へば、智仙も誠に仰の如く、或人も大師の筆に紛なし  
 とて、鑑定の文をさへ添えられしとて取出して示す、彼の桂岳と云ふ法師こそ老狐にして、寫經に鳥  
 有の談柄を附會して世を欺きしものならめ、去らば後人の假托なるべし、夜深けて雨止まず、笠と  
 燈とを借りて枕水樓に歸れり、

竹 枝

木曾の勝は清國の三峽にも此すべく、古來公卿名士の題咏勝けて數ゆ可らず、予の淺才、豈拙作を以  
 て此の靈境を汚す可けんや、但兒童の爲に鞠歌を作りて他日の憶想に供しつ、

- 一 人はつはもの木は柏木會の名物見せたや下の句盤 句皆同じ
- 二 古き名所は棧橋やうさぎぬ引いたるあき霞
- 三 宮の腰にひくくなり橘音禪寺の暮の鐘

- 四 奥川の月の影すみて秋の景色のおもしろや
- 五 何處を吹くや風越の晴れし嵐の長閑なる
- 六 昔のゆめを忍ぶなり寢覺の里の夜の雨
- 七 何にたとへん御岳に暮れて降積む雪景色
- 八 山に木こるや小野の瀧切立つ岩に玉ぞ散る
- 九 駒が岳の白妙にあかねさしたる夕けしき
- 十 巴が淵はかはるとも木曾の人情は移ろはぬ

更に雜詩十首あり、其四に曰く、

古寺樓臺半夕暉。鐘聲隱々落溪扉。淡烟輕鎖秋風路。獨木橋頭拾栗歸。  
 翁媪相對語言奇。風俗看他太古遺。嘉客新來供何物。山村珍味煮蜂兒。  
 梅雨初晴採綠桑。秋風時節繅車忙。山中女子傳天巧。織出岐蘇八景圖。  
 溪聲盡日伴凄寥。倚檻何妨酒氣消。紅葉青山渾似畫。逐牛人渡夕陽橋。  
 鷄肋に過ぎざれども、亦聊か實景實事を寫せるを以て此に存録す、

塗 鴉

愚仙は日毎に人の請ふまゝに肖像の寫生に暇なし、予が名は、虛名と云ふはどにもあらぬを、猶人々の貴者を讀みたりなと云ひて揮毫を請はるゝに、我ながら閉口したれども、勇を鼓して塗鴉を試みつ、

或は居士の名を聞きて四五十年の老人なるべしと思ひしに、扱はまた少き人なりけりとして、今更予が乳臭さを嘲るが如きもあり、愚仙が今少し老人振れかしなと勸むるも、持ちて生れし狂態を如何にせんとして哄笑せり、

木曾山中

一口に木曾谷とはいへど、東西二十餘里南北七里ばかりの山中なれば、深山大澤の間に幾簇の村落ありて、別に天地の人間に非ざるもあり、殊に西野村末川村とかや云ふ處は、飛彈境に接したる御岳の麓に在りて、人情風俗宛然太古の風ありと聞しかば、農家のさま見まほしく、例の笠と杖とをとりて杣の通路を分入ぬ、けふは早や十月の一日なり、黒川橋と云ふ處を過ぐるに、潭深くして岸聳へ、峯の紅葉水に映ふて燦然たり、駒ヶ岳を右手に眺め、黒川に沿ふて行く、二三人の家、溪間水上に落たり、此處の邊を凡て新開村と云ふ、兩山兀立して其間に一條の樵徑あり、迂回曲折、一溪を越えて又一湖を渉る、山寨疑無路。湖回知有村と口吟みつ、杖を立て、四方の山々を見渡すに、天乙女の織なせる紅葉の錦燃出んばかりなるが、操をかへぬ常盤木の中に交りて、紅綠錯綜、婉然として道行く人に媚びるに似たり、とある水車の傍より路二分る、今來し木下影にて樵の翁に路問ひしとき、真直に行き玉へと云ひしかば、右手の路を取りて行く、傍の林の中に村校ありと覺しく、咄嗟の聲木の間に洩れ來るも珍らし、籠を得て蜀を望みばこそ、教育の猶昔からざるを嘆つなれ、かゝる深山のひかしは吾名をだに辨へぬものゝみなりけんを、明治の昭代に遇ふて杣の子も文かくすべを知る

に至れるぞいと愛たき、路は此處の邊より爪先あがり、頼れは已に山腹にあり、路傍の民家をのぞき見るに、一人の老女背に赤子を負ひて、爐の邊に踞れり、烟草の火をかしねとて内に入るに、蒸きたるさまなり、爐にかけたる鍋の中は何なりやと問ふに、南瓜と馬鈴薯なり、内の男山にゆきしが、歸て中食するなりと云ふ、何も進らざるものなし、此を食べよとて、桃二ツ三ツ出す、其處を出て杉橋に至りし比は、はや午に過たり、此處は黒川峠の半腹に在りて、右は溪流に臨み、左は漢々たる荒原なり、屋後の菜畝と垣根の瓜との外に、稗藜をたに種えしを見ず、戸敷は凡そ七八軒なり、幸ね柚木挽をもて生計をなすとぞ、空腹にたへざれば、傍の腰が屋に入りて、何なりとも食物あらば與えよと乞ふに、内には年の比四十ばかりなる女と、四五人の子と、居座裡の傍にまとひせしが、椽の實の外に食物なし、其を進らするはやすけれと、食なれぬ人は中るものなり、如何すべきやと云ふ、飢えたるものは食を擇ばずとはいへど、毒に中らんよりは飢えんに如かず、去れと珍らしければ椽の實を見せよとて之を見るに、粉をねりて餅のやうにせしものなり、アタ多ければ水にさらす事一晝夜ばかりにして之を乾し、其をねりたるを野菜の汁に和して食ふとなり、主人の女、予に何處の人ぞと問ふ、九州の果なりと答へしに、拆も遠國の人かな、さぞな空腹におはさんに進らざるものもなき氣の毒さよ、かゝる深山の悲しさ、吾等は朝夕不斷の食は、椽の實と野菜のみなり、あれ見玉へ、深川の上なる椽の大木を、一生の命とて頼めと云ふ、ひなびたる言葉に心の奥底見えていと憐なり、實に杜甫が日拾遺集「隨祖公」と云へりしは是なりけり、女のおどろなる髪面を捲きて、根は布の片もて結び、

頸の邊は眞黒にして、塵垢は小刀もて削るべし、上に麻の廣袖なるを着て、下に縋縋をまとひ、麻繩をもて帯となし、腰より下は露なり、其言葉は單純にして、予に物語ると、吾子に物言ふと異なるなく、茶を飲めとて進むる湯は、少し褐色を帯ふるに似たれども、風味白湯に異なるなし、如何なる草の葉をや煎るらん、此處の邊は米の價幾何ぞと問へど、知らずと答ふ、けふは何日なやと問へど、亦知らずと答ふ、米の飯は大病人の外は食はず、何某は老病にて米の飯を食ふてもも悪ざりすと言囉すはせなれば、米は藥餌に用ふるのみなりとぞ、かゝるわびしき山里に似せ、家居いと廣く、内は皆板敷にて、爐の邊に席二枚ばかりを敷けり、板敷の木は凡て檜にして拭かば鏡の如くなるべし、家の一方だけ開きて明を取り、其餘は壁なるをもて、爐より奥の方は眞暗なり、此は障子を省かんが爲とおぼし、厩と母屋と一棟にして、隔の壁だにもなし、産馬の名所に負かて、馬は三四疋を飼へり、此女年四十にもなりて、ひまだ四里隔てし福嶋の町をしらず、峠一つ隔てし末川村にも行きし事なしと物語る、實に太古の風なりけり、女は娘と草刈にゆくとして立出るに、手も亦此處を出で、峠に登る、此峠は木曾山の北に盡なんとする處にして、左手に駒か岳を望み、右手に御岳を見る、此下は末川村なり、此邊すべて産馬の名所なれば、草に臥し深に飲む駒のかすく見えて面白し、腹いよく空しければ、末川村に至りて、此處の草のや、彼處の伏魔を助へども、稗藜にや行けん、答ふるものなし、田舎の人は田鳥をもて住居とすれば、家に在るものは病人小供のみなり、蜻蛉を捕へんとて拔足さし足なせる小供に行遇ひ、物食はする家はなやと問へば、彼處にゆけど指す、奥に老女の居るを見て、門口



より呼べど叫べど答へず、後方に老婆は雙だど、小供等の笑ふ聲するも淺まし、外には誰も居らぬにやと云へば、小供いつでも乞食の來し時は、其家に宿るなりと云ふ、予を乞食と思ひけん、あな忍むしとて足早に立去る、やうやく四時ごろに田の中の軒茶やにて中食し、其より杷の澤を越へて西野に着せし比は、はや誰彼時なりき、破戸を洩れ來る燈の影を認めて、門邊より此は山路に行暮れたる旅人なり、おはれ一夜の宿を許し候へど云ふに、宿屋にはあらねどもとめまいらせん、粗飯を厭ひ玉ふなどて爐の邊に誘ふ、此は寒賣屋と覺しく、家居廣くて、主人の男もむくつけならず、けふは何處より來り玉ひしと問ふに、福嶋より折橋の峠を越へ來りしが、思ひしより路遠かりきと答ふれば、扱は道を間違ひ玉ひしなり、新開村より左に入りて、山徑を來玉ふが順路なりと云ふにぞ、始めて彼の岐道にて間違にけるよと悟りぬ、去れど却て折橋の奇を探りしこそ怪我の功名なりけれ、頓て食事をも終りて、爐邊の團樂に入るに、主人と酒打飲みて高聲にのしり喋り農夫あり、目脂流れて低き鼻を傳ひ、頬の髭塵に埋まりて迷々たるが、此男子が東京より來りしと聞て、酒の香吹きつゝ、如何に東京の客人よ、内務省といへるは賣藥の間屋にや、此處の邊に來る賣藥屋は、内務省より許されたる藥なるぞ、家毎に買はずば後悔あらんとて、強ちに買らんと申すに、日々の烟をも立かぬる小前のものなれば許し玉へかしと云へど、内務省の許なるに、何とて拒むぞとて、果は亂暴狼藉に及ぶが故に、詮方なくて一袋二袋買求め候なり、或は書家とやら云ふ人の、四角なる文字書たる紙を出して無理に買へよとて強ゆる事もあり、いつも難儀いたすなり、此は御規則に候やと云ふ、扱は田舎と侮り、

愚直の民を虐げゝるにこそと思ひつゝ、なきてさる規則のあるべき、其は上を僞りて強硬なすものなれば、取合はぬこそよけれ、とて今の御世のありがたきを説くに、此の男もうなづくさまなり、西野ふし一つ聞まはしと望めば、頓て聲張上げて、

君の田と又我田とならび。ひとつ田の水畦ならび

といへる歌を、調子をかしく引のべたるように歌ふ、此所の主人も、

「白菅笠のやれるをぞしや、しのび夜つまの笠ぢやもの」「わしは西野のひえやき餅よ、色は黒いが

あじがよい」「三尾の目影も西野の奥も、すみば都で花がさく」

といふ歌を、聲を限りに歌ふ、頼に筋を立て目を閉ぢ、口を開いて犬にても呼ぶ如き聲して、木だまに響き渡れり、此の歌は皆此處の邊の古よりの土風なりとなん

此處の風俗をかれこれと問ひしも耻ぢてや語らず、主人の云く、此處より三里ゆきて飛州境の日和田村と云ふ處は、山中第一の僻村にて、衣食住共に珍らしき事多し、一生の間生湯の外に、入湯して垢を洗ひし事なくして死するものは珍らしからず、殊に醫師といふものもなければ、いさゝかの病には、爐の火に腹を暖ため、腹暖まれば背を暖ためて養生するとの事なり、尤かゝる處にては病氣の數も少く、風邪腹痛の外には餘病もなしとなん言ひ傳へ候と云ふ、餘病なきにはあらざるも、病の名をしらざるもあらん、去れど山野に生長して健康自ら都人に異なる事知るべし、夜深けて寝に就く、御岳おろしの山風凜々として戸隙より入り、冷氣霜月の比に似たり、此夜四五人の年少き男等、手に手に松火

を取りて前の小川を傳ふて川下へ下れり、聞けば手にて川魚を捕ふるなりとぞ、

此處の婚禮の特異なるは、媒介人必ず額に墨を塗る事なりと云ふ、餘の事に呆れて其由を尋ぬるに、昔し婿入の折、媒人の容姿婿よりも數等立優りて見へければ、新婦誤て媒人を我夫と思ひし事あり、其より仲人は墨を塗りて新郎に異にするなりとぞ、世に珍らしき慣習ながら、開けざる地にはかゝる例もありけり、祝儀の式例にも可笑しき事多し、三々九度と呼なせる祝盃の式も、新郎新婦衆客の前にて献酬するなり、新婦始て新郎の家に至るや、大聲にて「うぬをたよりに來たぞ」と言ふ、新郎は「石の土臺の腐るまで居ろツチャ」と挨拶なす、是れ應答の式なり、衆客の祝盃は一人五盃、或は七盃との定式あり、其家の貧富に因ると覺し、五盃の祝は例へば三盃は子盃、二盃は親盃にて、順を逐ふて酒を行るなり、其盃をめぐらすと共に衆客手拍子を揃へて

めでたく〜が三つ重なりて末は鶴龜五葉の松

と云ふ歌を繰返し〜歌ふ、此れ即高砂の謠曲にかゆるものなり、其新郎の友達などは、種々の贈を持來りて祝筵に連るにも、坐敷に入りて頬冠りの手拭を脱せざるを例とす、其贈は木にて陰莖を刻みしものなりとぞ、此も其の始を尋ねれば所謂ある事なるべし、又新郎に串柿五串を、新婦には麻を贈るも古例なりとぞ、正月の禮には必ず青錢九文（之を方言「と」を携へて行く、庭口にて「お祝申す」と云へば、亭主「お渡れ」と答ふ、客は其儘別に主人に挨拶せずして奥の間に通り、歳の神の前に供へたる松の枝に、御幣の如く切りたる紙二枚を結付けて禮拜なし、其より主人に對面するを禮となせり、

此の邊は凡て鹿を以て生を爲すものなれば、野山を我住居とも倉庫とも思ふなり、されば季節毎に必ず之を祝するは、山に於てす、例へば五月五日に野に小屋を作りて菖蒲を挿み酒を奉ずるの類なり、又耕地毎に山の神を祭る、之を「山の講」と云ふ、春は舊二月の七日、冬は舊十月の十日なり、春は紙に馬の畫をかきたるものを社頭の木に結付け、冬は錦の一寸ばかりなる小切を木に挿みて祠に納む、此は産馬養蠶の地なれば、其繁榮を禱るものとおぼし、けづりがけとて白木の箸を削りて、其末に總の如くなせしものをもて神酒を注ぐとぞ、聞く事毎に耳新らしければ夜の深くなるをもしらず、翌日村長青木氏を訪ひて物語す、やがて青木氏案内して其近所なる農家に到る、老夫婦に若き夫婦及び子供等爐をまどひせしが、予等を見て女子供は奥の方に逃込み、家の内は左は馬屋右は住居にて、馬と人とは殆んど分つ可らず、いふせくもむさくろし、いと大なる爐に粗朶折くべて其邊に坐しつゝ、物語す、此を食はずやとて出せし蕎餅は、徑一尺ばかり、厚さ二寸ばかりの大餅なり、之を熱灰の中に入れて焼くとぞ、味殊に美にて、麵包に比するに勝る事數等なり、爐の邊はすべて板敷にして、塵堆く足跡を印せり、障子一枚にて仕切りたる奥を寢室とす、此には裨がらを堆く積みて其中に寝るとぞ、予は遠國のものなり、かゝる山中に來りし心祝までに酒を振舞はん、此も酒を買來らずやとて紙幣を與ふるに、幾たびか辭退して後受たりしが、頓て樽提げて入來り、酒は冷こそよけれ、とて貯へたる干鯛を焼きて盃をめぐらす、予も其團樂に入りて笑ひ興するに、賊に山村の民は扑野にして情を飾らねば、心ばへ尊とく素直にて、其樂謂ふ可らず、都人士が臭骸の美人を抱いて葡萄酒の美酒に酔ふも、如

何で此の一興に及ぶべき、扱々けふは口の正月なり、かゝる客人はいつ何時にても御坐れかし、と戯れて舌打鳴らすも興あり、己じ、西野節にやあらん歌ふ、木曾の山に秋閑なるも、天下の春は此の球にいふせき賤が伏屋に集るが如し、夜いたく深くて宿に歸る、明けて朝とく青木氏と共に宿を立出て、把の澤にて別れ、其より末川村に出づ、此より捷徑を取りてゆく、一の峠を越えて深山の中に入りしが、漣音遠く聞えて物すさまじく、蒼々鬱々たる老樹の奥に山鳩の聲幽なり、木は皆楡のみにして、あらぬ木は一本も交らず、やうやくにして山路を過て元の道に出で、三日の晝過るころ福嶋の枕水樓に歸れり。

實に雲の行方の定なく、何地ゆきけん日記は此に盡き、其後の雲脚茫々として之く所を知らず、青雲の棧橋断絶えて浮世の夢の寐覺の里、古臭けれども自ら招きしみのをばり、ヒョン憂目に近江を越え、飄然として京都に現はれ、大坂に出没したる同行二人、愚仙は大坂に予は東京に立別れて、塵累に桎梏されし今日此の比は、行方定めぬ雲水の昔こそ戀しけれ、卅一年八月四日舊稿を檢して後に識す。

●風流順禮

指頭に唾して重箱の底の蕎麥粉を舐る遊一弛の道をも知らず、風流退治など、嗚れども、此の浮世は汗と溜息とで暮さるゝものならねばこそ、十日の暑中休暇をも貰ひたれ、一年の骨休めは此時、

一日千金の遊は、漫々として山を跋み水を涉り烟雲に向ふて異功を樹つるに若かず、いでや山陰の神龜峽を探らんか、將北越の白山に神代の雪を喘まんかど、思案の最中、桃谷の窟を訪ひしは十年あまりも逢はぬ豊嶋ぬしなり、我は蘇州廣嶋に足腰を延ばして、内海を池とし群嶋を假山として、天地秀靈の氣を呼吸すること年あり、此の頰骨の出たる工合、なんと仙人に見えずや、此間の山水を見ずんば以て興に語るに足らず、とそゝのかされてくつと負けぬ氣になり、去らば行かんと空手で窟を飛出せしは、例の一寸先は闇の夜に遺を拾ふて、糧に敵に資る孫吳の兵法かや、時は是れ明治二十四年の八月吉日なり、先づ神戸に至れば、外にも同伴あり、京都より来る筈なればとて、待てども、影もなし、其夜は其處に待明して、翌日午過る頃にやうく待つけたるは襄陽山人と一人の法師なり、山人はかねて知人なれど、此法師何者なるを知らず、つらく其面を見れば、眉太く長くして、眼大なれども凹然として深さ一寸、頰骨相峙ちて二子山の如く、願出で、和田岬に似たり、剃立の髪も髻も青み渡りたれども、半破れたる麻の衣猶黒く、骨組丈夫にして頭の背に羅漢骨隆然たり、すさまじき法師の相貌、是れ安宅の關所破にあらざれば、正しく梁山泊に名を得し和尚なるべしと思ひ、進んで一揖して其名を問へば、則奥州岩城平の住人にして、嘗て國亂に遭ふて母妹と相失し、流離艱難、辛酸嘗め來りて、今は東山の片邊り清水の流の末に結びし幽けき庵の中に跣座せる天田五郎入道鐵眼なりけり、彼も我も同じく其名を聞くこと久うして、いまだ其面を見ず、相逢ふて哄然一笑奮の如し、鐵眼高らかに吟じて曰く、

秋入長空曉色涼。天風颯々拂雲裳。一衣一鉢三千界。何處青山不故鄉。

予れ腹稿已に成る。韻を次々に違わらず、乃ち録して鐵眼に示す。

豪骨飄然猶未焚。天涯落托我兼君。雖無座上驚人語。別有胸中罵世文。白眼看來三界夢。青鞋踏破萬山雲。新知誰謂非神契。一笑相逢意忽欣。

托鉢僧に貧乏居士、相得て甚だ喜ぶ、然れども予れ氣遣はしきは此の僧腥きものも食ふにや、酒は實に見限りたるにや、名は居士と稱して有髪の僧を學ぶも、予れいまだ肉の味を忘れず、酒を見限ること尤難し、若し厩坊主ならばよけれど、十日も廿日も同伴になりて、素破鎌倉と云ふ時に狼藉に遇ひなばつまらぬ話と、内々氣を揉むとも知らず、宿の亭主日は暮れぬ船に乗れと云ふ、大坂に忘れし物なきにしもあらねど、エーまよと思切りてした、かに夕飯食ひこみつ、山人を大先達にいざとて出立つ、居士と鐵眼と真先に本船に飛乗れば、事務員切符を出せと云ふ、無い、無くつて船に乗れるか、乗れるから可笑しいと云へば、船頭の眉逆立つ折しも豊嶋生切符を示して争止む、をかしや船の居候、

男ばかりの坐は何となく龍を畫きて暗を點せざる如く、女一疋其中に交れば、料理に酒嚮を和したる心地して、何處となう味あるもの、分きて船の中、汽車の中では、乗合の相手肝要なり、退屈してはフイと眺め、欠伸してはフイと横目に睨むもの、女ならでは目が承知せず、路の遠きも船酔も忘る、は只此ぞ、と或人の云ひたるが、實に是れ千古不磨の名論、和尚は如何にと問へば苦笑して答へず、見

廻せば船中の一室、ごろ／＼と寐轉ぶもの、膝を立て、兩手に支ふるもの、片手を枕に横になりて入来る新客の顔珍らしげに眺むるもの、手提の中から煎餅取出してむしや／＼と食ふもの、句切／＼にウーアーを交せて節おかしく聲高らかに新聞を讀むものは是れ田舎教師が大坂見物の戻道か、傍人の迷惑に頓着なく場廣く座を掃へてトランプを争ふ四五人の若者は書生の歸省にやあらん、隅々見廻せば一美を見ず、扱々一晝夜も四角な面ばかり眺むる事かと思ひて、程よき處に和光同塵の座を占め、自他平等の枕を借りて船出を待つうち、やがて入來りし一個の尤物、ソレ精錡水が乗込んだと叫べば、なにがし怪幻な顔して、精錡水とは何ぞと問ふ、氣のさかぬ男かな、目薬の事ぞ、船中の目薬は此に限ると云へど、猶分らぬことを尊けれ、年の頃十七八、神は秋水の如く、態は春雲の如く、芳姿淡遠にして、淑質清微、風流比なし、船に慣れぬにや、座未だ定らずして眉睫已に惆悵の色あり、一船目を屬せざるなし、皆曰く定めて是れ浪花の人、飄零して廣嶋の烟花に落つるものならん、と聞て寐て居たる和尚むくと跳起きて、大慈大悲の眼を垂しもをかし、くす／＼と笑ふうち、船はゆさ／＼と揺り出しぬ、頭をむぐれば清光一片、船窓より洩れ来る、乃ち鐵眼を蹴て起ち、甲板に這上りて見廻せば、和田岬も疾く過ぎて、おぼろに淡路嶋山を左手に、須磨や明石を右に見て走る、月は大空に横りて千里波明に、四面の山々遠きも近きも、蒼茫依稀として紗幕をひきたる如くなり、予れ舷頭に立ちて覺えず快を叫び、又遙かに攝播阿讃の山を願望して、感中より來るを覺へず、播州洋をも過ぎて高松多度津にしばし船を寄せ、やがて西をさして走る、まだ夜深けれど月長空に横りて四面の山、歴々

敷ふべし、

長空桂月玲瓏。回首江山形勝雄。萬頃烟波穩如席。舟行一幅畫圖中。

和を求めんとて鐵眼師を搦起せども、憂も樂しきも白川夜船、厨の聲のみ室に満ちたり、誰も彼も寐像のわるさ、大の字人の字に寐はなかりて、夕方占め置きたる我席も乗取られたるに、腹は立てども起さんも心なしと、空間を見つけて、六尺有余の大の身体を弓の字形にころりと寐轉ぶ、窮屈さもいつか忘れて、踏ぞり返るよと思へば、夢已に覺めて夜は早や明けぬ、見れば宵に乗込みし彼の精錡水も起上りて、髪なぞ撫付け居たるが、不圖此方を振向くを見れば、成はせ色稍白けれども、顔は痘痕をもて滿されたり、夜目遠目とは云ひながら、此は又近頃の不明と吹出せば、驚きて同伴の人々も飛起さぬ、

船の中では氣が晴れて飯も旨し、酢餚に蒲鉾汁、味はまづけれを覺えず五六膳も引かけて、見廻せば和尚の前には果して鮪も汁も其儘なり、扱は此僧持戒太だ嚴なりと覺し、議論相合はずして精進料理の交際まじりあひに迷惑妙からざるべしと呆れ果てしが、此節の坊主肉はござれ、女はござれ、墮地獄の根原一として彌らざるなし、漬物ばかりにて飯食ふ坊主のあるべきや、和尚鮪と蒲鉾も嫌かも知らずと思へど、道に坊主に向ひて精進か但し嫌かとも尋ねられず、一食して仕舞へと和尚の前の物皆引よせて又も二三膳、飯櫃の底已に露はれしを、船童睨一睨して携去る、其視點和尚に屬せり、和尚腹はふくらさずで面をふくらし、己が食たかのやうに眼みつけられて迷惑なものぢやとつぶやく、サア腹こなしと甲

板をぶらつくべしと甲板上に至れば、曉暎高く昇りて、朝風涼しく袂を拂ひ、氣持のすがすがし言ふ可らず、見渡せば四面皆山にして、一水長く横はり、蒼壁丹崖、左右に映帶して、烟樹滿らんと欲し、権邸漁戸、山背江畔に落たり、布帆短篷、容與として往來し、櫓聲喧軋、欺乃の聲と相和し、琵琶湖上を行くの想あり、已にして峽間一簇の白雲蒼壁を見る、是れ佛後の新の津なり、前に一小嶋あり、松風濤聲に入りて、遠く天樂を奏するもの、如し、是れ仙醉山と云ふ、山と相對して樓を小丘の上に構ふるものと對潮樓と云ふ、昔時轉客の此を通る者、必ず登りしと云ふ、やがて尾の道に至る、尾の道は港狭くして而も深し、小嶋長く其前に横はり、山其後を圍む、以て風を避くべし、東船西船、幅濶林の如く、青樓紅閣、江に臨んで駢立し、多く妖嬈を著へて、以て嫖客を待つ、實に海道の一仙境なり、東北西三面皆山に依りて寺を建つ、西山尤高し、山上に寺あり、千光寺と云ふ、寺に巨岩怪石多し、石の尤大なる者寺門の前に矗立す、海上より之を望むに、老牛を繋ぐ者の如し、昔時石面に一珠玉あり、夜は即光明を放ちて、赫耀海を照す、故に此の浦を一に珠の浦と云ふ、近古に至りて外人之を奪ひ去れりと云ふ、佛の方便亦多岐なりと云ふべし、此間の海路、群嶋葦布、泓然湖の如し、左右を顧望するに、路窮り水盡る者の如くして、岸廻れば又別境あり、音戸の瀬戸を過ぎて、眼界更に妙なり、

群嶋相迎應接忙。迢々一水繞山長。移家此處何邊好。後是權邸前發鄉。

和尚一小嶋の西端に立てる老松を指さして、彼處は以て草庵を結ぶに足れりと云へば、山人點を撫し

て草庵もよし、茶屋もよし、猶我に一策あり、此の一路の群嶋を以て公園となし、春は花を秋は楓を植ゑて、以て錦繡を織出し、數十の番舫を浮べて、以て遊覧に便にし、東西に海關を設けて、入津税を徴せば、范蠡道ふに足らずと打笑ふうち、船は竹原を過れり、  
吳の軍港をも過ぎて蕪州廣嶋に着しは其日の午過る頃なり、音に聞えし宇品の築港殆んど一里ばかり、當時の苦情も何處へやら、今は人其處に依るとながしの物語、天下の事は皆さうしたるものなり、此所で山人と和尚とに別れて豊嶋生に伴はれ、其家に至りて飲明せしが、其酒の悪さ舌を刺して頭を突く、道の居士も此はさうぢやと閉口すれば、廣嶋は大抵此なりとて主人頓着なし、明くれば生は手を伴ひて縣廳の前の空家に至り、一室に幽して門を閉ぢ、茶器、火鉢、酒德利、夜具、机、筆紙、墨硯などそろ／＼運び來りて、一人の番人を附け、人が來ても逢はせるなど言付たり、予れ此に至りてとんと腑に落ちず、天上の文星、人情の罪を獲て、天之を縛するに五倫五常の繩を以てし、以て之を人界に囚ふ、是を以て其號を天囚と云ふ、罪を天に得ては這る可からずとあきらめて、ざつと人生を百と見積り、些少の月日ぢや、辛抱せんものと此のむさくろしい穢なげなる騒々しく七やかましい人間界に生を送るは、是れ罪障消滅の爲なり、謹しみて飯を食ひ、謹しみて酒を飲み、更に罪を人に得たる覺もなきに、思ひきや今又此の一室に幽閉せられんとは、扱は人を罵りし罪か、抑も世を嘲りし咎か、將風流順禮などを稱して神を拜し佛を禮せざるの罪か、いや／＼其も生の爲に罪せらるべきにあらず、思廻し思返せど、一點の曇なき正直一圓の我身。坐敷牢とは情なし、生にして辭めらば云へ聞

ん、と威丈高にのしれば、生は頓首して請ふて曰く、怒る勿れ／＼、我れ實に足下を欺むけり、我れ近頃一書を著し、將印刷に附せんすとす、一たび足下の刪定を乞はんと欲するも、足下は天下の懶惰漢なり、よし／＼と安受合して一年二年も待せるは必定、これは一番足下が烟霞の病につけこんで大坂を誘き出し、一室に推籠めて筆を取らするに若かずと考へて斯の任合、番人をつけ置きしは彼の鐵眼和尚なんぞが邪魔を防がん爲なり、拙稿は此に在り、十年の交にめんじて罪を許し、刪定の勞を執り玉へかして、百五十枚ばかりの原稿をつきつけられて呆ること一時ばかり、故人とは云へ、廣嶋三界連れ出して名山大水を見物させんとは殊勝の至り、無上の功德と思ひしに扱は敵に謀計ありしか、已に術中に陥りては今更此の座敷牢を飛出さんことなか／＼に許すまじ、まだしも酒德利を與へしは奇特千萬、仕方がないとあきらめて原稿を手に取り、古机に憑れて徳利を左に硯を右に、且つ飲み且つ批す、此家は庭いと廣げれども、人住まねば草生い茂りて相馬内裏も斯くやと思はる、此日大雨沛然として至り、炎熱洗ふが如く、窓前の芭蕉滴々響を絶す、夜に至りて隣家に謠曲をうたふ者あり、謠歌みて短笛を吹く、其聲雨に阻てられ且斷へ且續く、何者にやあらん心憎し、翌くる日鐵眼の書至る、足下天囚と號して人囚と爲る、憤むべし筆の楷役、天氣次第嚴嶋に遊ばん、滿期放免は何日比にやと書けり、人の氣も知らず、氣樂なる坊さまかなどつよやきつ、例の飲み且批する者二晝夜にして業を卒りぬ、なたがし喜ぶこと限なし、此夜盛宴を張りて予に飲ましむ、但例の悪酒には閉口、跡にて聞けば幽閉中訪來しものを番人留守を遣ひて逐返したりとか、南無神様佛様達、罪業許さ

せ玉へかし。

ヤツと幽閉はどけても天気はいまだ晴れやらす、せんどりとしたる雲に雨をつゝみて、やがて底が抜  
 けさうに見ゆれど、落ちぬ限りは巖嶋にゆかれぬ事はあるまじと、其翌日の朝は例の晏起にも似ず、  
 つとめて飛起き、山人の家に至らんとて家を出で、朝日橋とやらん云ふ橋を馳ゆけば、背後より橋錢  
 々々と呼ぶ、手れ懐中をさぐれば一文なし、なんば田舎ぢやとて町の真中で橋錢を取るとは、不自由  
 な田舎もあればあるもの、三十六着逃ぐるを上着とすとは、水滸傳開卷第一に王教頭の名論、こりや  
 逃げるが勝と、大股に行過ぎて山人の家に駈込み見れば、何とかしけん鐵眼和尚、大口を開きて指を  
 突込みつゝ、大の眼を白く黒くして七類八倒、アゝゝゝどうなる聲鯨の吼ゆるが如き傍には、山人の  
 妻若ふしまろびて笑ふ、扱は和尚口はどになく、佛戒を破りて魚の骨を咽に立しものならん、よい氣  
 味ゝと心に嘲りて、どうしたと尋ねれば、ヤツと口の中より物を取り出し、今足を摺削いて即功紙を  
 張らんと、口中にて濡せしに、上額に固着て離れず、いと苦しかりさと、目より涙をばらゝと流す、  
 又も感通して大笑の處へ、例の豊島生來りて、オイ君は困つた人ぢや、今違警罪を犯したであらふと  
 云ふ、イヤ身に覺がない、覺なしとは言はさぬ、橋錢を渡さずにと言ひ掛くるを、言ふなゝと目で  
 知らすれど、無頓着に言ふてしまへば、一座哄然、流石に面目なし、此の男すぐ跡より來掛りて、同行  
 と知られ、一厘の橋錢を請求せられて罪を贖ひしとなり、ナア巖嶋行はせうぢやと云へば、和尚も少  
 々の雨には關はぬと賣立つれども、山人雪氣を見て小首をひねり、こんな日には得て大風雨のあるも

の、明日にしたらよからうと仔細ありげに云ふ、命あつての遊ぢや、そんなら止めやうと、其日半日  
 或は寐ころんで三人の女兒六つ五つ四つになれるを玩弄にして、無心の境に遊び、或は山人が戸糊に  
 秘り置ける書箋紙を引摺出して、惜氣もなく毫を揮ひ、又は山人をそゝのかして舟を前の川へ浮べな  
 せして、巳に午を過ぎしかども、大風雨の沙汰は扱置きて、小雨一滴も降らず、天文博士こりやどう  
 ぢやと責むれば、山人當るも八卦、當らぬも八卦ぢやとすましたものなり、残念なる哉、一番たばか  
 られて引留められるよと臍を噛めども及ばねば、今日は廣嶋の市中見物して腹をいんと、生を東道  
 主人となして門を出たり、和尚は頭に黒頭巾を戴き、身には垢付きて鼠色になれる合羽を被りて、手  
 に破扇を携へたるさま、宛然たる野僧の路に食を乞ふ者に似たり、扱て居士は身に余所行の琉球紺地、  
 糊已に剝けて丈も幅も短うして、臍と腕と殆んど露はれたり、是れ衣裳の短きにはあらざるなり、身  
 の丈六尺、重量十九貫八百四十目、そんな衣でも身に合はざればなり、帯は湯手帯、下駄は木履、頭  
 には麥稈帽子の縁一尺ばかりなるを猪首にかぶりて、のそりゝと大股に歩行く、心廣く体胖なり、  
 居士鐵眼を花和尚に見立てしに、鐵眼居士を赤髮鬼に見立たれど、是はチド無理、妾には似ぬ中々の  
 僂男、髭少し頰を繞り、色少し黒けれども、目元のやゝさし三界無類なり、東道の生は丈低くして背後  
 より見れば小供の如し、わざと手が傍を離れて歩行く、何故と尋ねれば耻かすと云ふ、可愛らしき男  
 なり、扱市中隈なく見物したれど、別に感心する處もなく川を渡りて城内營所の邊とも見廻り、又も  
 市中に出づれば、背後の方に三四人の見童をみて、何ぢやらう、アリや坊主か、一人の若いのは百姓

や、何でも田舎から廣嶋見物に来たのぢやらう、と評判取々、ア、こんな坊主と連立てばこそ田舎者に見立らるれと云へば、君の状を見ろとつふやく、をかしさ堪へられずに一度にきつと笑ひつゝ、三人が異口同音に歸るべし、

翌日拂曉に窓を開きて天を望めば、雲晴れて風和たり、いざとて立出づ、山人と和尚と予と外に後藤田中二氏を併せて、同行五人なり、今日は和尚も麻の衣に檜木笠、一個の好頭陀、いと殊勝なり、宇品より舟を買ふて發す、輕舸矢の如し、海上五里瞬く間に親不孝嶋をも打過ぎて、聖ヶ崎をもめぐれば、舟頭已に大島居を海上に望む、隨喜の涙止めあへず、舟を岸に寄せて濱邊に下り立ち、右へ折れて進む、折しも山人の影忽ち見えす、一行東道の主人を見失ひて、盲滅法に右へと行きて左に廻れば、果して巍然たる厩氣樓曲灣の中に立てり、折しも潮いまだ干ざりしかば、廻廊の下盡く海となりて、太しく立てる宮柱、さなぶくと波に洗ひ、心地いみじうすがくし、先づ左の方なる廻廊より入れば、袴着たる白髪翁、御案内は如何にと云ふ、頼むと云へば、廻廊の上に掛けたる古今の名人どもの畫の物語をもし、又は此處は客人社、此は鏡が池、あれこそは平判官康頼が卒塔婆の流れ着きし所なぞ、言葉をかしく言聞すめり、やがて右に折れて行き、左に向ふて進みつゝ、本社の前に出で、神前にぬかづき、うやくしく三拜して首をあぐれば、和尚は何の經を讀むにか、讀誦のさまいとたふとし、廻廊の海中に突出する處に到りて見渡せば、遠山前に横はりて、烟波席の如し、背後の方を見わぐれば、峰高く山深くして、蒼翠瀟らんと欲す、和尚

大神の心やいかに清からん

よせ来る波を瑞垣にして

と口吟めり、さて官司に乞ふて神庫の寶物を拜觀するに、古武器佛畫等、人目を驚かざるはなし、其品目は贅せず、分て目を驚かせしは平家一門の寫經なり、卷軸裝潢、盡く金玉を鑲ばめて、燦然目を射る、其字も亦筆氣渾厚、書法謹嚴、後人の企及べきものに非ず、而して榮華の氣筆墨の表に溢る、展玩の間、人をして當時平門の盛運を想見せしむ、予は實に平相國の孫左馬頭行盛の末葉なり、之に對して感慨禁する能はず、

嵐光帆影鏡中妍。短閣長廊壓海連。魚躍入船知那處。斜陽照遍舊山川。

看取悠悠八百年。榮華勳業盡雲烟。金泥驚目三千字。猶托名山深處傳。

去て廊下に店を出したる宮崎細工を買ひ、沙上に遊べる鹿に菓子と與へなせして、社内を立出し頃は已に午過なり、たしか紅葉湖にて晝喰と山人の語りしやうなれば、もしや拔駐の功名せしやも知れず、行きて見んと出掛けしに居らず、待合せんとて、涼しかりやうなる座敷を見立て、遣入らんとすれば、亭主らしきもの、其處は御客さまのりと斷る、別に人は見えぬに御客とは、扱は我々の風体怪しと見たるか、不堪至極と腕をさすれば、和尚も例の大の眼を睜りて、將に大に紅葉湖を鬧がさんとする折しも、山人一人の客を伴ふて至る、亭主七重の腰を八重に折つて、我等を斷りて入れざりし座敷に請ず、聞けば此の一人の客は是れ廣嶋の鍋嶋知事なり、我等一笑して續きて遣入れば、亭主不思議さう



に見詰りつ

此の紅葉湖は殿嶋本社の東手なる山の麓に在り、樹老いて翠深く、岩根を傳ひて落來る清水澄々として響あり、溪に橋あり、溪の左右には溪に臨み崖に憑りて亭を構ふ、亭の前、木の葉越しに幽に海を見渡すけしき得も言はず、樹は多く楓なり、故に此の名あり、亦櫻樹をも雜え植ゆ、何處となく都の若王子の俣あり、春秋のながれ左こそと思ひやりて欄に憑れつ、和尚と山を品し水を評するうち、山珍海錯、已に坐上に在り、鍋嶋翁曰く、我れ病を此の小嶋に養ふ、山靈水伯の外に語らふ友もなく、昔は無事を願ひて、今は無事に苦しむ、折しも諸賢の來遊を聞きて、病の身に在るを忘れ、唐突來りて座に入る、請ふ半日の追隨を許して以て吟伴禪侶となせと、予曰く、是れ速かざるの客なり、願くは忘形の交を爲さんと、和尚曰く、知らず參禪の氣根あるか、翁曰、請ふ與り聞かんと、是に於て談論風發、佳釀海涌、蓋飛ひ舞ひ、口哦々として吟するも、亦必しも篇を成さず、城廓を撤し、禮讓を去りて、優遊自適、形骸の外に融然たり、而して和尚會て指を脛膺に染めず、翁忽ち謝して曰く、此は心なき主人振許させ玉へとて、更に命じて齋飯を進めしむ、予小聲にて、

酒肴只見つめたるのみなれば和尚番とや夕飯の膳

と戯れられて、其膳をこつそり引寄せて食てしまへり。

山人と共に此處を辭し去て、野津將軍を其別業に訪ふ、別業は彌山の麓に在り、後は則棗莽蒼鬱、猪鹿出で、遊び、翁は則烟波萬頃、遠黛眉の如く、布帆點々として几席に落つ、坐して海山の勝を擅に

して、而して天地秀麗の氣其中に鍾まる、蒼龍の栖む所、神仙の徜徉游息する所にして、而して將軍家を擊きけて病を此地に養ふ、將軍骨芳ばしく神清く、眉目秀で、風姿淡く、温容物に接し、笑言藹然として、宛然儒雅の風あり、誰か其雲蒸龍變萬軍を叱咤すべき武人なりと思はんや、方今天下太平、武を用ふる所なし、蓋將軍は其れ猛虎の午睡か、將軍勳業赫々、富貴比なし、誰か其家人の金衣玉食を咎らんや、而して將軍の夫人も亦賢、予れ嘗て其名を聞き、今其人を見る、髮の毛に油氣なく、洗張の刺あがりたる紺飛白に、古びたる帯をり、しげに結びし婦人出で、山人と語る、風姿宛然たる村婦なれども、其言葉のしどやかなる、其禮義の正しき、尋常とも見えざるに、山人に問へば則是なり、子爵夫人なりけり、今や海内の人心騷奮を尙び、華靡風を爲して、身代不相應の衣物好、分きて女は朝も晩もぞべらく、出るにも入るにも鏡を釋さず、是れ身嗜に非ず、治容誨淫の風なり、胸わろきこと限なし、聞く子爵夫人平生肩に褌を棄てず、手に雜巾をさへ握りて、拭掃除をも怠らずと、洒掃應對は小學の教なり、豈關らんや今は其教地を拂ひて聞かざる世の中に、如此き武家教育的夫人を見んとは、世の婦女子を戒むべきなり、此時夕陽將に没せんとし、暮色遠く至る、乃ち匆匆辭し去りて、彼の騎を棄たる小舟に至れば、和尚いまだ至らず、やがて同行の人々も戻り來しかば、船人ども纜を解く、時に日已に暮れて、四顧蒼茫、月は彌山の上

に在り、時に宮守る翁の吹すさびにやあらん、笛の音幽に聞ゆ、和尚岸邊を顧みつ、

神燈照海暮烟消。廊閣直浮千里潮。一夜蓬窓人未睡。龍宮城裏聽天籟。  
 と吟す、船已に岸を離れて、瞬く間に字品に着き、廣嶋に歸れば豊嶋生來迎へて、去て共に其家に飲  
 む、なんにもないけれどまあ、あがつて遣はされと強ひつけられて、一醉頹然、蹠跚として山人の  
 家に至れば、和尚いつになく大悦喜の面相、問へば日頃睨んで置いた集寶堂帖一帙、生涯借入の許を  
 得たりとて、帙を繕き帖を披きて、類に小首を傾けつ、右の手の人さし指を筆にして墨の上に手習  
 す、和尚常に草毫を揮ひ、蚯蚓のやうな、雲のやうな、何とも分らぬ字を書いて人を困らすは、坊主  
 に有間敷罪業なり、サト手習でもして人を助けるがよいと嘲りて、我先づごろりと枕に就きぬ、明く  
 れば天氣此二三日と違ひて、思出したやうに熱し、サア、和尚モ廣島に用はなし、逃さうぢや  
 ないかと云へば、山人の妻君、憎らしい人達と笑ふ、山人尾の道では何處に泊れ、岡山では彼處に遊  
 べなど、親切に教へて何やらん腰に結びつけしを、知らぬ顔に立出るとき、  
 此度は何も取敢へず廣嶋や路用の不足人のまに、  
 と云棄て、立出づ、山人と豊嶋生字品の漕に見送る、朝の九時頃舟出して、晝の二時頃備後の尾の道  
 に着き、兼て閑居たる濱吉樓に投宿す、此樓三階にして前は山と海、ながめよけれど樓下は盡く干鯛  
 店にて、臭さこたへられず、去て千光寺に遊ぶ、海上より見たとは違ふていと小さき寺なり、但奇岩  
 怪石思ひしよりも大きく、ながめも亦面白し、宿屋に歸りて酒を命ずれば、顔に白きものを唇に紅き  
 ものをつけて、手に鳴るものを携へたる化物二三疋出来る、興趣極めて索寞なり、乃ち叱して去らし

ひ、下女目を丸くして驚き、和尚口を開きて噴飯す、此所の言葉いとをかし、真似やうとして真似ら  
 れず、下女くつくと笑ふて、「お前さん達が真似しがさうやんすものかい」と云ふ、や、こしい言  
 葉なり、  
 明くれば朝まだきに、  
 足の痛さこらえ、て足曳の山鳥の尾の道を立つかな

と云棄て、立出づ、途中より車を買ふて行く、存外の熱さ麥稈帽子が焦げるやうなり、名も知らぬ村  
 々を通り越して、七曲とかや云ふ處に掛りて、不圖浮んだ時に曰く  
 不説人生事易達。悠悠心迹盡禪機。當年擊筑悲歌客。去伴山僧風詠歸。

和尚

由來凡聖道何遠。笑見乾坤造化機。野鶴間雲相伴去。青山綠水倦遊歸。  
 と高吟す、やがて福山をも過ぎて笠岡に着き、車を下りて但或る旗亭に入り、見れば和尚の顔色愁を  
 帯び、溜息つきて、茫然たりせうしたかと尋ねれば、今途中の民家に麥稈細工をなし居たる老婆の横  
 顔、さながら別れし母に似たるに、ハツト驚きて正面より見れば、全く別人なりきと云ふ、和尚間關  
 時幅、東西に奔馳して、母妹を察する者此に二十有餘年、音塵杳然、絶えて踪跡なく、生死遂に知る  
 べからず、食に當りて想ふ、中腸寸断、是に於てか髪を削りて僧と爲る、而して猶懐に忘る、能はず、  
 寤寐恍惚、物に觸れて情動く、嗚呼和尚の如きものは天下の孝僧なり、僧家を出で、而して猶は孝、

彼の家に在りて孝ならざる者、以て愧死すべし、予れ和尚を世間一通の塵坊主と思ひて、其行を察すれば戒を持する太嚴なり、予れ和尚を世間一通の食詰坊主と思ひて、其心を察すれば憫憫人を動すものあり、淺いかな予の和尚を見るや、此に至りて自ら愧ぢ、忸怩たる者久し、和尚話が理に落ちては氣の毒とや思ひけん、啊々と笑よて、悟つたやうでも悟れぬが人間さと思ひつゝ、中食も仕舞へば、早や乗車の時刻なり、匆々に立出で、汽車に乗り、一時間ばかりにして岡山に達す、車を馳せて後樂園に赴く、途中千坂翁の門を叩けば、門者二人が異形に驚いてか、奥に駆入りし、出來らず、此奴話せぬと云棄て、去て後樂園に至れば、名高の骨高、聞たとは違ひてねつかから驚くに足らず、和尚天下の名山大川を跋渉した目で見られるものかと、小言たら〜茶店の床几に腰かけて、遊茶一服やる處へ、丹頂の鶴のこ〜と此方をさして來れり、奇妙々々、凡そ天下廣しといへども、汝の外は奥に語るに足らず、しかし羽をちよぎられて此の小園の中の生捕とは氣の毒千萬、サア〜とされと手招きすれば、鶴もよい次達と思ふたか、のこ〜と傍に寄りしに、菓子一個手づからやれば、長い嘴でちよいと取りて食ふ、此で氣分が直り、桶屋町の常盤木と云ふ宿屋に泊り、浴罷みて酒を命せし折から、表の方俄にさわがしく、やがて下女ぶる〜と震へて駆け來り、叫んで曰千爺々至る〜と、半白の髭を撫して入來るものは是れ千坂翁なり、和尚ヤアとさつたナと云へば、君等も氣の短い人達ぢや、取次の番生、名も云はぬ男二人玄關前に立はだかれりと告げしをもて、其風采を聞へば、一は羅漢の如く、一は山伏の如しと云ふ、案内せよと命じ置さしに、やがて早や立ち去れりと聞て、其處

等を尋ねさせ、やつと此處を分りて何者ならんと來て見れば、是れ天下の二無賴漢、門者の驚きしも無理ならず、と且語り且つ笑ふ聲雷の如し、程もあらず酒至り、美人も亦至る、翁今夜は朝日川に投網にゆかんと云へば、和尚此はしたり、坊主の前に酒色を陳するばかりか、殺生の話止りて下され、と引止められて迷惑の体なり、かうもあらうか。

荒法師と番生の中にはさまりてちよこまつてぞ見えにけるかな  
翁腹も立ちられず、半宵の清談、歎を盡して去る、予は和尚の所業を下物は欽明して、東の空白ひころいさゆかんと叫べば、宿屋の主人羹をのべて書を乞ふ、和尚例の草毫を揮ひて、常盤木と書し、予は双松樓の三字を書して與ふ、其庭に双松あるを以てなり、

鶴唳双松上、其聲天下聞、飄然去無跡、標榜高山雲、  
曉に汽車に乗る、左右を顧望するに、峯巒皆小なり、和尚曰く、林深くして猿猴栖み、山犬にして良材植つ、中國の山何ぞ其小なるや、

南船北馬遊探奇、不見龍蛇蟠小池、路入黃蘗無巨岳、三州林澤盡凡姿。  
と吟するを聞て、扱も罵り得て飽足、但高く吟する勿れと戒めつゝ行く、車と氣驛に至りて、北の方山高く水清し、立寄らまほしけれども叶はず、船阪の陸道をも通過して龍野に至れば、南面一角、佳境忽開く、此より以東風物觀るべし、

峯巒四面路悠々、曉霧晴時山骨浮、一角忽開吟境變、松青沙白是播州。

姫路の城を左手に見て、人丸の祠を伏拜み、明石舞子の濱邊に出れば、岸打つ波の響は松風にかよひて、白帆の影は浮鷗と興に數ゆべし、和尚濱邊遠く見渡して、

世渡のはとも知られつもしはたく烟の末の細きを見ても

なごゝやるうち、車は神戸に着きぬ、和尚の友人櫻井氏の家を訪ふて中食し、予れ先づ浪花の廬に歸る、和尚其日の夕方訪来て一泊す、明るる日和和尚真面目に菴の記を乞ふ、菴の名はと問へば、師の坊の打破八識須至大恩とおはせられしより、愚庵と名けぬ、我れ三界に家なし、到る所皆我家なり、然れども白雲無心に軸を出て、無心に軸に歸る、僧も亦歸る所なかるべからず、故に諸舊友に請ふて此の菴を結びき、諸舊友の誼忘るべからず、乃ち記なかるべからざるなりと云ふかど見れば影だに見えず、白雲縹緲、水急に人遠し。

當時予れ浪華に在り事は志と違ひ志は世と忤ひ市井に放浪し風塵に潦倒し拂盃自ら愚にし酒を借りて快を取れり而して作る所概皆游戲の文字のみ此篇も亦然り但自ら謂へらく中に一片の眞氣あり故に此に存録す

○金剛山

山達者川達者に育てあげられけん昔の武士の夢にも知らぬ人力車と云ふものはひこりてより以來、若者の足骨弱くなると、二三里の道にも面をしかめるに、まして山坂越えて野宿の味嘗めんとするもの

なきこそ口惜しけれ、いつ何時大砲の響に夢を破られて、軍兵の數に狩獵され、ものすこき月影を戎衣に宿さん日なきにしもあらねば、日頃の修行が肝腎と、若殿原をはげますものから、予も此四五年來都の塵にうづもれて、足腰弱り果てぬれば、大事の用に立んこと覺束なし、且つ人は三年市井を出されば、氣骨皆俗了して吐く息臭し、之を醫せんと欲せば山に登り霞を喰ひ杉の木陰に一睡して浮世を離れんにしかず、我も此の頃はせち辛き世の味を嘗め盡して息臭し、いざや療治せんと七月五日驟然として宿を立出つ

ともすれば浮世の外の白雲に

かゝり勝なる我心哉

頭にいたゞける菅の小笠に十方空とは記せども猶三界の圍に迷ひ、首にかけたる濕藤の袋半は破れたれども、我は之を錦囊と呼びつ、青竹の杖に草鞋踏しめたるさまいかめしきに、路行く人皆振返りて笑ふ、此のわたりの山々の中金剛山尤けはしと聞しかば、先づ千早の奥をこゝろざして湊町より汽車に乗る、乗合の翁に登山の道を問へば、大和路より登りて河内へ下ることよけれと云ふ、今日は日已にたけたり、明日こそつとめて登らめとて、遂に奈良に至り、櫻泉大人を訪ひて、種々の教を乞ひ、日暮るゝ頃、暇申して猿澤の池の畔にやどる、南圓堂の下、池に臨みてしつらへたる涼棚に、夕暮よりともし速ねし燈の影池にうつりて、緋鯉の遊ぶが如く、池の柳の影さへ見えてけしきいと面白けれども、氷賣る聲かしましく、納涼客雜沓してなかゝに熱苦しげなり、予は夜もすがら月に向ひて寐

ぬす、去年の春、亡妻を伴ひて來遊びし事ども思出で、杖をしぼりぬ、

又も來んと契りしものを我獨り

昔の宿に旅寐する哉

さて此處に着きし時、直に書を浪華なる友人に送りて、明日の同遊をそのかしければ、其人や來ると待てども、便なし、彼の男大川の涼舟に酒打飲みて、手紙をば見ぬにやあらん、但し又例の足弱く氣弱くて來ぬにか、よし、浪華に歸らぬ日登山の樂を説きて羨せんのみと思切りて枕引すれば、夜は早やはのくと明けぬ、糧をつゝみて立出て、汽車より王寺に至り、此處にて乗かえて下田に至る、此處より山の麓までは四里ばかりなり、朝日影うららかに、田の面を渡る風涼しく、心地いとするが、し、

此頃の乾くまもなき袂さへ

はして涼しき朝つく日哉

當麻寺は右に折れて四町ばかりと聞きしかと得詣です、御所より右に折れて一里ばかりゆけば名柄村なり、此村即ち金剛山麓にして、頂までは五十町とかや、此處にて中飯食ふ、宿の婆覺之進の遺功を説く、此は河内へ落る金剛山の水を水越峠より大和の方へ引きて水利を謀りしものなり、今の名柄川是なり、元祿の頃水越論として、大和河内の水論あり、金剛山大宿坊の古帳に據りて、遂に大和の勝となる、此より金剛山は大和國に屬せしとかや、予猶其詳を知らんと欲して、覺之進の實家なる中村安

太郎と云ふ人を招きて問へば、先年浪華の去る小説家が筆に收めたれども、虚構多くして實を失へるもあり、固より口碑に傳れるのみにして記録の徵すべきものなければ、其詳を知り難きも、此の村の末吉なにかし取調へ罷在れば、いつれ後より送りまわらすべし、願くば覺之進の爲に不朽の傳を立よと云ふ、予れ之を諾して別る、宿の婆覺山路は峻しく、日中は熱し、一睡して登り玉へとす、予れ此の婆覺たる一坏の土、富士白山にくらべて何ほどの事かあらん、まして近き頃肥後の三太郎に足骨はためしつるをやと大言して、田舎路の塵埃蹴立てつゝゆく、

名柄川に沿ふてゆくこと五六町にして橋あり、橋を渡れば水越峠路にして、左は金剛山路なり、やうく瓜先あがりにて、遙かに望みし時は左まで高しと思はざりしも、山麓より仰ぎ見れば其嶮突兀として、路殊に峻絶にたやすく攀ぢ登るべからず、一蹴してこえんのみと思ひつゝ、足に任せて駈上れる予は、百歩ばかりにして足已に疲れ息已に迫り、ゆきては休み、休みては又ゆく、此日炎威焼くが如く、背も爛れんばかり、汗は瀧津瀬のやうに湧きいで、衣もしととなり、十四五町ばかり登りて忽ち水聲の頭上に潺々たるを聞く、地獄で佛とは斯る時を言ふらん、俄に勇氣をまして駈あがれば、松杉十株ばかり立つたる中に、小さ不動の龕あり、龕の前に山の上より引ける水あり、清冽言ふべからず、予れ泣兒の乳房に取付たらんやうに馳寄りて、双の手に掬ひて渴をいやしぬ、

行きなやむ夏の山路の木下影

掬ふ清水ぞ命なりける

汗を拭はんとて手拭を浸さんとせしに、思はずも早瀬に洗ひ取られぬ、失策つたりと流に沿ふて追掛くれども、水速くして遂に見失へり、流るゝ汗は目口に入りて心地あしと言ん方なく、袂もて拭はんにも汗にぬれたれば甲斐なし、彼の手拭をささ水に洗ひて身うちの汗を拭取らば、いかに心地よからんと思へば思ふは流るゝ汗に心地あしくなりて堪へ難し、苦しみの餘り不圖一策を案出し、禪を脱して紐をはづせば、三尺有餘の手拭を得つ、乃ち不動の御前に念じて曰く、抑佛も即身成佛と説き玉へば、手足尻口何れの處か是れ佛身ならざらん、まして五蘊皆空なるをや、今予れ禪をもて手拭に代へ顔を拭ひ尻を拭ふも、佛を汚すにはあらずるべし、許し玉へと一人打戯れて、不動の御前なる水にさつとさゞぎて真裸となり、身うちの汗を拭ひ去る時、涼風四に起り。心身爽快、始めて蘇生の思あり、別を不動に告げて又も登る、此より上は禿山にして、しげり合へる夏草身を埋め、路は此頃の五月雨に崩れて求むるに由なし、或時は草の根にすがり、或時ははひあがらんとしてころげ落ちつ、又も十町ばかりゆきて四邊皆草、茫々路なき處に出でぬ、途方にくれて立ちたりしに、遙かに麓の方より呼ぶものあり、うれしくも振返れば、草刈男の左の方を指さして何やらん呼べと聞えず、さては左にゆけと教ゆるなるべし、うれしき人の心やと伏拜みて、左の方をたどりつゝ辛うじて山の半腹に至りぬ、木立なければ水もなく、熱さは譬ふるに物なし、杖を立て、東南を望めば、いつの間にか陰雲の爲に奪はれけん、大和紀伊の山々は蒼勃として只怒濤のうづまくが如きを見るのみ、山下の人家も已に分明ならず、稻田の中を流るゝ水のみ僅かに白銀を延たらんやうにきらめけり、折ふし南に當て

鳴神の響おどろくと聞え、見るゝ我も霧の中につゝまれたり、晝までは一點の雲もなく、天我爲に晴れ玉ひけんと覺えしに、今は我を斯るおどろしくもものすき中に追入れ玉ふ、心ありてか將心なくてか、其は兎まれ角まれ、今此地にて烈風雷雨に遇はば、身は忽ち千丈の谷に吹落されん、去りどて麓は遠し、此儘に逃歸らんは、武士が敵に背後を見するにひとしど、今は足の疲も忘れて、曳々聲して登る、人の一心はおそろしや、半腹までは幾度休みしとも知らざりしに、此處よりは息をもつかず、忽ち絶頂近く賑わがりぬ、霧の絶間より望めば、西南に杉の木立あり、御社は彼所なんめりと勇みて又も急ぎゆく、時に雷鳴漸く近く、陰雲漸く合し、霧さへ深く立籠めて、眼前三尺の外は見分けがたかりしが、やうゝ杉の木立の中に進みて、金剛山官林と記せる標を讀みし時、忽ち一聲の大雷鳴渡るや、樹震ひ山動くと共に、豆大の大雨瓶の底抜けたらんやうに降り來りぬ、絶頂は氣候頓に異なりて九十月のやうなるに、霧さへ深ければいと風冷にして汗にぬれたる衣ひえ渡りしが、此時又も雨にそぼぬれていと寒し、去れど鳴神の絶えず轟くに心踊りて寒さは忘れつ、

山の上は空の近くて鳴神の

響も殊にはげしかりけり

此の山のゆけとて晝さず、雨はますますつよし、折ふし山も裂けんばかりの雷鳴に、今こそ落ちかゝるらめと思ふこと幾度なるを知らず、嗚呼山中に震死せば、誰か此の骨を拾はんなど、いと心細くも覺えしが、又死なば其迄なり、若助かりて大宿坊に宿借らん時、着換なくては叶ふまじとて、囊の中

なる衣をぬらざむと心遣ひしもはづかし、  
 やうく鳥居を入れれば、左の方に磴道あり、草深く苔滑にして、落葉に脛を没せんとす、見あげれば杉の木立物ふりて神々しく、深山の嵐も神さびて、山鳩の聲いともすこし、磴を拾ひて登りつゝ御社とは見やれば、哀や朱の玉垣の跡もなく、檐傾き壁落ちて、四の御柱のみ立てり、屋根も御座も風にかせ雨にまかせて、荒れに荒れまさりつゝ、蜘蛛の巣だに結ぶ陰なければ、狐狸も宿からん由なし、予れしばしあきれて立ちたりしが、雷雨ますく、烈しきに驚きつゝ、神前にぬかづきて三拜す、

夕立も何か厭はん大神の

めぐみの露のかゝると思へば

そもく當山は大和河内に跨れる峻嶒の高山にして、古は轉法輪寺最上乘院と云ふ精舎あり、學寮雲の如く、僧坊山に満ちたる真言の靈場なりけるに、物換り星移りて今は法起菩薩藏王權現も何處へかゆき玉ひけん影もなく、獨り一言主の大神のみ猶跡を垂れ玉へとも、御社のさま如此し、元弘天子の遺跡空しく廢頽に付し、南朝忠臣の舊趾もあた荒涼に歸せんとす、嘆すべし嗟すべしなと思ひめぐらして、いと秋をしばりつゝ立去りかねしも、此時寒さ堪へがたければ、大宿坊に雨を避けんとて磴を下りてゆく、いまだ數歩ならずして右の方に大さやかなる草の屋根あり、霧のやうに烟立上る、終日山中無人の境をゆきて、剩さへ雷雨に遇ひし身の、忽ち人家を認めつるうれしさは空谷梵音の比のみならず、急ぎ門を入りて見れば、此はそもいかに、荒れ果てたるさまは御社にも劣らず、屋根よ

り落つる點滴は瀧の如く、四面より打込む雨は堂に満ちたり、固より壁くづれ柱傾ぶきたれば、人の膝をさらしたらんやうに、肉落ちて骨のみ残り、去れど頂より見じとき烟あがりしかば、無住の堂にはあらしと思ひて、一聲高く音なへとも、寂寥として答なし、又も叫べばいと奥まり處に應と答へて、足音高く出来るものあり、狐か狸か何者にやと檐下に立ちて打見れば、其人眼落ちて睜明に頰骨高く秀で、鬚髯願を繞り、年の頃は五十路ばかり、身には白衣を着けて袴を穿てり、問ふて曰く、何處よりか來玉ひたる、予れ笠を取りて容を正し、某は大和路より登山して、山中雨に遇ひ、はとく難儀するものなり、何卒一夜の宿を許し玉へ、とうやくしぐ乞へば彼の人、何の造作もなげに其は定めて難儀ならん、御覽せらるゝ如く我宿とても雨露を防ぐに足らぬとも、木下影にはまさりぬべし、とくくとして自ら一枚の簾を堂の真中に敷きて請せらる、予が衣裳盡くぬれたれば、許し玉へとて其を脱ぎすて、濕藤の蓑より着換を出して見るに、思ひしほどにはぬれず、とく着換へて席に着けば、例の屋根より落つる瀧の餘滴に又もぬれんばかりなり、因て席を西の方に移して空を打ながむれば、雨はいつ歌むべくも見えず、雷の鳴渡る毎に家動きてをそろし、主人曰く、御身は何處の人ぞ、予れ云々と答ふれば、さては去人なりしか、今宵はめぐらじき浮世の物語に、山中の鬱を忘れ申さん、某は當社の宮司葛城真純と云ふものなり、此より二十五町下れば千早の里なり、下僕を酒買に遣はしつればやがて戻り候はん、下物は胡瓜高野豆腐、外に御もてなしはなれども、心置なく語らひ玉へと云ふ時、杜鵑一聲、杉の木の間を鳴渡る、めぐらしやと首を回せば、今咲初めたる杜鵑花の上に鶯さ

ハ鳴く、山中無曆日は誠や斯る處を云ふらん、と浮世も忘れ果てつ主人は向ひ、斯る静けき山にお  
わしては心にかゝる雲もなく、鶴も延び玉ふべしと云へば、主人

山の上も猶浮雲のかゝるとは

知らで入にしこそをかひなき

と云ふ事も

類なき山に登りてたぐひなき

人にもけふは過ひにける哉

と云ひて世の中の事何くれと語りいでしに主人

鳴神の音にのみ聞く君をさへ

けふ夕立のつてに見しかば

と書きて示さる、主人手を拍ちて茶をもて来よと呼ぶ、幽に答ふる聲もなまめきて聞えしが、やがて茶  
をさへげて出来しは二十二の女なり、身には盤縷はまどへをも面は雪の如く、眉邊は眼涼しく、丹  
花の唇にはやかにして、庭の杜鵑花も色を譲り、楊柳の腰なよやかにして池の蓮も姿を恥めり、束ね  
たる髪に油氣なけれども、おのづからなる緑髪つややかに、特に起居振舞禮節に嫻ひてしとやかなり、  
ついで盆に枇杷をのせて持出しは年の頃十七八、同じく紅粉は施さぬとも、主顔世に類少し、手  
れ此は魔窟か仙境かと訝かりてしばし言葉なし、主人振返りて奥の方はいかにと問へば、やさしき聲

にて雨の猶漏り侍れば塵は皆わけて候よと答へてすべり出でぬ、

世の中に思の外的事多しといへども、此の度の登山は思の外なるはなし、思の外なる嶮阻になやみ  
て、思の外なる雷雨に遇ひ、思の外に荒れ果てたる御社を拜みて、思の外なる荒屋に宿借り、殊にお  
やしき道士に遇ふて、斯る山路に太和言の葉を拾はんとは思の外なりしに、又もや斯る山家に思の外  
なる二人の女子を見て、心はあやしくもさまざまにまよひぬ、予れ主人に向ひ彼の人々は何人ぞと問  
へば、彼は我娘なり、斯る山家に人となりて食しく世を送り候へば、禮義作法も心得ず、いと御耻か  
しくこそ候へと云ふ、扱は御娘子にて候ひしか、成はせ難にて思ひし時、人々の噂を承りて候、文の  
林に分入り、敷島の道をさへたどり玉ふよし、行末の御樂推測られ候よと云へば、主人深山の中の二  
本櫻、色も香もなし嘲り玉ふなと云ひて打笑ふ、やがて雨は晴れしも、月は已に暮さぬ、ほととぎす  
うぐひすは絶えず鳴かはして旅人をなぐさり顔なり、いとむさろしけれども、今は雨も漏らねば奥  
へ来ませとて、破廊を傳ひていと奥まりたる一間に請せらる、延喜式勅撰類題抄源氏物語其外歌集幾  
部か藏めたる箱の外は一物なく、四壁立つのみ、千早の使歸り來しと覺しく、酒なぞ持いで、餐膳等  
閑ならず、夜深くるまで主人と酒打のみて物語しつ、やがて枕に就きぬ、世のつかれに熟睡せし折し  
も、枕邊に立ちて夢驚かすものあり、誰ぞやと跳ね起きて見れば主人なり、雨暗れて杉の木の間、月  
いと面白く、杜鵑さへ鳴渡るに、起出で、見玉はずやと云ふ、其風流心に目覺むる心地して、つと起  
出で、庭に出で、見れば、十三夜の月皎々として、茂り合へる樹々の梢の露に影をやせし、山又山を



照らし渡せりけしきと面白し。

思ひきや千早の奥に旅寐して

杉の木の間の月を見んとは

折しも杜鵑鳴渡りければ主人のよめる

聞ずて、誰かは過ん古を

しのび音になく山はどよみさす

此の月古の宮居をも照しげん、武士の鎧の袖にもやどりけん、なぞ物語りて元弘のひかしをしのびつゝ、月影に佇むこと稍久うして又も臥床に入りぬ、翌日人々に別を告ぐれば、主人

葛城の山の御やしるもし聞は

朽果たりと人に答へよ

と云ふ、蓋し主人御社の廢頽を嘆き、修繕の志を懐くといへども、蹉跎如何ともする能はず、廣く四方の志士に請ふて志を成さんと希ふなるべし、此の山世に稀なる靈場にして、南朝の遺跡赫々たり、さしもの名山を荒廢せしめんこと誠に嘆はし、一老僕を案内者に頼みて立出づ

下路も亦險し、とろ／＼と下りかくれば筋を留むる機なくて、二三十歩一時に下る、東の方は禿山なれども、西は山又山に連なりて木立いと深し、此處の邊よりおしるや浪花の浦、兵庫、和田岬、千鳥も通ふ淡路島、茅渚の浦々まで見えわたたりて、景色畫の如しと聞きしかど、今日は霧立ちめて見え

ず、馬の脊に似たる山の上をゆく、左右は懸崖絶壁幾千丈と云ふを知らず、脚下に幽に谷川の水を聞く、二十二三町ばかり下りて、路の傍に水溜あり、所謂五所の秘水の一なるべし、又も二三町下れば、松の老樹五株六株立ちたる下に楠公の小碑あり、立寄りて之を吊ひ、又も一町ばかり下りて西の方突兀雲に入り老松鬱然たる處に至る、是れ古の千早城天主の跡なりとかや、中に楠公を祀れる小さき御祠あり、此處は金剛山の半腹にして千早村の上に在り、四面の深深きこと、東は百丈、西は七十餘丈とかや、山脊纒に一徑を通じて、巖巖崎嶇、坂急に路狭く、一夫之に當れば萬夫進まざる天然の險なり、予れ杖を古天主の下に立て、天地に俯仰し、徘徊徬徨、感慨山の如し、彼の十重八重かさなる山々の白雲は旗差物の形見かと思えて、峯の嵐のものすときは矢叫の音関の聲かと思はひ、東軍が掛けわたしたる雲の梯は彼處なるべし、薪を積み油をそそぎ、火矢を以て燒落せしは此處にや、なぞ思ひつゝ見ゆれば、襟袷滿眼、烟霧荒涼、楠公築く所の四方成樓、十七所の根城の跡、復た求むべからず、空しく松風の根を吹き、谷川の水の怒り且つ咽ぶを聞くのみ、

眼底山河雲若狂。忠臣嘗此護天皇。泉聲嘯咽松風哭。五百餘年遺恨長。

落日松風古成樓。雲梯秘水奈難求。荒涼千劔山中路。留客樵童說鬼謀。

導者に急ぎ立られて天守の跡を下れば、此より路いよ／＼急にして切立ちたる如し、予れ木の根にすがり、四ばひに這ふて下ると、導者見てくつ／＼と笑ふ、彼は杖をもつかず、平地をゆくが如く餘所見して下る、待て／＼と呼びとひる毎に笑ふてやまず、金剛山の隣家は此の千早村なれば、主用にて

日に三度は往來すと語る、山人の健脚うらやみへし、幸うじて山を下れば千早村なり、七十戸許りもやあらん、冬は高野豆腐を作りて生計とすとなり、此處にて手拭一筋買ふて導者に與へて案内の勞を謝すれば、主人に叱られんとて受けず、幾度も押返し、て投げすて置きつ逃ぐるが如く別れぬ、登り路は身体は勞るれども足はさしてたびれぬども、下り路は足腰痛みてつかれ果てたり、去れば此の邊楠氏の遺跡多けれども得もゆかず、只管家路を急ぐ、三里ばかり下れば森屋村なり、車やあると聞へばなしといふ、今は足きたびれ熱さつよくして一步も曳きかねしが、斯くては果てじと中食して余勇を盡し、行くこと一里餘、富田林に出で、車に乗り、柏原に至りて汽車に乗り、家に歸りしは其日の午後五時頃なりき、顧みれば金剛萬城の山々は、今日も夕立と見えて陰雲深く鎖し、雷鳴さへ遙に聞ゆるに、昨日の苦を思ひ出で、はつと一息つきぬ、此の夜彼の誘引せしも來さりける友人訪らひ來て、其夜は案の如く大川の涼舟に酔臥し、手紙は翌日見しが、時過つれば追つかんこと覺束なしとあきらめて得もゆかざりきと物語る、我れ山中の苦は説かぬを誇れども、折々痛む足をさすりて面をしかむるに、僞をのづからあらはれしをかし、さて旅の恥はかさずとやら、手も旅の歌もかさすてつ、其は又も白雲のこひしからん折々取いで、なぐさまんとてなり、時に明治二十五年八月十日

(完)

山陽は金剛山を雲霧に望みとやうに書きつれど是れ一杯の土のみと思ひ悔りて富士の嶺白山の嶺とも七寸の草鞋に踏破せし健脚忽ち不覺を取りし口惜しと今之を讀みて赧然たり百里を行くも

のは九十里を半と爲すとかやまして山路をや山に登らんものは初より此程の山をなぞ思悔らで静々昇りゆくべきなり功名唾手して取るべしと思へりし人々の白首淪落の嘆に似たれども少年登山の戒にもどかくなん

●奈良良巡

奈良の舊都は其れ人間の花園とや謂はん、推古天皇より以來東漸の文化を承けて、聖武孝謙の際に至り、文物典章言へば更なり、建築繪畫彫刻の美工の末に至るまで、融化して天工を奪ひ、渾成して人目を眩す、爾後物換り星移る者千數百年、其間遷都の變を経て、維新の亂に遭ひ、屢武人の蹂躪を免れざりしかども、古社舊刹、巍然猶存し、輪奐の壯、彫琢の巧、人をして天平の盛時を追想して、古天子の宏範を仰瞻せしむるに足る、是や神佛の擁護なるらん、今茲奈良町の志ある人々、名區の荆棘に埋れんことを慨き、勝地の草萊に萎ねんことを悲しみ、之を刈り之を修めて、以て遊覽の客に便にし、公園第一着の改良と稱す、紅葉色づかんとする頃、三都の新聞記者に檄して來遊を請ふ、其志太だ切なり、因て予は、晚翠、愚仙と相携へて杖を秋晴に曳きぬ、時に明治廿八年乙未十月十二日なり、此の夜對山樓に投ず、

翌十三日掌客の人に誘はれて先づ春日神社に詣でつ、春日野の杉並木は慶長年間に植ゑしものとかや、老木の枝天を掩ひ、蔭蔭這ひ懸りていと神々し、路の邊の老木の本に遊べる鹿の人を見て食を乞ふも

哀なり、すべて此の邊の眺は古土佐繪の趣あり、田舎人の先づ目を驚かさんは例の燈籠なるべし、其數二千八百六十八にして、幕府の寄進の燈明田千六百五十餘石なりきとなん聞ゆ、頗て緑樹鬱蒼の間に朱の神垣を望む、青丹よし奈良の都とよめるは斯る眺をや云ひけん、社務所には此度の東道なる青田吉三郎、鳥居武平等の諸氏先在り、打連れて拜殿に升れば禰宜宣詞を上りて人々の息災を祈る、神酒を拜受して出で、廣庭の神樂所に於て神兒の奏樂あり、心地いと清々し、終りて若宮を拜して過ぎ、南へ行くこと數歩、左の道傍に柚木燈籠あり、保延三年攝政關白忠通公の寄進に係り、今を去る七百五十餘年の古物なりといふ、斯くて今回改修したる山路を歩みて御蓋山に登る、三町餘にして大杉あり、周圍三十尺、長さ六十尺、幾百年をか経つらん、稀有の大樹なり、我等人間の累を絶ちて、此に山籠し、終日老樹と物語らば、如何に耳新らしき古事をや聞かまし、又も登ること三丁許り、繞りて山の東腹に至れば、蝙蝠窟あり、窟の高さ二間、廣さ五間、奥行十五歩、昔日春日砥を採掘せし跡なりとぞ、今猶鑿の痕あり、蝙蝠の此に栖めるより名づけしなるべし、窟より上ること二丁餘、御蓋山の絶頂に至る、浮雲の嶺と云ふ、稍坦なる處に小さき社あり、所謂本宮の社なり、下ること半丁許り、七本杉を得たり、一本の老樹風の爲に北に向て打倒れたるが其根未だ枯れずして、其枝自ら長し自然に生ひ茂れるもの、如し、親は亡くとも子は育つとやらん、此の杉も亦然り、奇と謂ふべし、昔は九本杉と稱せしも、其二本は已に枯れ、往年亦一本を雷火に焼かれ、今は唯六本を存するのみ、六本並列して亭々雲を凌ぐ、大なるは周圍一丈二尺小なるも四尺ばかり、春日神社に詣でん者は必ず御蓋山

に上りて大杉並に蝙蝠の窟と此七本杉の奇觀を探るべし、我輩七本杉の下に立ち、木の間より北の方を眺むるに、渺々たる田畦龜甲の如く、白屋草橋其間に斷續して、一水蜿蜒西に向て流注す、之を木津川と爲す、前に生駒の遠翠と木梢婆娑の間に望む、放曠久しうして山を下る、左手は道稍裏にして遠し、乃ち落葉に足踏みしめ、樹根に足踏掛け、一氣直下して、若宮と大宮との中間に出づ、社の前に白藤の瀑布あり、御手洗川の下流を寛にて落せるさま京の音羽にも似たりや、春日野なる圓窓亭に至つて午餐を喫す、此圓窓亭は春日社の西に校倉とて經卷を納めたりしを、維新の際經卷は焼きて金を採り、校倉は毀ちて圓窓を穿ち小亭となしたりしが今又此に移せしものなり、四面の圓窓極めて雅致あり、亭中に圓座を設け、箕座して食に就く、尾花川は亭の下を流る、岸に楓あり上葉稍色つけり食了りて圓窓亭を出づ、右手の方御蓋山の頂を望めば、老杉一簇挺然として林梢の上に立てり、是ぞ彼の七本杉なる、春日大鳥居の南なる芝生を淺茅原と曰ふ、京にも武藏にも此名あり、淺茅生の小野の篠原と詠めりけんは何處にや、清らなる小亭いくつも立つ、浴室をも設けたるあり、韻松亭より望めば南は淺香山近く目睫の下に落ち、金剛萬城の諸山は遠く雲際に巍立して、所謂楠公が義を擧ぐるの秋を想見せしめ、西の方秋篠、外山、膽駒の群山、蜿蜒連互して或は淡く或は濃く、景色得も言れずよし、眼下に一條の大路西に延びたるあり、是なん古の三條大路の條なる、今は彼の黍離々麥秀で、漸々たれども、彼の邊こそ往時は笠殿の下熱間の衢なりけり、桓武遷都と與に九條の坊衢は山城に移りて、今猶残れるは春日社東大興福等の諸社諸山に依りて生業せる商家客舎のみなんめり、今の奈良

町是なり、西京南都今は齊しく、帝王の古京なれども、彼は世を経ること久しからざるが爲に、奠都の祭賑はしく、此は目を仰ぐれば江山空しく在りて懐古の客を待つに過ぎず、誰か盛衰の感に堪へざらん

大鳥居の前を西へ行くこと半町ばかり、大御堂に詣り、天平中玄防僧正の開基にして、今の堂宇は天正八年再建する所なり、軒傾ぶき扉朽ちて、滿目荒涼なり、每晚七六の兩時に鐘を撞きて勤行の時を報せしより、俗に十三齋と稱す、神鹿を殺したる者を石子詰の刑に處したるは此處なりけり、院本を語り傳へて、其古跡今猶境内に存せり、吾妹子がねくれたれ髪と詠めりけん衣掛柳は、堂の下なる猿澤の池の東岸に在り、殘柳婆娑として影を池水に映すも哀や、池水は是まで流通することなきより、色濁りて臭かりけるが今は幸川の流を引きて、逝く者晝夜を合てねば、水清くして鏡の如く、魚躍りて珠を碎く、亦是れ一幅の活畫圖、足を返して興福寺境内に入りて大湯屋を見る、應永十八年の建造なりとかや、屋内に鐵の大釜あり、周圍一丈五尺ばかり、高さ四尺餘、厚さ二寸五分、鼎の足ありけるも其一を失へり、大湯屋より西の方數歩小池を穿ち、池の上には小亭を立つ、亭の中央にも亦大釜あり、土中に埋れて其口のみ露はる、興福寺食堂のにやあらん  
釜より西數十歩三重塔あり、康治二年鳥羽天皇の皇后待賢門院の造立せさせられし所に、堂内合天井柱などを裝飾せし模様彩色は天平の趣味を存せり、階を拾ひて北へ上り行くこと十數歩、北圓堂に詣る、養老五年藤原不比等の周忌に勅立せさせ給ひしと云ふ傳ふ、堂は寶珠八角形にして寛治六年

の再建に係る、本尊彌勒菩薩木像と四天王四体乾漆像は定朝の作とかや、釋迦如來坐像一像と與に鑿腕言ふ可らず、南圓堂も亦北圓堂に同じ、弘仁四年左大臣藤原冬嗣父の遺志を繼ぎて建立せし所に、寛保元年の再建なり、本尊は不空四綯索觀音にして堂中殊に優麗なるは正觀音木像、四天王木像四体と、唯識曼陀羅を扉に書きし厨子となり、上部色紙形贊文の書体を見るに世尊寺様にて八百年以前の物たること明なり、堂の前に一基の銅燈籠あり、鑄造したる火袋の隙子は逸勢の書と傳へしが、近頃は空海の筆なりと云ふ者も云へり、孰れか是なるを知らざれども、本堂は弘仁中の創立なれば、後説こそ中らめ、此障子は興福寺の寶藏に納めつ、

さて又金堂内の佛体にして寫生的精妙なるものを世親無著兩菩薩の木像と爲す、儼然として生るが如し、其他釋迦十大弟子中四体天龍八部衆中の六体は乾漆像にして風尙高雅なり、東金堂中に屹然として優れたるは運變作と傳ふる維摩居士、梵天、帝釋、文珠、十二神將、四天王、觀音の木像なり、尙他に缺損したる名佛像は幾百なるを知らず、累々として堂内に堆積せり、中には名作あるべし、見たりて興福寺事務所に至り、寶物を拜觀す、珍らかなるもの多きが中にも、聖武天皇御念持佛なりし金銅藥師如來座像、華嚴經、泗濱淨器、半肉彫十二神將、天燈龍燈兩鬼像、慈恩大師の畫像等は、天下に得がたき至寶なるべし、若を喫して少しく憩ひ、袂を分ちて旅館に歸りしは日暮れんとする比なりき、此の夜春日の森に鳴く鹿の音を聞きて終夜得も寐られず、

翌十四日予と愚仙の二人は地獄谷の石佛見んとて晨に起き雨を衝きて出でぬ、晚翠一人車を駛せて水

谷川新架橋の畔に至れば、已に東道の人々待合せ居たるより、相伴うて水谷川の水源に向ひ、修理したる道路を東へ進むこと三四町許、洞の紅葉と稱する處に至る、楓樹兩崖より枝を交へ、鬱蒼として溪流の上を蔽ひ、遽然として洞の如くなるより此の名あり、山姫の錦を織りたらん比は景色如何ならん、此邊りは藤樹殊に多く老幹蟠屈して或は蛟龍の天に登るが如く、或は巨蟒の淵に飲むが如し、奈良公園の藤は藤原氏の盛んなる頃に多く栽えたるものなれば、奈良獨擅の眺にて他に比類すべきなし、行くこと數歩にして氷池の舊趾あり、池中に磐石あり、日月を刻せり、依て此地を月日といふ、昔朝廷御の氷を結ばしめし所なり、冬時温暖なれば朝廷に於て堅氷を結ばんことを祈禱ありきと云ん、氷室は和銅年間に生まれり、西行法師の歌に「御蓋山春は音にて知られけり氷をたたく鶯の瀧」とあり、此瀑布は水谷川の水源にて、氷池より東北二十餘町、不日道路を開鑿して車を通せしむる計畫あり、幽邃にして避暑に適する地なるべし、夫より嫩草山の麓を過ぎて手向山神社に詣てしが、手向山は往時紅葉の名所なれども、今は枯れていと少し、近頃に至りて多く之を栽えしと云ふ、同社は天平勝實に宇佐八幡宮を迎へて祭り給ひしものなるに、社格の春日社より卑きは如何なる故にや、解しがたし、社殿の前に名高き高麗駒あり、三位法印雲慶作と墨書したり、宇体は作柄の當時のものにあらざるが如し、且雲慶といへる佛師の名を知らず、神寶中三個の神輿は近年の製作に係れども、古式を失はずして優美なり、他の神社も之に倣へかし、舞樂の面、唐鞍等は稀世の珍なり、拜觀了りて法華堂に詣る、俗に三月堂と稱す、東西九間、南北十四間あり、良辨僧正の開基にて、東大寺中最古の建

築なるが、千餘年來祝融の災を免れつるより、堂内に安置する數多の佛体も製作の靈妙驚く可き者多く、就中良辨作と傳ふる不空羼索觀音木像は金色にして一丈二三尺、脇士梵天帝釋は乾漆着色にして一丈許、行基菩薩の作と傳ふ、尤優秀なりと爲す、同作四天王は是も一丈許、面貌姿勢雄壯にして、踏みたる邪鬼の骨相筋肉共に巧妙を極めたり、塑像には日光、月光、吉祥天、辨財天等孰れも天平當時の作たるに疑なし、智證大師作と傳ふる不動尊於迦羅、逝多迦の木像三体は着色剝落して、面貌手足の木理暴露し、宛ら皮膚の紋理の如し、又乾漆塑像の缺損したる所を熟視するに、眞の衣を着せ、其鍍のまゝに塗上げたる痕あり、昔の人の製作は千歳を経て剝落缺損したる後に至り、初めて其の用意親切にして精巧なる妙所の含蓄せるを知らしむ、今日の人情に比して其差異幾何ぞ、此堂宇の背後の厨子に執金剛神塑造の像あり、將門退治を祈る爲めに造りしとかや、古來秘藏せし故に傳彩燦然として憤怒の面貌、四肢筋肉の張れる力士の骨相生るが如く、非凡の作なり、二月堂は烏有に歸して寛文九年に再建する所なり、佛体は不空羼索觀音を安置す、秘佛なれば窺ふを得ず、美術として見るべき程のものなし、

開山堂は二月堂の下にあり、寛仁年間に造る所なり、良辨僧正の坐像を安置す、是も亦當時の名作なり、三昧堂念佛堂にも彌陀地藏の木像あれども、法華堂のには及ばず、鐘堂は四間四方、梵鐘の高さ一丈三尺餘、周圍二丈七尺、厚さ八寸、熟銅五萬二千六百八十斤、白銅二千三百斤を以て、天平勝實四年に鑄造する所なり、此日は玄武山にて茸狩を備さん、豫期なりけるも雨の爲に果さず、東大寺事

務所に至りて午餐を喫す、

午后東大寺の校倉に藏する寶物を見る、住吉慶恩筆聖武天皇と行基、良辨、波羅門の三僧を畫けるを四聖の像と云ふ、最古のものなるに、酷く剝落せるを惜けれ、華嚴五十五所の圖は隋唐時代の畫にして、渡唐僧の持來りしにや、近頃保存の爲め板貼にしたり、又別に此圖の繪卷物あり、其書体に就て時代を考ふるに、古土佐の盛んなる鳥羽天皇時代に右の圖に依りて寫したるものと覺しく、筆力餘ありて、氣韻頗る高逸、繪卷物中にて過去現世因果經に亞ぐものなるべし、顏輝筆十六羅漢何れも生動して、添景殊に優れたり、舞樂面にて貴徳、陵王、納曾利を殊に秀逸と爲す、古寫經には聖武天皇宸筆賢愚經、大涅槃經、須臾天子經金光明最勝王經等、光明皇后御筆大愛道比丘尼經、大毘沙婆論、孝謙天皇宸筆佛說阿難四事經其他有名の寫經古文書舉て算ふべからず、近頃寺中より發見せしめて、黒漆に密陀僧を以て模様を彩色したる唐櫃を示せり、天平以前の製作なるべし、去りて大佛殿に登る、大佛殿は天平勝寶四年聖武天皇勅願成就の大伽藍にして、高さ十六尺、三十間四面、本尊毘盧舍那佛金銅結跏趺坐の像は高さ五丈三尺五寸、面長さ一丈五尺、螺髮九百六十六、高さ各一尺、後光高さ八丈三尺、鑄料熟銅七十三萬九千五百六十斤、鍊金一萬四百四十六兩とぞ聞えき、爾後四百三十二年を経て、治承四年平重衡の爲に焚かれ、俊乘坊重源大勸進の願を發し、源賴朝之を再造せしめ、其工建久六年に竣り、又三百七十三年を経て、永祿十年松永久秀の兵變に罹り、爾來百四十餘年を過ぎ、公慶上人勅許を奉じて勸進し、寶永五年に修復の功を遂ぐ、斯の如く兩度の火災に、佛頭は棟木に打た

れて傾潰したるを、元祿の初山田道安幕府の命に依りて修繕せしものなれば、他の天平作佛像に比して、大に劣る所あり、其金色赫爛たりし時代には、燦然として目を眩ますばかりなりけん、鍍金の跡は今尙火を免れし蓮座の花舞にのみぞ残れる、伏して惟みるに天平の盛時に當りては、天下太平にして、國土安穩に、文物工藝、一時並に進み、美術の如きに至りては既に上乘の域に達しつゝ、萬民帝則の中に鼓腹して彼岸に往生せざるはなし、是れ天祐皇讓世を相承けて國体の然らしむる所とは云へ、亦聖武自ら深く三寶に歸依し玉へりしに因らずんばあらず、而して斯の壯大なる佛像伽藍の建立も、偏に大千世界の衆生を濟度し玉はん大慈大悲の教慮にぞおはしましたしける、氣宇の大なる、争でか驚嘆せざらん、我輩渴仰の間、古の盛なるを想ふて、而して今の衰えたるを見るに、感慚横生し、涙進しりて禁め難し、夫れ此の佛像伽藍は我邦千年前の文明を世界に誇るべき一尤珍寶にあらずや、去るを瓦落ちて雨の洩るに任せ、檐傾ふきて月の窺ふに委ね、滿目荒涼、修復するを知らず、殆んど亡國の觀を呈するは、淺ましども口惜しども云ふ許なし、抑も大和は皇祖奠都の地にして、奈良は列聖守成の所、鴻業此に開き、宏範此に垂る、天下後世宜しく敬慕して忘れず、仰瞻して措かざるべき也、而して勝區名利の保護存留は、誠に國費に資るを當然と爲す、時の有司たる者、あはれ一たび頭を回らして此失体を慎へかし、扱又殿前の廣庭に金銅八角の燈臺一基あり、高さ一丈三尺、扉に伎樂菩薩と獅子とを半肉に鑄て、臺柱に經説を彫りたり、天平年代の製作なり、南大門東の密迹力士は湛慶、西の金剛力士は運慶の作なり、又其内部に石造高麗狗あり、前の燈籠及び力士と此高麗狗とは他に比類

なり最古の物にて、且其精巧及ぶものなし、勸學院に入幅大菩薩を安置せり、僧形の木像なり、安彌陀作建仁元年開眼と墨書せり、厨子中に安置せるを以て斯く墨箱を経たりとしも見えず、能く着色を存し、端正優麗なり、

戒壇堂は聖武天皇光明皇后の戒を受けさせ玉ひし靈場にて、日本支那天竺の土を以て壇を築きたりとかや傳ふ、此壇の四隅を守護する四天王は、今人塑像と稱すれども、夾紵といへる製にて、白雲に雲母を混和し、壁の如く紵をツタとして剝離を防ぎたるもの、法華堂の梵天帝釋と同伴なるべし、鞍造止利の作とは傳ふれども、天平の作なるべしとこそ聞け、近年美術者流の感歎措かざるものなり、蓋し四天王中の歴巻なるべし、爰に全く東大寺の巡覽を了れり、(十四日の二節は晚翠の所見を録す) 扱此の夕は公園改良祝賀會を奈良俱樂部に開く、予も晚翠愚仙と興に之に臨めり、大坂京都の新聞記者數名を主賓とし、奈良縣官及び奈良町の有志者無慮數十名、雅樂晚々の間に着席しぬ、庭いと廣く、芝生遙に若草山に連りたらんが如く、姫小松の影小さき池水に映るひ、鬱々たる春日の森は其右手を掩ひて、時に鹿の遊ぶを見る、狂言栗焼を演じ了れば、青田町長挨拶を述べて、歌妓舞姫をして酒を佐けしめ、主客歡を盡して散じぬ、

十四日雨、朝は先づ氷室の社務所に會して同社を拜し、唯一の寶物なる陵王の樂面を見る、氣韻生動の妙は東大寺四天王寺嚴島などに藏する者も一步を譲るなるべし、去て帝國奈良博物館に至る、千餘年の夢忽ち覺めて、天平より直に明治の世に逢へる想あり、本館は洋式の建築にて、明治二十五年に起工して二十七年に竣工し、北方の室は壁未だ乾かざるを以て、南方及び中央の室を開けり、法隆寺より献納して御物となりし阿佐太子筆聖德皇太子脇士山脊殖粟兩王の畫像、金銅諸佛像、聖德皇太子御筆の寫經、鳳凰丸螺細摸唐櫃、片輪車手箱の類、近衛家の御歴代宸筆、黒田家の雪舟筆山水四幅、蛛須賀家の顔輝筆六仙人其他諸精神の家寶なる書畫器什等、觀るべきもの甚だ多し、正午汽車にて法隆寺に至る、先づ東院なる舍利殿に登る、聖德皇太子が生れながら握り玉ひしと傳ふる佛舍利は水晶の寶塔中に藏り、錦囊を以て十襲したるを、寺僧和讃を誦して拜せしむ、いと殊勝なり、夢殿に安置する觀世音は秘佛と聞さしが、此頃大修理の爲に舍利殿に移しまゐらせつ、幸ひに傍より窺ひ拜せしに、等身の立像にて寺傳に木像といへど、乾漆なるが如し、古來白布を被せまゐらしたるが故に、能く彩色を保存せるが、古色なしといへども椎古時代のものによと思はる、中宮寺の本尊如意輪觀音を拜す、等身半跏趺の木像にして、同式のを大養廣隆寺に見し事あり、共に木像にては最古のものなるべし、天壽國曼陀羅は聖德皇太子の御母穴穗部間人皇女の造らせ玉ふ所、今は凡て刺繡と稱ふれども、晚翠が通に曰く、繪は糸を食して作る者、即ち縫ひし畫なり、繡は模様を衣服などに縫ひたるを云ふ、去れば繪の事は素を後にすと讀べきなりと、去れば此の幅なぞ我邦最古の繪なるべし、聖靈院にて聖德皇太子御像脇士山脊大兄、殖粟、茨田の三皇子と惠慈法師とを拜して總封藏に入る、當寺の寶庫なり、所藏の什寶概ね皇室に献じて御監修補の資を受けしが、九面觀音木像、金銅佛、紋錦旗勝曼經講讀圖二幀、金剛筆と傳ふる毘沙門天、大股圖、周文筆山水人物屏風等今尙在り、

金堂は用明天皇の勅に依て建立ありし我邦最古の伽藍なり、爾來幾回か修繕を加へたるも、大體に於ては變更したることなからん、或説に天智天皇九年に火災に罹りしといへども、數多の佛像を存したる、且木造にて彩色を施したる、いと大きな三個の天蓋に數多の伎樂天女と鳳凰とを附着せる、光燄に鞍首止利佛師の銘ある、當代の作たるを證すべし、若し火に遭はば争でか是等の佛像と大天蓋とを他に移すことを得ん、鑑識の進むに隨ひ、古畫中の傑作たることを知るは、堂内四壁の佛畫なり、彌陀、寶生の淨土、藥師の刹土、釋迦の國土等を畫く、曇徽筆或は止利の筆ならんといひ、區々の議論あれど、固より當代の畫風にあらず、是まで他に類推すべきものを見ざりしに、堂内に光明皇后の母公橋夫人の造らしめ玉ひし金銅彌陀三尊を安置したる高さ八尺餘の厨子ありて、此龕柱の四面に密陀繪あり、陽に對したる三面暴露したる爲めに已に剝落したるも、陰の一面には壁畫と筆意骨相の同じき三体の佛畫を發見したり、此厨子の果して橋夫人の造らせ玉ひしに疑なくば、寺傳は知らず、壁畫は天平年間修繕を加へたる際に畫きしに疑なし、抑法隆寺は我邦文物の源美術の業にして、史學及び百工に資する、舉げて言ふ可らず、其光彩陸離として心目を眩耀する者、筆も言葉も如何で及ばん、我邦文明の本く所を知らんと欲する者、一たび指を此の中に染めざる可らず、我輩も五重塔其他諸堂を巡覽せまほしと思ひしかども、秋の日の短かき、黄昏近くなりぬるに、今はとて事務所に入れば、茶菓を餐し、金堂古佛後背の銘の搨本を贈らる、此日諸堂を案内せしは松田師なり、深く其勞を謝し、遂に辭して出で、汽車に乗りて大坂に歸りぬ、

此の行奈良町有志者の待遇鄭重なりしは深く謝する所なり、且つ家苞として奈良の土産なる壘、筆、奈良扇子、奈良漬、あられ酒、青丹よし、奈良のつと、大佛茶碗、奈良名所圖、法隆寺案内記などを贈らる、此に深く謝意を鳴らす、但吾輩の筆拙くして奈良の名勝を世人に紹介するに足らざるは、此のみを遺憾なる、去れど奈良の勝、天下の耳目に在り、況んや人々の修復保存を怠らざるをや、遊覽の客、四時絶ゆること無きを疑はず、世吾輩の筆を待んや、

此の篇は實に晚翠愚仙と予との合作なり而して古物の批評は晚翠の助言多し

(完)

●觀 佛 記

青丹よし奈良の舊都の名所見廻るうち、或人の地獄谷の石佛は世に珍らしきものなりと語るを聞きて、一覽せまほしと思ひし折ふし、鳥居ぬしより石佛の搨本を贈らる、鳥居ぬしは篤志の人にて、奈良名勝の探討に力を盡し、荆棘を刈り、葎苔を掃ひ、山々谷々を経めぐりて、幽を聞き徹を顯はせしこと妙からず、此も亦其一なりけり、予れ展覧の餘、遊意禁め難く、十月十四日つとめて起出でつ、愚仙と與に草鞋穿きて旅館を出でぬ、導者は日置並川吉田の人となり、昨夜より雨意なりしが、此の朝御笠山の彼方いと濼し、人々天懸しとて留めしかども、佛を訪ふて瀟佛と爲らんこそなかくに難有からめな也打戯れてゆく、退之が野暮に反駁かんとにわらず、陽明が眞面目に對抗を張らんとにもわらず、誠に好事の業なりけり、車に乗りて雲消の澤を過ぎ、尾花川を渡り、左に折れて支那が墓を訪ふ、



怪しげなる門扉堅く閉したるを開かせて入れば、草茂りて路を知らず、礎崩れて拾ふに由なし、昔は法華宗の寺やありけん、誰のとも知らぬ墓の石塔には皆七字の題目を刻み、松の一簇茂りたる丘の上に一石塔あり、之を玄防の墓と爲す、塔の石には四方に諸法實相と刻みたり、其傍に打倒れたる石あり、正面に皇帝天長武將地久繼王廣布萬民快樂と記し、其下に威得開基日實聖誌と見ゆ、日實とは此處にありけん法華寺の開基なんゆり、其一面に南無妙法蓮華經賜紫僧正玄防之御頭塔と記し、裏面には自天平十八丙戌至寛保三癸亥一千歳建吊之也と記したるに徴すれば、一千年の忌辰を追吊して石を建てたるなるべし、寛保より今日に至るまで百五十餘年なり、玄防が御賜の紫衣を大内山の夕日に翻へして、内道場に入しけん時の威力如何なりけん、皇太夫人光明皇后の宮に就きて一たび玄防と相見つ、惠然開悟して沈憂を忘れ玉ひさどやらん傳ふれば、其法力の怪しき、至尊をさへ傾ふけん、千二百年の今に及びては、墓門草深くして人跡到ること希に、一坏の土寂として香花の薫るを聞かず、一片の石倒れて空しく苔藓の封するに任す、前世の宿業か、抑在世の佛罰にもや、拜せずして而して去る、此丘の周囲にも佛體を彫りたる石いくつも濼間に没せり、當時の弟子の所爲にもや、去りて新薬師寺に詣づ、本尊薬師如來の坐像は行基の作と傳ふ、聖武天皇御眼病平癒の勳願に成りしものにて、御眼の殊に大く明なるは、之が爲なりとかや、去ればにや諸相圓滿なる中にも、尤も威嚴あり、覺えずも人をして頂禮せしむ、印度傳來と聞ゆる黄金香薬師を初め、止利佛師作と傳ふる日月二佛及び十二神將の泥像、並にいどめでたし、須彌壇も希代の物なり、薬師堂は建立以來舊態依然たり、

斯る建築は奈良に在りても有數なるべし、庵室に入りて涅槃像を見る、世に名高き古畫なり、其外賣物いと多し、老尼者を表て佛像彫刻の巧拙を説く、此の比は佛に事ふる人も三寶の甚深を説かで、あらゆる美術の批判をぞすなる、去らば佛工をこそ崇めまつらめ、南無止利如來南無定朝菩薩の利益は遊覽の客を引きて寺を觀すなるべし、辭し去りて寺を出づれば堂の屋根の鬼瓦叱咤して我を逐ふ者に似たり

雨少し降りて又止む、瀧坂の麓に至りて車を下る、麓に奈良公園の園丁詰所あり、之より登々たる深林其深さを知らず、瀧坂川を境にして右手は地獄谷の官林、左手は春日山の公園なり、公園の廣さ五百餘町歩に涉り、寺社池沼深林河溪を包めり、規模の大なる世に其比なかるべし、路は泥深く石横りて、牛馬も亦難む、古松老杉、路を掩ひて晝暗く、泉聲淙々、轉寂寔を破れり、湖畔山腹の間、老楓幾株か、溪に臨みて枝を交へ、古藤蟠屈、龍の如く蛇の如し、夏の初つかた、秋の醗なる頃、其眺め如何ばかりなるらん、此の路もとは月の潮街道なりけるも、今は伊賀越の路改まりて、只賤の男の薪を負ふを見るのみ、上ること四丁餘にして路傍に石あり、之ぞ寐佛なる、其上にも石佛數多あれど、歸路に譲りて又も上ること四丁ばかり、土橋を渡りて川を左手に見つ、既にして川の上なる絶壁に奇岩削るが如きを見る、岩に佛體あり、俗に謂ふ所の朝日觀音是なり、岩の高さは十八尺幅十五尺、彫る處の者は、中は釋迦(後背より見)、南脇は地藏(同じく見)、北脇は觀音(同じく見)の三尊、東に面して立つ、肉彫いと巧なり、亦是れ路傍の一奇觀、又上ること四丁許、鳥居あり、路の傍に石地藏立ち玉ふ、

左は本道にして、右は地獄谷官林なり、右手を取りてゆくと、路細くして茅葺生い茂れり、池あり、昔しは池の谷と云へりしを、近き頃掘りて池と爲しけるが、鍋釜などを底より出でしとなり、細徑迂回、荆棘漸く深し、地藏より八丁にして聖人の窟に達す、窟は南面して開けるが、高さ八尺五寸、幅十一尺五寸、奥行九尺、石の面に三佛を筋彫にす、本尊は釋迦坐像、高さ四尺八寸、脇士は皆立像にて、左は彌陀(高さ三尺五寸)、右は觀音(高さ四尺)なり、窟中の左壁にも缺損せる筋彫の坐像あり、右壁にも數体の佛像ありけんを覺しきも、石は春日砥なれば、年を経て崩陥しつ、其形辨じ難し、本尊釋迦の相は端嚴温良にして、渾然瑕なし、或人は法隆寺の壁畫に似たりと云へり、よも尋常佛工の作にはあらじ、定めて是れ大徳の刀なるべし、衣には朱を施し、金箔の痕、模糊見る可し、抑此の邊を地獄谷と稱ふるは、沙石集の和光利益甚深の物語に、春日野の下に地獄を搦へて取入れつ、とあるに因みて呼び習はせしか、將た其名久しく傳はれるより、沙石集も斯く附會して書殘せるにや、地獄谷の南に南圓山あり、高田山の南岩井川の上を岩淵寺の趾と爲す、岩淵寺は天平十年三月聖武天皇御母の御願の爲に建立せられし靈跡にして、其後空海も此に住しことあり、いつの比にかありけん、當寺に美童あり、伊王殿と云ひしを、永隆寺の法師の爲に害せられけり、或は曰く當寺の若法師天地院の美童を殺して若草山に自殺したりと、兩説孰れか是なるを知らねども、美童の事より兩寺の争鬭を引起し、同日互に伽藍に放火し、遂に廢寺と爲れりと云へるは信なるべし、今は岩淵千坊の名のみ残りて、美童の傳を尋ねん跡だにもなし、千坊とは僧坊の數にはあらで、伽藍の敷地を云へりと鳥居ぬしの語れりき、一坊は

二丁四方なりと云ふ、坊衢の制には八戸を行とし、四行を街とし、四街を保とし、四保を坊と爲すと云へり、去れば千坊の廣さ知るべく、當時は此の邊も岩淵寺の境内にもやありけん、去れど此の佛像千年を経たりとしも覺えず、近き比は此の山大乘院の寺領なりと云ふかや、兎にも角にも大徳の僧此の窟に籠りて苦行を積みけんより、聖人の窟とは呼べるなるべし、

聖人の窟を東に去ること七八歩にして更に一大窟あり、高さ九尺、幅二十一尺、奥行二十二尺、奥の高さは三尺五寸、幅十三尺、其廣く且つ坦なる殆ど三四十人を坐せしむべし、前後左右を索むれば佛体を刻めるを見ず、人の住みけんを覺して、袋棚の如きあり、持佛壇の如きあり、其狀彼の御笠山の蝙蝠窟と異なれば、採掘の跡にはあらで、必ず是れ世を遁れて行ひすましけん人の遺蹤にもや、去れば身は此に住みて朝夕彼の石佛には事へしなるべし、例の沙石集に、南都に少輔僧都璋圓とて、解脱上人の弟子にて碩學の聞えありしが魔道に落ちて或女人に付きて種々の事申しけると見ゆ、此は見ぬ世の昔語なれど、後の世にも似通ひし事こそありけれ、此の日行厨を提げさせし翁は、年六十ばかりにて、元は大乗院の寺男なりけるが、瓢の酒を勧めつ、野夫いと壯かりし頃なれば、今より凡そ四十年ばかり以前の事と覺え侍る、大乗院門跡の家來に中御門右京となん云ふ侍の弟に某と云ふ者ありき、奈良瓦堂町に住みしが、如何なる仔細ありてか發狂しつ、家を脱けいで此の窟に籠り、髪を削りて僧となり、人は崇めねども自ら上人と稱して、米鹽魚肉を斷ち、朝には溪の清水を掬ひ、夕には梢の葉を採り、疏食水飲して窟中に跏坐し、鳥を友とし猿を僕として春秋を知らず、麻の衣は岩

問の昔もろどもに垢つきぬれども、讀經の聲は峯の松風と與に絶えぬこと、二年三年に及びぬ、斯くて折ふし一本齒の高足駄を穿き、手に洒落木の長き杖をつき、身には茶麻の法衣海草のやうなるを着て世間に出づれば、初こそ兒童少女等がそれ春日山の騙詐上人のおはせしぞとて哄笑きつれ、後には愚夫愚婦の徒、誠の上人と崇めて、歸依信心淺からず、是より上人の名は三笠山の大杉より高く、一時法界を風靡したりしに、遂に一人の女に墮落して、おはれ百日の説法を破戒の烟に附し了んぬ、斯くて上人は山を下りて人間に出でしも、奈良には住み兼ねて、故郷なる大河原に逃げ歸り、五六年前七十有餘の高齡をたもちて没りつ、彼の女人は今も猶坊主落しと歌はれて存生へ侍ると語れり、此の翁大乘院に奉公せし比、屢寺領なる此山に入りて、上人をも見たりとなん、嗚呼窟中の三尊佛は、長に風雨陵谷の變を免れて、幾百年をか閱し玉ふらん、窟は徒に聖人の名を留めて、空しく墮落の窟を貽す、佛は即ち魔か、魔は即ち佛か、邪正一如にして佛魔一体か、但此世は夢中の夢にやと打笑ひて、晝飯ものしつ、窟を出づれば雨をばふりて、帽も裳もしどいなり、彼の岐路の處より右折して、且つ上り且つ下り、細徑を傳ひ行くこと三丁餘り、始て本道に出づ、雨にぬれしも、酒を被りつれば冷なるを覺えず、四町ばかり下りて右手の林の中に分け入り、穴佛を見る、窟の高さは六尺、幅十一尺、痛ましや暴風の爲に窟上の老樹打倒れしより窟の天井隨うて崩陥し、窟中の佛像今其半を失へり、其存する者を觀るに、佛体は皆半肉彫なり、窟の西端に毘沙門天像あり、長け三尺、刀勢凡ならず、其次は彌陀其次は釋迦、并に坐像にして、長け三尺、其左脇に〇〇二年八月二十日始之作者今

如房願意の數字を凹刻す、年號の字毀れて辨じ難し、此の佛蓋本尊ならんか、其東の坐像は面部破毀して見分け難し、此は西窟なり、東窟は天井も半を存す、其高さ八尺、幅十二尺、奥九尺、窟の西の端に多聞天あり、(背後共に)其次は十大弟子四体、身の長け同じ、東の方には僅に二体の佛像を存するのみ、是すら毀損して辨すべからず、正面にも左右の壁と同じく佛像ありけんを覺しきも、今は只崩落の跡を見るのみ、窟中に石柱あり、四面佛像を彫る、東は阿闍佛、西は彌陀、南は寶生、北は釋迦なり、窟外には瓦片堆積せり、近世屋根を葺きて保存を謀りしが、風の爲に倒れしなるべし、今に及びて修理せざれば、殘存の靈跡も風雨の爲に奪はれざるを保せず、山を下りて本道に出で、又下ること一町ばかり、提厨の翁曰く、野夫往年此邊にても石佛を見しことありと、去らばとて左手の荆棘の中に入りて索めしに、果して左手に石あり、彌陀如來を立せ玉ふ、其下に一整石あり、草を除き苔を掃うて岩の面をすかし索めつ遂に一梵字を得たり、酒醒りて稍冷えしかば、林を出で、本道を下り、彼の寒佛の處に至る、見上ぐれば本道より十間ばかりの處は皆岩石にして、其下に一大石あり、路傍に横はる、石の側面に大日如來立像を見る、山上より墜落せしと覺しく、東に向て臥したるより、寒佛とは云傳へけんかし、其上の岩は石として佛体ならざるはなく、或は坐像、或は立像、概皆肉彫にて、大きなは等身、小さなは長け一尺餘三體地藏尊は山腹に立ち、彌陀の立像一体は西面し、坐像一体は南面し、藥、觀、地、文の四佛は坤に向ひて坐し、中に就き絶嶺の大岩に立せ玉ふ地藏尊は、半肉彫にして長六尺五寸、誰の刻者にかあらん、鐵筆の巧妙人をして三嘆せしむ、山上の高山の社には

いと古き水船を發見せりと聞きしかども、往きて見ず、遂に歸路に就きぬ、此の山誠に千年の靈跡なれば、草葉の中、荆棘の下、猶奇蹤の人間に傳はらざる者多かるべし、古人の靈腕妙手を風雨に委ね、刻苦經營の秘を榛莽に埋めんこと、いとく口惜しからずや、去れば好古の士杖を南都に曳かん者、此の山路に分け入りて天秘を探討せん菜にもと思ひ、家に歸りて筆を取りぬ、翌日日置氏の書至る、曰く、同好の同伴を結びて探佛行を爲すと、靈間に埋もれし石佛も世に出で、光を放ち給はん君が御代こそ難有けれ、

佛猶且つ顯晦隱見の理を免れず況んや人をや曾游を追思して萬感油然

●春珍輕節錄

一年心事爲花忙とは予が嘗て年少の行樂を歌ひし句なるが、今や九十の春光、已に其半を過ぎつれど、鶯花未だ老いず、新晴人に可しく、野も山も行樂の好時節とはなりぬるに、老いも幼きも、花分衣霞と共に立出ぬはなし、予れ去ぬる十二日に母氏を奉じて芳野山に櫻花狩しつ、餘香未だ去らぬをも、遊意衰へざるものから、今の時漫々として遊び、施々として歸らんは面白からずと思ふ折ふし、大和鷺家口に天誅組の建碑式ありと聞き、憑吊の念類に起り、先づ鷺家口に遊び、歸途奈良鐵道の全通を幸に、轉じて伏見に至り、寺田屋騒動の跡をも訪ひて、維新興業の發する所を吊はゞやと思立ち、四月十七日、春珍輕節、飄然として途に上りぬ、導者は武田生なり、獨り花の爲に忙はしきのみには非ず、

俄の出立なりしかば、彼や此やに時を移し、淡町より汽車に乗りしは午後三時なり、車中より望めば、菜花麥浪は十里に通く、此方の垣根には、奥竹のまにまに殘んの桃花笑ふて人を迎へ、彼方の山里には、梨の花棚白絹を懸らしたらんが如く、百花爛發、繡錯畫の如し、柳櫻をこきませし都の錦も、實に天さかる鄙の繡には及ばざるべし、大和川の水盪まして濁れり、山や雨ふりけん、先づ惜まるゝは花なり、山吹の咲ける岸に賤の男の竿を垂るゝは鏡をや釣らん、若帖は猶早かるべし、王寺は滿村李花にて去ぬる十二三日頃は眞盛に咲亂れしが、今は青葉となりて、褪せたる花の幽に散殘れるも哀なり、王寺より櫻井線に乗移る、金剛山の麓より南和の山々にかけて、靜に霞渡りつ、山の端のみおぼろに眉をひきたらん如く見ゆる、いとおかし、敵傍の御陵を右手に伏拜ひ間に櫻井驛に着く、此處より山路を登るなり、時は既に六時を過ぐれど、路の程六七里と聞けば、宵月の没らぬ間には着きなんとて車を雇はんとするに、車夫共今日は芳野又は柳本なんぞ、花見車ひき出して往來しつれば、足疲れて御供は叶はずと云ふ、建碑式は明日と云ふに、今宵の中にゆかではとあせれども、車夫の足の疲れたる、商人の資斧すりたる、舞姫の袖ちぎれたる、藝術なしなや口々に罵りて、行かんと云ふものなきに困らじ果てしが、武田生は心得顔に何處ともなく立去りつ、頓て車の用意と、のひねと云ふ、如何にせしやと問へば、警官にたのみてと答ふ、其は辱なしとて、警長と警官に禮なを述べて立出でつ、櫻井の町を離れて數丁、舒明天皇御陵道と記せし石標に至りて、路二つに分る、左手は初瀬街道、右手は宇陀道なり、右を取りてゆく

此より身寄峠にさし掛り、爪さき上りにて、二人曳の車も動もすれば寸進尺退せんとし、車夫は一步一喘、殆んど顛仆せんとすること屢なり、且つ半腹以上は新道改修の最中にて、新に岩石を切りし石片を敷詰りたるが、其尖りたるは往々石器時代の斧なんどにも似たらんかと覺しく、車の鐵輪之と相擦ちて火を發し、腰は一尺ばかりも車を離れて、脱落されんずることあり、徒歩の安らげく且つ速なるに若かねば、遂に車を下りて坂を登る、時に暮色蒼然として、先づ菜花を奪ひ、尋ぎて山村を呑み、漸くにして四面皆黒し、峠を登り果つれば、五日の弓張月右手に在り、是より路稍よし、山深く分入りけん、夜風寒く耳を打ちて、春ながら秋の半とも覺し、何と云ふ村にや、左右の山際に燈火ニツ三ッ見ゆ、ゆき〜て宇陀と云ふ處に着きし比は早や九時半なり、車夫は今早や足くたびれて一步も動けずと云ふ、因て宇陀の松山樓と云ふに宿る、夜深けゆくまゝに、深山に響きし背戸の俚歌も止みて、萬籟寂然たり、

十八日朝疾く起出で、車を飛す、宇陀の町端にて路二に分る、右は大峯山路なり、左手を取りて漸く坂を上る、上り果て、政始村大字山口に出づれば、路の右手に標あり、國史現在白鳥居神社と記せり、右手の方三四丁の處に森ありて、杉の木の中の御祠も見ゆれど、得も詣らず、伏拜みて行く、宇陀より二里餘も來つらんと覺しき頃、但或る峠の嶺に出づ、名を聞けば此なん櫻峠と云ふ、さして高しと思はざりしが、見下せば窺然たる谷底深さを知らず、亂山重疊、起伏斷續して、人の栖家あるべしとも覺えず、始て身は已に天半に立つを知れり、峠の此處彼處に樓多し、去ればこそ名づけつ

らめ、眞盛なるもあれど、大方は番猶綻びず、山深くして春猶寒ければなるべし、山腹を紆餘曲折して下る、路おし〜にはあらねども、一步を誤れば數丈の谷なり、車上神棒さ魂驚くこと屢にして下り果てつ、櫻橋を渡りて谷間を行き、杉の木の間を潜り、溪の小川を左手にして爪先下りに馳せつ、鶯家の入口に至りて、殉難四士の墓を得たり、

墓は小川の左岸に在り、四間四方ばかりの平地に砂を敷き、其中に墓を築き、柵を繞らして新に碑石四基を立つ、墓の左に疎松四五株あり、四面皆杉、白日猶昏く、溪水嗚咽、天風と相和して、谷中に沉々たり、所謂四士とは藤本津之助、松本謙三郎、楠目清馬、前田繁馬なり、此處は四士が紀州勢の手に斬られし處なりとぞ、津之助名は眞金、鐵石と號す、備前の人、謙三郎名は衡、字は士權、奎堂と號す、參河の人、並に従四位を贈らる、楠目前田二氏並に土州の人なり、鐵石博學にして詩畫を能す、膽畧あり、奎堂昌平費に學び、能文奇才あり、諸士皆書生を以て吉村寅太郎等と結び、難を幕末に發して、維新鴻業の陳勝吳廣と爲る、其後風雲變幻、公侯朝に滿ちて、而して諸士の墓は榛莽に委し、空山花開けども、枯骨春寒く、白風陰雨、黄泉寂寥たる者、此に三十三年なりしに、今や贈位賜金の典其徒に及びて、而して墓石も亦成り、豐碑厚祀、千古に朽ちず、諸士も亦以て瞑す可きか、抑大丈夫に尙ふ所の者は、天下の爲す可らざるを知りて而して之を爲すに在り、爲す可きを見て而して爲す、誰か爲す能はざらん、彼の幕運の衰滅已に明なるに及んで、起ちて王師に従ふ者の如き、愚者猶能すべし、當時幕威未だ地に墜ちず、廟議も亦因循し、親征の議一たび決して又熄む、是れ爲す可

らざるの時なり、諸士猶且つ劍に杖きて楸を飛ばし、一死以て四方勤王の氣を鼓舞す、是れ實に及ぶ可らざる者とや云はん、今や我國大戦の後を承けて、扶弱懲暴の事、復た爲す可らずとやうに思ふもありなん、而かも世復た爲す可らざるを知りて爲さんと欲する者だになし、其れ何を以てか爲す可きの機を促さん、諸士地下の笑こそ耻かしけれ、なと思ひめぐらしつゝ、土橋を渡り、墓を拜して去る、四五町ばかり下りて左手を見れば、檜杉生茂れるが下に、苔蒸したる大岩二つ溪川に臨みて蹲踞したるが、岩の陰に一碑石あり、繞らすに木柵を以てし、題して吉村寅太郎君原瘞處と云へり、墓は寶泉寺の彼方に在りと聞けば、其處は假埋の地なるべし、寅太郎名は眞郷、土佐の人なり、人ど爲り側儲不羈にして武勇あり、中山侍従を奉じて、藤本松本以下同盟の士と兵を大和に擧げ、各處に轉戦して事遂に敗れ、藤堂勢の爲に斬らる、時に年二十五なりきとかや、誠に不祥の猛者なりけり、中山御當時御年十八、天子の外戚に生れて、富貴榮華御心のまゝなるべきに、國事の日非なるを嘆き、深山の露に御鎧の袖を沾はし玉ひけん、御心盡しこそ有難けれ、維新の後御追感あらせられて贈正四位宣下ありき、今其幕下たりし寅太郎も亦贈正四位たる上は、再度の御贈位あるべきか、仰吉村藤本松本皆同功一体の人々なるに、正従の差別あるは如何ぞや、一并して車に乗り、鷲家口として急きゆく、鷲家を過ぎて、午前八時頃鷲家口に着く、途中に某戦死處と記せし木札二三立たり、今昔の感に堪へず、鷲家は四五十戸もやあらん、鷲屋口は稍少かるべし、相去ること十町餘にも過ぎず、何れも山間の一小村なれども家並うるはしく、中には土豪と覺しくて門戸のいと大きなるもあり、彼の櫻

峠より流るゝ小川は此に至りて吉野川と會す、村は川に臨みて亂山の下に在り、耕地とては數畝の菜圃を山麓に見るのみ、皆山稼なりとぞ、吉野川に架けたる獨木橋を渡りて、右岸なる安田ながしの家に憩ふ、

法會は午前十時の筈なれども、土方の大臣吉野山より來玉ふを待ちと云ふは、時猶早ければ、此の間に其處此處を見巡らんとて立出づ、川に沿うて上ること一町ばかり、寶泉寺の川邊より見入れば、幕なんど打廻して法會の用意取々なり、寺より二町ばかりゆけば、懸崖の上に殉難諸士の墓あり、吉村寅太郎、那須信吾、宍戸彌四郎、林豹吉郎、鍋島米之助、山下佐吉、植村定七郎の七士なり、此度修建せし碑石は、鷲家の四士、鷲家口の七士、及び塔の峰に在る森下幾馬、福浦元吉、關爲之助の三士を合せて十四士の墓石なりとぞ、此役十津川郷士など追々馳加はりし者數百人に及び、中には中道にして節を失ひ盟を忘れしもありけれども、或は捕はれ、或は戦死し、或は自刃し、以て死に至るまで節を全うせし者尠からず、其人々の墓は如何になりけん、榛莽荆棘の中に棄てられて、空しく風霜に委せらるゝもありなんかし、十四士の枯骨既に恩露に浴するにつけても、洩れたらん人々こそ口惜しからめ、建碑の舉を企つる者、殉難義徒の爲に贖資の一半を分ちて、更に一大招魂碑を立て、以て地下の幽魂をして遍く昭代の惠を承けて、以て幸不幸の嘆を免れしめんには、如何ばかりの功德ぞや、吉村ぬしの墓は既に豐碑を得つ、彼の假埋の跡に建てし碑石の如きは無くもかな、否とよ、此石を中山卿以下義徒招魂碑に代へたらましかば、厚薄の嫌なきを得けん、惜むべし偉功大節彼此相

同して、而して顯晦均しからず、予れ悲しくも亦痛ましさに、先づ七士の墓を拜し、更に草葉の陰に向て一滴の涙を手向けつゝ、崖を下りぬ、  
此處より十五六町ばかりも川に沿ひて上れば、陽成院のつくばねの峯より落つると詠み玉ひけんみな  
の川なりと里人の云ふに、又も川に沿ひてゆく、吉野川のよきゆる處、筏いくつも繋ぎ棄てたり、川は  
或は淵或は瀬と變りて、水の姿面白く、河鹿の聲も哀なり、頓て蟻通の社の前に出づ、宮居いと古り  
て神々し、鳥居の下に老樹の櫻あり、今を盛に咲亂れたるが、常磐の松と枝を交して千代を契れる、  
此上なう氣高く、色殊にめでたし、一群のうなひ乙女等、さどひたる装も今日を晴とや着にけん、唱  
歌うたひつれて、深山の彼方より出来る、法會を拜まんとてなるべし、社の左手にペンキてふものに  
て塗りたる鐵の橋あり、惜しや名所を、わざと破壊するべし、橋の上より見渡せば、山高く四面に  
登えて、萬樹緑濃に、蒼翠滴らんとするまに、深山脚躑の色鮮に、一水右より來り、一水左より  
合し、中なる峯より一水又落ちて、滌々漉々、自ら瀑布を成し、三水此に會して碧潭と爲り、流れて  
吉野川となる、此の三水の會する所をみな川の川と云ふとかや、潭の上なる峯にこそつくばねの木は生  
えけれ、乙女子のつくばねの形に似たる實を結ぶ、實にこひぞつもりて淵となりぬる邊の景色得も云  
はずよし、橋を渡れば又も小さき祠あり、式内丹生神社なり、神主の家にてつくばねの實を五つ六つ  
申請けて、いと惜しけれと踵を旋しつ、  
麓の里にては今ぞ土方の大臣つき玉ひぬるとて、くつがへりどよめく、胸の合はぬフロックコート着

たる若者、扱は平袴着たる老人、何れも胸の邊に赤十字の徽章鬼の首取りたらんが如き顔して、さら  
めかしつゝ、馳せめぐり、修學旅行したる奈良師範學校生徒、或は山中の小學生徒など、路の兩側に整  
列して出迎ふゆり

午前十一時頃寶泉寺に於て法會初りぬ、殉難諸士に縁あるは更なり、土方の大臣を初め、古澤知事扱  
は郡長村長達より山中の紳士に至るまで、本堂狭しと居並びつ、事のさまいと嚴なり、五人の法師各  
偈を誦し、頓て楞嚴行道も畢りつれば、土方の大臣立ちて、今昔の感に堪へずなど祭文を讀み、古澤  
知事は口上も滞なく式を畢りしを謝しつ、次第に焼香をも了りて、堂内に展べし諸士の遺墨を縦覽  
せしめたり、予れ此の日五古一篇を賦して諸士を吊ふ

遊鷺家口。弔大和殉難諸士。

四塞眞天險。層々亂山連。義徒皆據此。飛檄奮空拳。老雄藤鐵石。奇傑松土壠。猛士名重鄉。不惜  
一身捐。棒盤指白日。同盟大節堅。盟主奉公子。天誅欲解懸。時乎時不利。一敗走且顛。慷慨竟就  
死。從容不怨天。嗚呼事雖敗。首倡功則全。赫々維新業。白骨是先鞭。風雲多將相。榛莽有誰憐。  
人生幸不幸。由來茫似烟。天鑑元炤々。恩露及黃泉。山間豐碑在。芳名千古傳。山櫻方爛發。莓苔  
帶香鮮。萬樹添新綠。溪水有餘妍。我來多感慨。俯仰卅三年。低徊不能去。弔古歌一篇。

今宵は櫻宴あればとて人々の留めつれども、村中の家々大方は役々の御宿札立ちたれば、宿らん方も  
なからんと思ひ、人々に暇乞して歸路に就きしは午后一時なり、櫻時を上げれば此より下り坂なり、宇

陀の此方なる島の堤に土筆いと多し、去ぬる日母氏と吉野に遊べる道すがら、土筆摘みしことも思出でしかば、よき家土産よと思ひ、車を下りて摘みつゝ、

門に出で、まつたらちねにさげまし心つくしのけふの家つと

とよめるも幼心なりや、昨日の夕暮は山風しめりて雨にやならんと心を痛めしが、今日は朝より天晴れて風暖なり、下り坂なれば車夫の足いと輕げに、七里の山路を四時間に走りて、午後五時櫻井の驛に着けり、明日は奈良鐵道の全通式あり、全通鐵道の乗初せんとて、社友數多奈良に遊ばん筈なりしかば、予も今宵は此に一泊し、明日王寺驛にて社友に會せんものと思ひ、遂に櫻井の昔華樓と云ふに宿かりぬ、此夜武田生は奈良に用事あり、明日王寺まで御出迎ひ申さんとて、別れて奈良に向ひしかば、手れ一人さびしき旅寐の枕に着きしが、此の樓は酒亭にして旅館を兼ねるものと覺しく、燈の點きし比より絃歌漸く起り、嘈々雜々として得も眠らず、昨夜は夜深るまで宇陀の松山樓に杜詩を讀みて、今朝は疾く起き出で、往來十四里許の山路を車にゆられしことゝて、いと疲れたれば、如何にもして眠らばやと思へども、嘈雜の響に頭のみ痛みて夢を結ばず、時計を見れば九時なり、去らば此より九時十五分の汽車に乗りて、武田生の跡を追はんものど心を定めつ、疾く立出で、停車場に至れば、惜しや此時車は汽笛の音のみを残せり、今は詮なし、去ればとて今の宿には歸り難く、踵をめぐらして角屋と云ふに至れば、客多くして室なしと云ふ、折ふし雨は簷々として夜は沈々たり、今は栖鳥枝を擇ぶに暇あらず、其東隣なる淺野と云ふ宿に入りてやうく怪しげなる一間を借り、枯のやう

なる夜の具の中に潜ぐれば、半風子に訪はれて終夜まどろみかね、隣の研聲を妬みつゝ、夜を明せしぞおどましき、十九日雨まだ歇まず、一番汽車にて王寺に至る、社友の王寺を過ぐるは午前九時と聞きしかば、少間を偷みて遊覽を貪り、先づ龍田の御社に詣づ、御垣の墨染櫻今を盛にて深山躑躅花は稍盛を過ぎたり、轉じて 孝靈天皇の御陵を拜す、御陵は王寺村の片丘山に在り、片丘山馬坂上の陵と曰ふ、古の字を峯の垣戸と云へりぞ、畏しや御陵道荒れて修めず、やうくにして上れば御垣も古りて朽ちなんとし、落花啼鳥、春風寂寥たるに、予れ涙先づ進りて、暫しぬかづさし頭もあがらず、世下りて遠を追ふことを知らぬ今の世、如何に文明なりとも何かせん、彼の大臣達一たび歴代の御陵を拜して、墓草を掃ひ給はんこそよけれなき、獨言ちつゝ、拜辭して出で、遂に達磨寺に遊びて王寺に歸れば、武田生既に來りて待つ者久し、頓て汽車も來れり、車中には果して社友一行十人ばかりあり、旅路に思ふ友と遇ひしより嬉しきはなし、諸共に打乗りて奈良に向ふ、

孤影自ら憐みしには似で、此よりは車の中いと賑に、間ひつ語りつ、瞬く間に奈良に着きぬ、雨ますます甚し、車を驅りて猿蓑の池の南なる鎌屋に投じつ、扱全通式はと問へば、此の雨に萬事の用意も流れ侍れど、午後には奈良俱樂部にて饗宴を開くべければ、御臨席下されよかしと、懇に申越さる、一行は鐵道の乗初して宇治に遊ばんとこそ思立ちつれとて、強ちに斷りしが、誰にても一人は俱樂部に赴きて挨拶せよとて、互選の果に、加藤紫芳ぬし人々に代りて、袴の股立取りて雨を衝きて出立つ、兎角するまに早や午後一時をも過ぎぬれば、斯くては宇治にて日や暮れん、加藤ぬしは頓て停車



塲へこそ來玉はゆきて、人々打連れて停車場に至り、待てどもく沙汰なし、汽車も來ぬ、切符をも改め初めぬ、鈴も鳴りぬ、斯くても加藤ぬしの姿見えず、如何はせんとためらう折しも、武田生駒來りて、加藤氏は俱樂部に引留められつ、御跡を追ふべければ先に御立ち候らへとの口上なり、扱は人質とこそなりけり、去らば先づ行かんとて遂に車に上る、車の中にて饗宴の折肴など取出で、雨を覗つ、酒打飲ひ、中に安藝生の折の底ぬけて、着こぼれ落ちぬるに、人々こぞりて笑ふ、誰にやありけん、

千代松が食居る折の底ぬけて鮮たまらねば鯛もたまらず

と小聲にうなる、此の人千代松と云ふ名なればなり、木津柳倉玉水も過ぎて、長池新田の邊に至れば、梨の花棚十里に連り、色褪せて半は散りつれども、猶ほ白模糊として村消えし泡雪にも似たり、宇治は茶處とかや、實に左右皆茶園にて、霜除の糞を掩へり、宇治にて車を下る、

一行雨を衝きてゆく、裳をからぐるもあり、軒端を傳ふもあり、中に長靴はきたる人を時得顔なる、宇治川に至れば大雨未だ霽れざるに、長虹天に横はりては、淨明一來が奮戦の橋桁何處にやと徜徉ひ、春水漫々として、遠く兩岸に漲りては、源太景季が馬條を約めけん跡をなに問ふに由なし、見渡せば亂山層々として、新緑方に濃に、峰回り谷合して、源なくして水あるかと疑ひ、若葉茂れる隙に、橋姫の祠の朱の玉垣はの見える、いと奥床しく、兩岸の酒樓、水を隔て、相對し、杜鵑一聲はしげなり一行橋上に低徊して、遂に北岸に渡り、橋東の一茶亭に憩ふ、黄檗に遊ばんと云ふもあり、菊屋に泊

らんと云ふもあり、衆議區々なりしが、遂に平等院に遊びて、己がし、別れんこととなり、打連れて引返し、遂に平等院に遊ぶ、平等院に入りて、先づ扇の芝に三位入道の心づくしを忍び、鳳凰殿前に徘徊して、藤家の盛時を想ひ、堤に上りて宇治の川面遙に見渡しては、判官殿の鼓を聴ちて功を録しけん檜樓の址を求むれども、芳草空しく長うして、鶺鴒の啼くを聞くのみ、折しも雨降りしきりて、池に臨める八重櫻ひらくと落ちて新泥も亦香し、衆皆今古に俯仰して、百感の臆に滿つるを覺えず、予れ二絶を得、秋渚翁の次韵尋きて成れり、

平等院

天 四

古刹蕭々暮雨中。階前草色印遺功。他年西海舟如葉。吹落平軍一扇風。

宇治川

一着先鞭馬不驚。四郎巧賊竊功名。滿川春水和風雨。猶作琴々鼓鼓聲。

次天四詞兄瑞韵

秋 渚

平等院

白旗深倒赤旗中。忽見桑榆廻日功。古寺門前來吊古。春蕪一扇落花風。

宇治川

叱咤龍駭浪驚々。一躍先登獨擅名。搥鼓檣樓知那處。滿川春漲亂蛙聲。

去て停車場に至る。予は伏見を訪はんとて、久松兄は京都に入らんとて、諸共に北島、山内、小西、

野間、磯野、西村收、木崎、大原、安藝の諸氏と袂を此處に分ち、北行の汽車に乗る、木幡桃山を過ぎ、日暮れなどする頃、伏見驛に着き、久松翁と手を分ちて汽車を下り、車を飛ばして伏見の寺田屋に入りし時は、日既に暮れて、青燈夜雨、轉懐古の情に堪へず、

抑寺田屋騒動の起源を尋ねるに、外邦の互市を乞ふ者一たび至りてより、和戦の論喧しく、邦内洶々たりしが、朝廷は攘夷の議を執り、幕府は開港の説を持せしより、四方勤王の士遂起して、幕府の優柔を咎め國論紛々として雷に鼎沸のみならず、幕府是に於て乎屢慷慨の士を捕へて、或は錮し、或は殺し、以て廟議を阻絶せんとし、天下の危きながら累卵に似たりけり、薩摩は西海の雄鎮にして、名主勤王の基を開き、才俊慷慨の節を持し、深く海内の望を負ふ、折しもあれや島津三郎公(久光)の上洛あり、四方の志士は天下の事此の一舉に在りと思ひ、薩摩男は云ふも更なり、諸國の浪士相踵ぎて京を指し、先づ大坂に次りしが、時に島津公は京師に在りて浪士鎮撫に任し、徐に時の至るを待ち玉ふを、浪士は其初志を變じけんを憂へて、頼もしからぬ日を送りつ、遂に大難を發せんことをぞ謀りける、其策は先づ京師に入りて候けたる公卿を刺し、宮を奉じて二條の城を屠らんとするなり、一同大坂を立出で、舟にて淀川を遡る、其人々は柴山愛二郎、橋口莊助、伊集院直右衛門(兼寛)弟子丸龍助、西田直五郎、永山彌一郎、富田猛二郎、池上隼之助、有馬新七、田中謙助、柴山龍五郎、(景綱)西郷新吾(從道)大山彌介(巖)三島彌兵衛(通庸)篠原東一郎、河野四郎左衛門、岩本勇助、木藤市助、吉原彌二郎(重俊)谷本兵右衛門(道之)林正之助、吉田清右衛門、橋口吉之丞、岸良三之介(兼良)

深見久藏、町田六郎左衛門、美玉三平、有馬休八、是枝萬助、森山新五左衛門、坂元彦右衛門、山本四郎、松田榮園、大脇忠左衛門、指宿三郎等を始とし、其外真木和泉守及び田中河内之介の率うる浪士も亦馳加はる、長藩にては久坂玄瑞、福原乙之進、寺島忠三郎、入江九一、品川彌二郎、香川助藏、山縣小介、舟越清藏等も亦謀を通じたり、此の事早く島津公の知る所となりしかば、鎮撫使として奈良原喜右衛門、海江田武次を遣はされしが、淀川堤にて行逢ひしも、所詮止めて止まるべくもあらねば、手を束ねてぞ引返しける、是に於て公は小松帶刀に鎮撫を命じけるより、奈良原幸五郎(繁)、江夏忠左衛門、道島五郎兵衛、山口金之進、鈴木勇右衛門、鈴木昌之助、大山格之助(綱良)、森岡善助(昌純)、の八士に云合めて、伏見に遣はさる、尋ぎて上床敬藏、高島一次、平山龍助の三人も亦鎮撫に加はりたり、時に志士の一行は早や伏見寺田屋に在り、八士先づ柴山愛二郎、有馬新七、橋口莊介、田中謙介の四士に樓下に面會して、且諫め且諭すも、聞入る、景色なきより、鎮撫使は君命なりと叫びて先づ謙介を斬る、すわとて互に相格闘し、四人皆斬らる、弟子丸龍助樓下の騒がしきに、何事やらんとて下り來りて奮戦せしも、亦亂刀の下に斬られけり、謙介一たび絶えて又蘇り、聲を厲まして我を刺せと呼び、遂に殺されしとぞ、壯助死に臨みて一杯の水を請ひ、飲畢りて、天下の事御身等に囑ひと云ひしま、息絶えきとなん、愛次郎は日頃上意とあらば抵抗はせじと云ひけるが此日果して首をのべて打れしとかや、此の日斬られし者は有馬新七、田中謙介、柴山愛次郎、橋口莊助、橋口傳藏、弟子丸龍助、西田直五郎、森山新五左衛門、自殺せし山本四郎を併せて九人、是れ即ち壬戌伏見

殉難の九烈士なり、時に文久二年壬戌四月廿三日なりけり、樓上の諸士はスワ事こを起りたれとて、刀追取りて立騒ぎしを、西郷新吾、伊集院直右衛門、及び真木和泉守、田中河内介等、愚論制止して遂に公命に従ひ、各國に歸りて謹慎の罪をぞ受け、之を寺田屋騒動と曰ふ、其後四方の志士風を聞きて起る者雲の如く、大和の天誅組と爲り、銀山の義舉と爲り、遂に東征の詔と爲りて、此に大權復古の基を開きつ、廻りて之を尋ねれば、維新の鴻業も、九烈士多其發難首倡の功多しとや云はん、死して餘策ありとこそ謂ふべけれ、

寺田屋は、伏見の兵火に焚けしかば、家の跡を取拂ひて、近き比此に銅碑を建て、寺田屋は其西に建てけり、内に入りて見れば、眇なる主人と、油ぎりたる大男と、互に古の事ども物語りつ、伏見殉難士傳と云ふ書を贈れり、頓て案内に従ひて東隣の銅碑を見るに、高さ八尺八寸、碑面四尺二寸、横は五尺九寸にして、碑頭は三角、雲形を彫りて薩藩九烈士遺跡表と篆題し、碑文は川田博士の撰に成れり、碑の前は砂を敷き、松一本を植ゑ、周圍は鐵もて瑞垣を築けり、予れ感述ぶるに五古一篇を以す、

遊伏見。弔千成殉難九士

暮春風雨夜。停杖伏水城。烟墟青草暗。荒津白水平。橋西舊客舍。健兒此結纒。路傍有銅表。特筆勒雄名。回憶維新際。洵々上下情。強虜何無狀。綠燼壓蓬瀛。武臣偷姑息。縉紳欲苟生。海內如鼎沸。志士盡秦坑。無人揮寶劍。奮起斬長鯨。薩南勤王士。慨然指帝京。叱咤欲發難。魔徒白日盟。

奇謀一朝洩。大事遂不成。刀鋸非所恐。視死如飴餒。海內聞風起。天子詔東征。大權遂復古。國光揚八紘。首倡功殊大。赫々身後榮。我欲尋遺蹟。故老出門迎。剪燈思今古。怒號風雨聲。知否時艱急。邊烽夜頻驚。尊俎誰禦侮。使人思群英。

九士の墓は大黒寺に在り、夜暗く雨甚しけれども、車を下りて一拜し、又も汽車に乗りて京都に出で、三條小橋なる萬屋が許に入りしは午后九時頃なり、先づ浴せんとて湯殿に至れば、此頃しつらへたりと覺しく、人造大理石敷きつめて、萬事の調度備らざるなく、物皆清げに心地よくて、昨夜の櫻井の疲をも忘れ、浴後一醉して枕に就きぬ

廿日晚に起きて三層樓の窓を開けば、雨新に霽れて東山の翠拭ふが如く、朝霞たなびき渡れるひまに、八坂の塔、智恩院の軒端、人の面を搔げたらん如く見ゆる景色さながら畫なり、此の朝鐵眼師を清水の愚庵に訪うて、端なくも峩山師に遇ひまゐらせしが、諸共に嵯峨に遊び玉へとの玉ふを、予れ今日は等持院に遊びて直ちに歸らん筈なれば、得もまからずと辭みつ、新に築きし愚庵の小樓に登りて、散残りし花など詠め、茶打飲みて辭し去んぬ、

兎角するまに午ともなれり、去らば等持院に遊ばんとて、萬屋の主人を拉へて立出づ、主人姓は岡本名は直、字は土方、予と同庚にして文を好めり、頓て車は萬年山等持院の門邊に車は留まれり、入りて見るに垣根半は頽れて、庭に道一本二本咲出でたるいと哀に、散残りたる八重櫻の風に舞ふも榮華の果敢なきを示すに似たり、雜僧案内して間毎に掛けし古書畫など指し示す、予は心急くまゝによく

も見ず、直に本堂に入る、  
足利歴代將軍の大像は本堂の兩壁に安置したり、尊氏のは一つ離れて置かれたるが、誠に小兵なり、面小く上眼にして、瞳は空に向へり、是れ殘忍の相なるべし、口及び腮に髯を蓄へたれど威嚴なし、見もて本堂に至れば、二代將軍義詮左壁第一に在り、温然たる其の容稍父に肖す、三代義滿に至りては、目尻下りて疎髯鬚々たる、驕慢の氣眉宇の間に溢る、義滿志得て意驕り、大勳位こそ賜はね、位は人臣を極むれど飽かず、愛子加冠の儀は親王に準するだに僭上なるを、遂には明國の封冊を受け、甘んじて臣禮を執る、其賣國の罪、天地も容れず、其像を見るだに胸わろくて睡せんばかりなり、嗚呼官爵の隆を貪るも、侈靡の樂を極むるも、是れ國內の惡徳なれば猶恕すべし、但外に對して腰を屈するに至りては、醜を百世に流す者、惡みても猶餘あるべし、其子義持の像は、眼大きく面長く、風采怪偉にして、放侈の相あり、五代義量の像なし、六代義教以下は、其貌枯槁、其容瘠瘦、薄福の相あり、嗚呼背叛の家、豈弑逆の臣なからんや、爾に出る者は爾に反るとかや、足利の宰臣互に相争ひて、屢其君を弑し、以て亡滅に至る、誠に尊氏の數ふる所なるべし、堂の後に尊氏の墓あり、斷碑空しく苔藓の爲に封せらる、尊氏の木像と隣りて徳川家康の木像あり、蟲をも殺さぬげに見ゆ、人を欺くは此の相なるべし、抑幕末紛々の際、浪士足利三代將軍の木像の首を奪ひて之を鴨の河原に梟したるは、兒戯に似たりと雖も、誠に是れ奇想天外より落ちし者にして、神來の戲謔とや云はん、是より人心益幕府を離れて、維新の機を爲せしなるべし、當時志士の正義を喚起さんとするや、殆んど爲さる所

なし、都々逸、祭文、子守歌、乃至チヨボケレと云ふものまで、皆時事を歌ひて以て人心を激せんことを圖りつ、此の梟首に至りては、實に奇にして切實なり、今や内外の形勢一變しつれども、臥薪嘗胆の聲さへあり、前には喪車轢々として、父老泣を飲み、後には阿爺滯納を催られて、村嬢孤栖多く、而して内外多難、賢材出でず、誠に御大事の時なれば何時とでも、志士の正論を喚起さんとするもの、さまじく手段にも因らば、など物語りつゝ立出でんとすれば、土方

將軍の首筋さむし春の暮

と口吟みて諸共に辭し去る、是より歸らんと云へば、土方嵯峨に小楠公の首塚あり、見玉はずやと云ふ、其は珍らし、物の本にても見し事なければ、詣でまほしけれを、暇なければ歸らんと云ふを、花にうかれ月にあこがるゝにはあらで、古忠臣の遺跡を訪ふに一日を費し玉ふとも、何の妨かあらん、まして今日は日も既に高けつるにど切に働むるより、予も首肯くともなしに首肯きて西に向ふ、斯らましかば我山鐵眼二師の勸をも辭まざらまじしものを、今は妄語となりつるぞおそろしきなぞ悔みつゝ、

途に御室を過れば、一重櫻は既に散りて、八重櫻も盛を過ぎつれども、猶遊人を惹き、架け連ねたる棚に歌ひさゝめく聲かしまし、杖を停むべくもあらねば足早に山門を立出づ、廣澤の池を過ぎて嵯峨に出づれば、釋迦堂の南なる叢篁の中にこそ、木柵結ひゆぐらしたるものあれ、

路傍に楠正行公首塚と記せし石あり、密竹を伐りて境を開き、兩側には櫻を植ゑつ、門の内に御下賜

金五十圓と記せし標、及び公侯伯の人々の寄附をも記したり、定めて確なる由緒あればこそ、御手元よりも黄金を下し賜ひけめ、と思ひつゝ進みゆけば、正面の木柵の中なる東手には、五輪塔と覺しき墓石の半は土中に埋もれたるあり、其西に四塔あり、其西に二碑あり、左は欽忠碑と題し、右は保存費の寄附人名を刻みたり、欽忠碑の篆額は北垣前京都府知事にして、文は如意谷鐵臣翁の撰に係る、其文を讀むに、借も奇しや、東手なる二塔は一は小楠公の首塚にして、一は足利二代將軍義詮の墓にぞありける、

山城國葛野郡嵯峨村に寶篋院と云ふ寺ありき、實に足利二代將軍義詮の菩提所なり、此處に楠正行の首塚あり、明治の初めつかた寶篋院は廢寺となりしが、其時庫中に公の靈牌あり、黒漆金字もて楠左金吾勇義正行大居士と記して、院の二世吳溪和尚の縁起をぞ添へたりける、其文に據れば、寶篋院の開基たる獻庵和尚は公と入魂の人なりけるが、公の戦死し玉はん前日、折ふし河内に居玉ひて、意なくも公に遇ひまゐらせ、此の世の名残を惜ませられしに、公痛く打喜ひ玉ひ、後の世の事をも深く頼ませ玉ひけり、斯くて翌くる日は果して四條畷の大戦に、公も兄弟さしちがへて亡せ玉ひぬ、和尚は在し、世の約を踏みて御首を賜はり、抱きもて山城に歸り、此處に葬りまゐらせつ、程へて和尚斯くくと義詮に申上げしに、正行は敵ながら天晴ありがたき勇士にて、予も日比慕はしくこそ思ひつれ、予れ死なば其が首塚の邊に葬れよかしと仰せけるより、義詮死するに及びて、和尚遺言の如く首塚の側にぞ葬りけるとなり、其後北垣京都府事は公の靈牌を其邊なる壽寧院に移しまつり、首塚

の畔に一の碑を建つ云々とぞ如意翁の碑文はものせられたるに、初めて欽忠の二字の由來を知れり、借も曩に等持院にて義詮の木像を見て、其容温然たるに服せしが、誠に其心術も優にやさしかりけん、父尊氏が正成の首を河内に送りたるにもまして、面白き雨夜の話草なりかし、且つ是れ史乘の逸する所、人々の美擧に因て曲を聞き微を明にせしぞありがたき、予れ此の妍端一雙の塚を拜して、一首を手向けぬ

咲く花のめぐみの露を醜草もうけてや世々に匂ふなるらん

大堰川に出れば、春水方に漲りて、萬樹緑うるはしく、青葉の影にだに散らおくれたる花を見ず、折しも河鹿の聲聞えければ、

あらし山花は青葉となりはて、千鳥が淵に蛙なくなり

どうなりつゝ舟に乗り、流を廻りて緑樹苔運の下に繋ぎ、遂に大悲閣に上り日暮れなんとする比、山を下りて旅館に歸りぬ、廿一日朝まだきに起出て、鴨河の岸の柳に後髪ひかれつゝ、大比叡おろしの朝風に袂を拂ふて大坂に歸りぬ、母は出迎へて、土筆は王寺より届きつ、言の葉の家土産もがなとて打笑ひ玉ふ、五日の旅も三年の思なるべし、社に出で、別れし後の事をも問ひつ語りつとよめく、加藤ぬし曇の日人々の跡を追ひて京に上りしも、影だに見えぬは空しく歸りき、とて恨み顔なるも理なりかし、此の行殆んど三角形を成し、往來五日、足跡大約七十里、驚家に天誅組を、宇治に諸源を、伏見に壬戌烈士を、到る處に懸吊して、遂に京都に入り、足利將軍の木像を見て、小楠公の首塚を拜

す、是れ汗漫の遊に非ず、聊か關する所あり、乃ち記して以て同好の士に示す。

明治二十九年丙申四月廿五日

(完)

當時大戦終に罷みて時局益艱み遠邊の一舉は臥薪嘗膽の聲を惹起し舉世皆外交の人なきを悲めり  
き予れ時に間を偷みて勝を探り古を吊ひて今を慨し往々長大息を詩賦の間に發する所以の者之が  
爲なり今や相距ること僅に兩三年のみ時局の艱益甚しくして而して復た臥薪嘗膽の聲を聞かず所  
謂喉を下りて熱を忘るゝ者耶非耶噫

●河内紀行

呼かはす隣も遠くなりけりふり續きたる五月雨の頃、實に此の頃の雨には、用ありてだに出ず、ま  
して例の漫遊は思ひも寄らずと籠がちな折ふし、菽氏より此の月十四日の日曜には河内廻りせばや、  
觀心寺金剛寺など南朝の遺蹟いと多しと誘はれぬ、かねてより觀心寺の首墓には詣でまほしう思ひつ  
るに、其はよき同伴なり、雨だに晴れば御供せんと言へつ、やがて十三日となりしが、雨は晴れた  
れど空は曇りて、明日の日和所詮我物とは思はれぬに、油断して兼過し、菽ぬしに呼起されて、天を  
ながむれば晴渡りたり、去らばとて急ぎ洋服装着て、諸共に立出づ、時は明治廿九年六月十四日午前  
九時を過ぎたり、

五月雨の晴間をまちて立出ぬふりしむかしの跡をたづねて

先づ約を踏みて極樂庵主を誘へば、例の變遷々として扇片手に、下駄踏鳴らしつゝ、忘物ありげなる顔  
して出来る、三人車を飛して出水翁を遂に訪ふ、翁は河内の人、此行の東道なり、湊町より汽車にて  
柏原に着きし頃は、早や十二時に垂とす、疊屋と云ふに入りて中食して玉手山に向ふ、  
大和川の水量思の外に増さず、山は左までに降らぬなるべし、礪には例の河内木綿を覗せり、石川に  
沿ひて國府堤をゆく、堤には月見草多し、鬮武者一騎彼方より來る、那長と見しは僻目か、左折して  
玉手山下に至り、車を下りて安福寺に入る、住持は居らず、眉目よき若僧案内して寶物を展觀せしむ、  
尾張殿由緒の寺なれば、めでたき物なきに非ず、且つ保存行届きて寺の内外も清淨なり、國見が岡と  
て、山の上に景氣よき處あれど、嘗て遊びしことあれば登らず、倉皇々々山を下る、寺にて杉田氏  
と遇ひ一行五人と爲りぬ、

樂庵云、住持の安福寺は之を門外に見る。安福寺の住持は之を門内に見ず、遊覽熱心の作佛一言なし。面白きは弘法作といふに金  
剛、又云、若僧御用心

國府堤の西なる道明寺に至り、荒木の天神を拜して社務所に入れば、南坊城氏茶菓を饗せらる、庭の  
團圓色々に咲出で、泉石苔蒸して雅致多し、往年臨幸ありし玉座の跡を拜ひ、此處にて楊枝の御影井  
に角笏石帶等遺蹟の御品々を拜觀す、此の御祠は縁起に據りてものせし江北海が碑文にも見ゆる如く、  
菅公の嫡御覺壽尼の住持せし所にして、公在世の折は更なり、筑紫下の時まで倦々として輿を拄げ  
せ玉ひし靈蹟とかや、地盤にして物異なり、拜觀の際、髮髻として神在すが如きを覺ゆるもいどかし

こし、南坊城氏、門前茶店の西に土師の窠跡ありとて自ら案内せらる、行きて見るに、茶店の西なる小さき丘の上に一本の松あり、松の根に土師窠跡と記せし小さき石標打倒れたり、名所圖會には中門の西客殿の前栽に在り見ゆ、此處は昔時客殿の庭にもや、案ずるに垂仁帝詔して殉死を禁じ玉ふ、仁の至りなりけり、然るに皇后日葉酢姫の崩れ玉ふや、群臣に詔して葬儀を議せしめ玉ふ、蓋し其情愛人をして獨り地下に入らしむるに忍びざりけん、去れども繪言汗の如く、自ら其禁を解く能はず、群臣をして解禁の議を上らしめんと御意より、葬儀に御厨し玉ひしにもや、此の時に當りて野見宿禰なかりせば、不仁の制復た興りけんも知る可からず、宿禰の頓智、地輪を造りて以て生人に易え帝をして至仁厚澤の始終を全うせしむ、其功德も亦大ならずや、土師村は帝の賜ひし陶地にして、是れ其窠跡なりけり、積善の家には必ず餘慶あり、嘗て至りて大に顯れ、筑紫の難ありしと雖も、生きて三公に列り、死して千古に祀られ、其子孫綿々、侯となり伯となり、子男士たる者も亦た多し、亦宿禰功德の餘慶なるべし、而かも此地宿禰を以て稱せられずして菅公の爲に靈なり、豈顯晦の理は人力に非ざるか、近頃日葉酢姫の挾木の寺間の陵も御修築ありと聞く、斯の遺蹟も亦棄置くべきに非ずかし、など打語らひつゝ、茶店を出で南坊城氏に別れて車に上る、

(樂庵云、智者學者人形以下のものは、)

道明寺の西北七町ばかりに、允恭帝の陵あり、其西南二十町に仲哀帝の陵あり、其西北五町にして雄略帝の陵あり、皆伏拜みてゆぐ、十町もや來つらんと思へば譽田八幡なり、車を下りて御社に詣づれ

ば、さしも尊とき八幡宮も稍荒れなんとして、鳥雀自ら噪げり、應神帝の陵は御社の北に在り、古松老柏、蒼然鬱然たり、裏門より拜みて出づ、藪ぬしは此邊は正平の初小楠公の細川勢を破り玉ひし所よとて、今古に俯仰して去る能はざる者の如し、鈴木田隼人の墓此の邊にありと聞きしが、得も訪はず、四五町ばかりゆきて古市に至る、此より道あしければとて先引の車夫を雇はんとするに、行かんと云ふ者少し、此の頃は田植の時節なればなるべし、辛うじて雇ひ得たり、此より稍爪先あがりなり、道の右手なる、安閑帝の陵を伏拜みてゆぐ、

(樂庵云、古市にて漸く得たる天四の先引は見るも嘔吐を催す穢毒の面部に發せるものなり、天四鼻を蔽うて問へば彼平然として曰、さの花です)

天四の先引見れば紛々鼻つくさの華族なりけり  
後段突如先引の過去を記す蓋故事のみ、須らく之に照應すべし)

今日は住吉の御田植なりと聞きしが、此邊の老も少さも苗とりて田の中に立ちたり、分けて賤の女等更紗唐縮縮なんどの大きな帯を結び、或は清げなる手拭を被り、或は三度笠をいたし、此處にも一群、彼處にも一隊、節おかしき歌なんぞ歌ひつれて苗を植うるさま、いと面白し、彼の乙女等何目も斯る扮装にやと問へば、否、田植を晴の業として、殊に帯なんぞも結ぶなりと云ふ、誠に泥田は農家の舞臺なりけり、

(樂庵云、天四居士意動く)

予が乗れる車の先引は堪へ兼ねてや途中より暇をも乞はで逃去りぬ、去れど車夫大剛の者にて、二人引の跡に引續きて、小石ばかりの田舎道を曳駈出して馳せつゝ、少しも後れず、一里半ばかりにして富田林に至る、但或る茶店に憩ひて先引の車夫を雇ひ、又も石川に沿ふて上る、此邊は正平中北軍の屯せし所にして、高師泰石川に屯すなど太平記に見ゆ、瘴雲低く垂れ、湖水高く咽びて、願望の中、自ら懐古の感あり、金剛山も近きし心地しつゝ、石川は三日市川と西條川との西條に至りて合流せしものなり、新西條橋を渡り、左に折れて三日市に着きぬ、富田林より三里、日猶高けれども、天野山も槍尾山も山路峻しければ、今宵は此に宿りて、明日つとめてこそ出立めとて、遂に油屋と云ふに入りぬ、

三日市は錦部郡に在り、去ればこそ此處の鑛泉を錦溪温泉とは名けられ、油屋に錦溪温泉の題額あり、晃親王の御筆なり、湯は冷泉なるを沸かすと云なり、色濁りし諏訪山のに似たり、名所圖會に、京師難波よりの高野街道なり、旅舎多く、出女の目さむるばかりに化粧して、河内編の着ものに忍ぶ染の拖襦袢美しく、行かふ人の袖を引き云々と記したれど、今は只山中の一小村のみ、目覚めんほどの者も居らず、此の宿垣根に水車をしつらへて其の水を庭に引きたるが、樹古り岩に苔蒸して、聊か奇趣あり、軒近く飛かふ雀、水にうつろひていと涼し、村長南氏訪来て明日天野山槍尾山の案内せんと申さる、篤實の人なり、此の夜空いと曇りたれば、明日の天氣を氣遣ひつゝ寐たりしに、遺水の音とは知りながら、幾度か目を覺まして枕を敲てぬ、

知りながら猶雨かどぞまがひけるまくらにかき遺水の音

十五日朝まだきに三日市を出で、天野山金剛寺に遊ぶ、南村長は約を踐みて東道たり、西條より左手に折れて、長野、西代、上原を過ぎて高向に出づ、高向王子の墓も此の邊なるべけれど、得訪はず、水落、廣野の邊、路殊に峻しく、車より跳落されんばかりなり、入時過る頃天野山に至る、三日市より五十町なり、

先づ山門を見るに、殆んど頽廢に墮しつれども、猶壯嚴の昔を偲ぶべし、二王は運慶の作、殿に尊とし、天野川に架けたる總橋と云ふを渡りて、左手にゆけば、左右皆僧坊なるが、中には荒れ果て、無住なるが多し、三社山は東に、塔尾山は南に、伽藍山は西に、三面高く聳えて、空翠滴らんと欲し、北方丘を繞らして、其回める處大伽藍を建つ、抑天野山金剛寺は行基の草創にして、空海修法の淨土なり、一旦荒廢に歸せしを、後白河法皇御再興あり、南朝に及びては、後村上帝八幡御退軍の後は一たび大和に還幸ありしも、興復の御志鋭く、翌くる正平八年六月遂に親征の議を決して、蹕を當山に進め玉ひ、此に在すこと六年に及びぬる靈蹤にして、其後慶長元祿兩度の修復を経しのみ、度々の戦亂にも兵火に罹りしことなく、殿堂依然として今日に在れり、去れば足一たび其境に入りて、感既に其臆に湧くも亦宜なりかし、寺務所に憩ふ、其庭尤古雅なり、垣根越に三社の翠を見る、山高しんて雲脚低く、地静にして人語大なり、杜鵑一聲古を悟れかしと待てて甲斐なし、遂に寺僧の案内に因て山内を巡覽す、



樓門金剛寺の勅額は、後白河法皇の宸筆なり、二天は運慶の作いとめでたし、門内右手の食堂は即ち後村上帝行宮の跡にして、世之を天野殿と稱す、二十疊敷ばかりの廣さもやあらん、萬葉の尊を以て、斯る小堂の中に萬機を開食しけん、風檐雨扉、五百餘年、空しく斷腸の媒を留む、樓門の正面石段の下に大きな手水鉢あり、元祿十二年岸和田の岡部侯幕命を奉じて修復せし時に寄進せしものなり、石階を上ればいと大きな榎の樹あり、幾年月を経にけん、榎の樹の西に櫻樹あり、右株の根より生えたり、後村上帝の御手栽とかや、櫻樹の傍なる南蠻鐵の燈籠一基は法皇の建て玉ふ所、其南の多寶塔、由來いと奇しと聞きしかき忘れつ、扱又石段の正面なる大日堂に上れば、階段の擬寶珠に、天野山大日堂、右大臣豐臣朝臣秀頼公再興之慶長十一曆丙申六月吉日片桐東市正且元奉之と彫りたり、當時は如何に壯嚴なりけん、堂中に家康の木像あり、年の頃は四十七八、面長くして願に鬚あり、下目を使へり、稍有觸れたる像とは異なるが、其下目を使へるさま、己を欺きて太閤に仕へけん頃の容貌にや、帝親月亭に坐し、時は北面此所に候せりとなん申傳へ候ふと寺僧は語れり、

後村上帝の觀月臺は大日堂の北手なる祖師堂の東に在り、其廣さは五六人を坐せしむるに過ぎず、去れど三社山は其前に在り、三社の朱の玉垣綠樹の間に波の見ゆ、月其上に出でけん時の景色如何ならんと思はる、南帝逆賊の爲に山中に潛幸して、纔に宸慮を僧房の月にこそ慰め玉ひけめと推し測り奉れば、涙のみはふり落つ、堂の上なる山麓に北朝持明院法皇の遺跡あり、正平七年南帝都入の時、北朝の三上皇を穴生に移し奉る、其後三上皇は穴生より常山に入り玉ひしと云ふ、法皇の御受戒は此

の時なりけん、南北兩朝の仙蹤を一山に留む、奇と謂ふべし

堂を下りて寶庫に入り、種々の寶物を見る中に一短刀あり、後醍醐天皇の御守刀にして、帝の楠公に賜ひし者、櫻井の驛にて、肌の手を取出し諸共に小楠公に譲り玉ひしは此ぞと云ふに、恭しく拜觀し奉る、柄は銀にして其長さ三十四分、輪法の御紋を毛彫にせり、此は帝の御紋なりとかや、鞘は同じく銀にして長さ七寸九分、龍を毛彫にす、柄も鞘も毛彫の外は皆石目なり、柄頭并に鞘鎧ともにも赤銅にして、切羽は金なり、鞘の切羽の處より四分ばかり下に赤銅の銀をつけたり、此は往年小松宮借用ありて歐洲へ御携帶の節、洋服に召れんとて調添えられけんと寺僧は語れり、いとかしこしともかしてし、扱其身を拜觀するに、切羽より切先まで六寸二分ばかり、兩面の燒刀麗はしく、地肌美しくして秋水潭に澄むが如く、寒月空に冴ゆるが如く、帝魂將魄の其底に懸り玉ふにやと覺え、凜々として腔間に汗の滴たるを覺えず、中心の銘は月山なり、其外後村上遺愛の琵琶雷神と名くるもの一面、亦是神品なるべし、藪氏は武器に精しければ、甲冑の類を品して、玉石の噴あり、出水翁が笑止げに蔭ながら回護するもおかし、今日は觀心寺をも訪ふて歸らん筈なればとて、倉皇しう暇乞して出づ、元來し道に引き返して西代より左手へ折れ、西條橋より七八町もやあらんと思ふ下手に出で、石川に架けたる鹿越橋と云ふを渡り、石見川に沿ふて大澤越を上る、新道と覺しくて車は通へども、上り坂なれば抄らす、二十五丁ばかりにして上り果てつ、又も林を穿つこと七八丁にして、槍尾山觀心寺の境内に入り、中院に憩ふ、先づ目につきしは壁に掛けたる碑銘搨本一幅、「忠魂斜日、義凌清霜、楠

公之元、千載如生」とあり、首塚の石燈籠の銘にして、中井履軒の撰なりとぞ、例の小竹の碑文をも  
掛けたり、此の日住持は東上して居らず、信徒の松尾杉山二氏周旋して寶物なを見せらる、時既に十  
二時を過ぎつれば、中食を無心して、豆腐の汁荷籠の煮べに空腹を療しぬ、極樂庵胃病の癖に一種も  
餘さず、(樂庵云、エツキヌ光輝があるぞ)

古文書幾巻が見つ、藪氏は例の刀劔を弄ぶ、正宗祐定なんぞ追に傳ふる所のみは尊とし、去らば御陵  
并に首塚に詣でんとて出立つ、

中院の東に一段高き麥畑あり、案内者曰く、是れ總持院の墟にて、後村上帝の行宮と爲し玉ひし所な  
り、遂に此に崩じ玉ひしかば、檜尾山の上に葬り奉れり、去るからに心なき賤の男も恐れかしてみて、  
其墟を耕さんと云ふものなし、因て一年宮内省に獻上し、御陵地に附屬せしめんことを請ひしかども、  
許されざりしかば、今は中院より人して麥なぞ作らせ候ふと、案するに足利義詮大舉して攻寄すと聞  
えしかば、楠正儀、和田正武、天野山は餘りにあさまなればと奏して觀心寺に御供し、龍泉赤坂に防  
さたりしは正平十四年なり、太平記に、南方の皇居は金剛山の奥觀心寺といふ御山なれば云々と記せ  
るは此の時なり、當時戦敗れて楠和田は金剛山を保ちしより、此は如何すべきと懼れ玉ひけるが、  
やうく吉野の陵に参りて怪しき夢を見たりと云ふ北面武士の物語に、空しき御望をかけさせられて  
時を待ち玉ひけん、御心こそ哀ども申ばかりなけれ、去れを帝此に崩り玉ひしと云ふは案内者の誤な  
り、其後北朝の諸將相和せずして北軍引退さしかば、南軍機に乗じて進み、帝も住吉に幸し玉ふ、此

に在すこと七年にして、正平二十三年四月遂に住吉殿に崩り玉ひき、住吉殿とは津守氏の館なるべし、  
斯くて吉野は程近ければ此に葬り奉れるなるべし、兎にも角にも行宮の跡なればとて賤の男のかして  
みて耕さぬは殊勝なり、去るを獻地をだに斥けて糞土を培ふにまかせんとする官人の心こそ愚なれ、  
今の人は己だに高官に登り榮爵を得て子孫の計を爲せば足れりとして、かゝる御事には慮を盡さぬを  
淺ましき、速に觀感の標を立て、興起の地を爲すべきなり、あなかしこ、

(樂庵云、奈良邊にも多く此例ありて著しく由ある遺蹟を損ひしと聞く情けなきことなり)

石階の右手に帝母の社あり、いと荒れたり、階を登り果つれば本堂あり、堂の前に禮拜石あり、其傍  
に立てる南燈籠の燈籠一基は天野山のと同一、抑觀心寺は役の小角草創にして、初め雲心寺と云ひし  
を、弘法大師再興の折、今の名に改たれ、遂に嵯峨帝の勅願所と爲りてより、歴代の御尊崇淺からず、  
後醍醐帝の王業中興の際、祈誓空からずとて、楠公に詔して堂宇再建の奉行たらしめ玉へり、今の堂  
宇は當時の物なりけり、堂に登れば柱の佛畫殊にめでたし恭しく諸佛を拜せし中に南庇庵の觀世音あ  
り、

南庇庵と申すは、楠公の宅址なる水分村より西の方十四五丁、觀心寺の北の方十二三丁の處に在りけ  
り、相傳ふ楠公の夫人剃髮して此に住し、一門の菩提を弔ひ玉ひし處なりと、尾寺にて維新前までは  
存しけれども、維新廢佛の折、打ち毀ちて果は火きたりとなん、庵中に楠氏一門の位牌あり、中に表  
には南庇庵云々の五六字を記して、裏に俗名阿久の方と記し、位牌ありしを記を居る故老あり、是れ

夫人の位牌なりけんかし、當時せめて位牌は焚かせじとて馳附けしも、早や火中にありて如何ともする能はざりきと松尾氏物語る、氏は楠氏の舊臣とかや、夫人は良妻にして賢母、誠婦人の鑑なれば、婦學の盛なる今日、盛に其祀を修めでは叶はぬに、歴史其傳記をさへ逸し、復た其墓をだに知る者なし、今其庵址の在る所を聞くに宅址を距ること遠からずして又楠公の首墓にも近しとなり、夫人の隠棲を傳ふる者或は然らん、此の庵に残りたらんには其墓を知る便もありけんを、今は漸々たる麥隴となれりとなん、いと惜ひべし、若し其墓遂に定かならずして此の庵果して夫人に由縁ありけんには、碑をなりとも建てよかしと松尾氏に物語りながら、せめてもに其念持佛と傳ふる觀世音を拜みて出づ、世に高く生し立たるくすの木のはゝその森やいつこなるらん

後に觀心寺に藏する楠家過去帳云ふものを觀るに

南妃菴玉山蒲團大禪定尼

正平十九年七月十七日  
楠正成室於久の方南江氏

と定かに記せり此の過去帳固より後世のものなるべければ據る所ありとも覺えねど維新の際まで南庇菴と云ふ尼寺ありきと云ふに徴すれば此尼寺夫人に由縁ありと云ふもの必ずしも附會に非ざるか、尤南庇は南妃の訛にや

本堂を出たり入たり、靴を脱いだり穿いたり、聊煩はしきを見て、樂庵蠻夷の服はとかく不自由と嘲顔なり、おのれ此の五月雨に傘をも忘れて來ながら、人の上を嘲る憎さよ、降れかし、思知せんと云返す、同じ旅に雨降ながしとは思はで、雨に仇を報せんとするもおかし

(樂庵云、觀世音は御丈一尺許威徳觀音の御像を見ゆ、あはれ南庇庵を再興せしめたまへ、殊に女子教育に任する人の一考を煩す) 二三十歩ばかり東に未成の塔あり、藁もて屋根を葺きたり、此は楠公再建奉行の工を竣り、更に自ら大檀主と爲りて五重の塔を建立せんとせしも、中興の政一たび弛びて、叛亂再び起り、又も征戰忙がはしくて遂に二重にも及びで造營を中止せしものとかや、一塔治亂を示す、哀とも云ふ計なし、塔の東に星の墓あり、例の案内者尊とげに七星降臨の由來を説く、其より東二三十歩にして首墓に至る、左に小竹の撰める碑、右には某の建たる長歌の碑あり、石階を拾ふて上れば、墓は南面して石の瑞垣を繞らし、石もて五尺餘の壇を築き、壇の上に石の瑞垣ありて、中に小さき五輪の塔を立てたり、昔は木柵なりけるを、寛政五年自ら公の後裔と稱する橋成位斯く壇を築き瑞垣を繞らして、瑞垣の中央七本に文を刻みて修築の由來を勅したり、三面は年古りし杉立並び、枝を交えて之を掩ひ、寂然として鳥の聲だにもせず、

誰か袖をしぼらざるべき檜の尾山くちおしかりし昔おもへば

尊氏首を送りし時其使瀬川入道有隣と與に河内に歸りし後ち夫人に仕へたりとも云ひ、又は食を斷ちて死したりとも傳えたる楠公侍童の墓は觀心寺より十數丁の處に在りと聞さしかど、歸路を急げば得も尋ねず、直に檜の尾の陵に詣つ、

(樂庵云、其碑小さき雖も三十三天を貫くべし、其境塚雖も萬里の外に轟くべし、拜し畢て去ることを哀る)

陵は首墓の上に在り、鬱蒼たる深林を穿ちて御陵道と上れば、嶺の稍凹みたる處に杉一簇立ちて瑞垣

を繞らせり、鳥居の外より遙拜し奉る、後村上帝は先帝の遺志を繼ぎて、眞興復を謀り玉ひしも天運  
至らず、八幡合戦には自ら甲冑を召され、御馬にて大和に落ちさせ玉ひつゝ、賊の矢を御袖に受け玉ふ  
まで御艱難おらせられしも、遂に恨を齎らして崩り玉ひしは、長くも亦悲しく、將た口惜しかりける  
御事なり、折から雨さへふり來ぬ

ふりし世をしのぶ秋はみさぎの樹々のしづくにぬれまさりけり

拜し畢りて山を下る、樂庵がわけて顔見てやらんと思ふうち、雨は晴れたり、山を下りて、人々に別  
れて歸路に就く、道を山北の新道に取り、峻しく且泥濘なる山坂を下ること二十丁、佐備街道に出で、  
左折して瀧谷山の明王寺に遊ぶ、此寺弘法大師の草創にして、初は東の方なる山奥に在りけるが、南  
北朝の兵火に罹りしより、此處に再建しけり、一名を鱧不動と云ふ、眼病に惱む者、鱧を寺の畔なる  
池に放ちて平癒を祈れば、其鱧は瞎となりて、病人は愈ゆるより名づけたりとなり、今も眼病者の參  
籠不斷なりとかや、風土水氣なんどにも囚れるにや、茶など飲み出づ、佐田街道より板持村に至り、  
路二ツに分る、右は磯長の太子道、左は富田林街道なり、出水翁は富田林に用わればとて此にて別る、

(樂庵云、予尼傘を持たずして多く天文を知らざる人の心配を蒙れり、寺の寺奥には寺にあらずといふもの、之を明王寺の住持に問ふ)

右手を行きて石川村を過ぎ、南河内郡磯長村に至り、磯長山叡福寺に遊ぶ、此は上の太子とて聖德太  
子の墓あり、三骨一廟と稱して名高き御墓なり、三骨とは御母后を中に、太子は東に、太子妃は西に、

彌陀觀音勢至の三尊に擬したるなりけり、先づ御影堂に上りて、十六歳の御影を拜む、圓滿妙齡の御  
相なり、其より御廟に詣づ、廟は老樹鬱然として繞らすに石垣を以てす、石垣は二重なり、上なるは  
太子御生前に築き玉ひしものにして、下なるは後人の之に擬して築きしものなりとかや、石毎に上は  
梵字を刻し、其下に小楷もて三部經を刻したり、廟殿は三層に造りて扉を鎖せり、拜して而して寺  
を出づ、此の邊に敏達、用明、孝徳、推古の四陵ありと聞きしかども、日暮れなんどするより詣せず、  
遙拜して車に上り、白鳥の陵を心ざしてゆく

(樂庵云、石垣の並び損じたるもあれど宮内省のものとなりて以來手を替けること能はずと案内の老人嘆息せり、太子の墓標立つるばかりにして年を経て尙立たず打すてあり又云、境内二殿の竹と松あり佛法王法の一如を表するにやあらん、枯るべきは何時の間にか代りが植てあるといふ傳へたり)

途に壺井の八幡井に大黒寺を過ぎ、石川に架けたる臥龍橋を渡りて古市に出で、古市を西へ四五町は  
かりゆきて、但或る小村に至り、始て白鳥の陵を左手に得たり、陵は繞らすに大きな池を以てした  
るが何時の世にか陵の樹をも伐りけん、老樹は僅に一本二本残りて、其他は此の比植えけん若木なり、  
畏こき事ども世に多かりけり、白鳥陵の東にも一陵見ゆ、行きて拜すれば清寧帝の御陵なり

清寧陵の西にも陵の如く丘の如き者見ゆ、必定御陵ならめとて行きて見るに、果して東西に池あれど、  
西北の方は埋めけん、田と爲りたるが、鳥居もなく、垣根もなし、豆島に立てる老人に問へば、去年  
此の丘の下にて盛なんど掘出したりと云ふ、陵ならずとも必是れ皇子皇妃なんどの御墓なるべし、せ  
めて斧斤不可入の禁なりとも設けまはし、

（樂庵云、大黒寺は日本最初の太黒サンミ聞今は殆んど大黒なき寺を見ず、又云、清寧帝陵の鳥居朽腐成り、速に改修あらまほし、

日は暮れぬ、去らばとて車を飛して柏原の停車場に至れば、一時間ばかりも早し、茶店に待つうち、狂人の易を賣るに遇ふて、一場の滑稽演説を聞き、兎角する間に汽車も来りしかば、乗りて湊町に着りし時は夜の八時を過ぎたり、戎橋の畔にて夜食をものして、おのがし、別れぬ、五月雨の比に兩日の清游竟に雨にも遇はざりしこそ天幸なれと藪氏は喜び合へりしかど、予は樂庵に思知らせざりしぞ口惜しかりける、此夜大に雨る、

（完）

（樂庵云、曾州松江發行の三州史林に野見宿禰傳を得たり、中に就き道明寺に關する一節を左に附記す

河内國志紀郡には土師の郷（今道明寺村）ありて土師連智毛智といふもの住みたりしこと國史に見ゆれば此に其氏人の居たりしは明かり、道明寺（尼寺）は土師の連八島の建立にして其與天神宮は天種日命を祀るさいひ、又中興住持覺齋尼は相公の伯母にして左遷の時行て別を告げられし後、社を建て、天滿自在天神といふを、續古事談に菅家の本姓者土師也、河内國土師寺（即道明寺）是其先祖氏寺也と云々

野見宿禰は天照大神の子天種日命の十四世の孫にして甘美乾飯根命の子なりといふ、今道明寺にて乾飯つくること命の遺法にもやあらん、靈跡の事自ら聯すべし

又云、天囚の車夫其靈を尋ねて交も相違んす、若し雨ふらは車夫皆去らんこと夫の華族車夫の知けん人に思知らせる處の沙汰に非ず可々

地の浪華に近くして而して最も名區勝跡に富める者を大和河内と爲す鐵道縱橫殆んど蛛網の如く

探討の便も亦此の間に若く莫し予れ浪華に在りし時暇日に遇ふ毎に好伴侶を結ひて附近の名勝を探り靈跡を尋ね漫々施々風詠して歸れり其樂王侯も若かざる也今や移りて東都に住し脚を風塵に抽き難し會游を回想する毎に未だ嘗て雲烟縹緲の間に魂馳神往せずんばあらず明治戊辰歲抄星南山房に於て天囚自論

明治三十二年五月五日印刷  
明治三十二年五月廿日發行

郵行八種

正價金三十錢

著作者

西村時彥

東京市神田區鍛冶町四番地

發行者

伊藤岩治郎

東京市小石川區指之谷町百卅六番地

印刷者

金崎金平

東京市神田區今川橋通鍛冶町四番地

發行所

誠之堂書店

(電話本局九百四十九番)

酒井繪彦先生實地踏査圖

# 國內地旅行地圖

石版精圖 正價金廿五錢

折郵稅 二錢

東京附近ノ部

(武蔵。上野。下野。常陸。相模。伊豆。上總。下總。安房。)

文部省  
東京大学  
文学部  
教授  
田川  
矢野  
一先生  
序  
文部  
雄先生  
補助

# 枕の夢紙の洋解

全三冊  
洋紙  
招菊判  
美本  
每冊紙數凡四百餘頁  
定價各四十五錢郵稅八錢

中古の日記、物語、隨筆等を讀むに第一困難なるは、裝束、器具、建築、儀式等の詳に知り得ざるに  
あり、かゝる源氏物語もまた難中の難書なれども、古來幾多の學者が丹精を凝らするに於て、其最たる者な  
り、かゝる源氏物語もまた難中の難書なれども、古來幾多の學者が丹精を凝らするに於て、其最たる者なり  
となく存せるを以て、その書を研究するに大に便なりといへり。而るにその書と相稱しむるは、軒  
輕し難き此枕の冊子に於ては、唯値に、北村翁の春曙抄一部あるのみ。勿論、天文五年古鈔本、加  
藤發賣の笠簪抄、清水源臣翁校合本、黒川春村翁校合本、活字本等、わづと雖も、今は殆ど其名の  
みを知るのみにて、容易に見る事を得ざる者なり。近年に至りて、一二の註釋、講義録等の中に散  
見せりと雖、なほ春曙抄の抄出に過ぎざるが如し。未だ全體に通じて、群に解釋せしものあら  
ざるなり。是從來斯學者の大に遺憾とする所にあらずや。學者の資に充てずして、且つ  
せる松平静氏の詳解の著あるを聞て、講義を受けたる者、而して博士は先代春村翁より枕草紙を深く研  
究せられたる餘、更に博士多年の研究の高説を述べられたる者なれば、從本世に行はれたる註釋  
書とは、決して同日の論に非ざるは、弊堂か確證する所なり。加之、その日本紀通釋を著はせ  
る國學の大家飯田老先生に親炙して、先生の高説とも交へたり。先生の古學に精通せられたるは、今  
更に學を弁して、この書の特色の二三を列舉すれば、第一困難なる裝束、器具、建築、儀式等從  
本の誤を弁し、二老先生の説の外には國學者先生の説も交へたり。庶幾くば、これ完全なる註  
釋書と云ふべきは、幸に大に遺憾なく、百年の國學を自ら承継することを得ん。

文科大學教授 川真 賴先生 關 黑川 眞 道先生 序  
 前文科大學講師 飯田 武 郷先生 渡 松 平 靜先生 講述  
 文科大學教授 賀 矢 一 先生 序 渡 邊 文 雄先生 補助

# 枕草子紙解

中古の日記、物語、隨筆等を讀むに第一困難なるは、裝束、器具、建築、儀式等の詳に知り得ざるにあり、文意の接續簡單ならざるにあり、詞の今と異りて耳遠きにあり、枕の冊子は其最たる者なり、かの源氏物語もまた難中の難書なれども、古來幾多の學者が丹精を凝らせる註釋書は幾十種となく存せるを以て、その書を研究するに大に便なりといふべし。而るにその書と相馳駢して軒輕し難き此枕の冊子に於ては、唯僅に、北村翁の春曙抄一部あるのみ。勿論、天文五年古鈔本、加藤翁の磐齋抄、清水濱巨翁校合本、黒川春村翁校合本、活字本等、ありと雖も、今は殆ど其名のみを知るのみにて、容易に見る事を得ざる者なり、近年に至りて、一二の註釋、講義録等の中に散見せりと雖、なほ春曙抄の抄出に過ぎざるが如し、未だ全部に通して、詳に解釋せしものあらざるなり、是從來斯學者の大に遺憾とする所にあらずや、弊堂夙に之に感あり、今般斯學を修專せる松平靜氏の詳解の著あるを聞き請うて上版し以て普く學者の研究の資に充てんと欲す、且つ著者は親しく黒川博士に就きて講義を受けたる者、而して博士は先代春村翁より枕草紙を深く研究せられたる餘、更に博士多年の研究の高説を述べられたる者なれば、從來世に行はれたる註釋書とは、決して同日の論に非らざるは、弊堂か確證する所なり、加之さきに日本紀通釋を著はせる國學の大家飯田老先生に親炙して先生の高説をも交へたり、先生の古學に精通せられたるは今更喋々せずしてこの書の特色の二三を列舉すれば、第一困難なる裝束、器具、建築、儀式等從來の誤を弁し、二老先生の説の外には國學者先生等の説をも交へたり、庶幾くばそれ完全なる註釋書と云ふべき歟、幸に大方の學者速に一本を求めて座右におかれん事を、また季吟翁の春曙抄と相對して細かば更に大に相啓發して、數百年の疑問も自ら氷解することを得ん、

發行所

東京市神田區  
 鍛冶町四番地

(電話本局  
 九百四九)

誠之堂書店

東京府城北中學校校長 今泉定介先生述

# 平家物語講義

合卷全五冊(挿圖)  
 菊判紙數凡壹千二百頁  
 壹冊正價金三十五錢  
 郵稅各金六錢宛

漢文を用ひずして能く漢文の莊重をうつし國文を用ひてよく國文の軟弱に陥らざるものは戰記文に似くはなし特に平家物語は其の調の流暢なるもの文の自在なる優に源平盛衰記なよび太平記を凌駕せり古來世人の賞贊しておかざるも亦故ありといふべし然れども是等戰記文の常とし或は故實に涉り或は漢土の故事を引き又忽ちに深奥なる佛理を説く等極めて解し難き事多しされば古人も戰記文を解釋せるもの殆稀なり今日中等教育普通文の摸範として最も適當なる本書の一の詳解なく學生諸君をして隔統攝痛の歎あらしむるは誠に教育界及文學界の一大缺點といふべし本店こゝに見る所あり今泉先生に請ひて數年間先生刻苦の稿を世に公にする事とゆるさる本書の價値はこゝにいふまでもなく讀者諸君の公評にまかせん唯本書の最も特色とする所を掲ぐれば左の如し

(第一)本書本文は數本を以て最も鄭重に校訂したる事  
 (第二)講義は最も簡にして其の要を得たれば初學の人と雖も容易に解せらるべき事  
 (第三)每卷甲冑刀劍弓矢等すべて武家の故實に關する圖を附して詳解したる事

今泉定介先生講述

# 方丈記講義

正價金拾八錢  
 郵稅金二錢



日本中學校講師  
金井助作先生著

# 新作文要

全

正價 金四十錢  
郵税 金六錢

作文ノ法ハ須ラツ筆力ノ暢達ト着想ノ工夫トニ達スルヲ勉ムベシ而シテ世ノ作文書ハ區々々々小理窟ノ穿鑿ニ流レザレバ汎ニ一切普  
同ノ高尙ナル文話ヲ列スル者ノ噫是レ之ヲ教ユル者モ共ニ難シトスル所以也著者現ニ中學ノ作文科ニ從事シ凡ニ其  
終ル共書爲メ大別シテ三門ト爲シ數百ノ文例ニ據リ力メテ解説チ不明簡易ニシテ尤モ意ヲ筆力ノ暢達ト着想ノ工夫トニ致セリ作文ノ秘訣  
ヲ説ク者鮮カラズト雖モ恐ラク此右ニ出ヅル者有ラザル可シ

改正版  
ちやいれす  
すみす氏  
代數問題詳解

全二冊 上巻發兌  
紙數 二百七十頁  
定價 金五十錢  
郵税 金四錢

本書ハ宮田先生ガ多年スミス代數學ニ就テ授業セラレタル経験ヲ以テ詳細ニ解答セラレタルモノニシテ注意 適當ナル解説ヲ加ヘテ  
載セラレタル故ニ代數學ニ於ケル必要ナル問題ハ悉ク容易ニ理解スルヲ得ベク獨習用トシテハ勿論、代數學問題詳解ノ字引トシテハ  
クベカラザル貴重ノ書ナリ

## 速成平面幾何學

正價 金四十五錢  
郵税 金四錢

本書ハ如何學教授ノ經驗ニ富メル白井義督先生ガ速成テ要スル者ノ爲メニ編纂セラレタルモノニシテ問題配置等ニハ充分ニ力ヲ盡シテ  
定理毎ニ之ヲ應用問題ヲ附セ且チ此中一、二ノ問題ニハ例解ヲ示シタルガ故ニ獨習者ニ取リテモ至極便利ナル良書ナリ

●●●  
速成平面幾何學  
代數  
算術  
角術

全全全  
郵正郵正郵正  
稅價稅價稅價  
金金金

## 雙木園主人編述 江戸時代

### 戲曲小説通志

挿畫入和裝半紙本。全四冊。美裝。

若し本邦に於ける文學發達の最盛期を尋ぐれば江戸時代に若くは  
かるべし。和漢の文學ハ。さて置き。殊に戲曲と小説とに於て。最も  
の結果を見る。蓋群芳の香を破り。百花の香を放つ。以て其の華美に  
ふるに足らざる也。況又。夜雨玉碎け。高山水落るの妙響あるもの  
を乎。近世英人動もすれば。一ちりさすべし。朝を擧げて。其の文學  
を誇る。然れども。本邦江戸時代の文學ハ。未必らずしも。之に下ら  
なり。然るに。從來の慣習として。戲曲小説とし。いへば。婦人孩提の玩物  
の如く輕視し。昔て識者の取る所とならざりし。實に一大恨事なり。玩物  
云はざるべからず。要するに。戲曲と小説との相離れざるものなれば。其の源委  
汚隆。邦家の盛衰共之と聯系して。相離れざるものなれば。其の源委  
流派の如きハ。尙も文學に志あるもの。知らざるべからざるものとす。  
今雙木園主人此に慨する所あり。近世に起れる。戲曲小説の事歴を網羅  
し。名けて江戸時代戲曲小説通志といふ。上の寛永慶安より。下の文久慶  
應にいたるまで。江戸開府以來。凡二百四十餘年間の文學歴史にして。第  
一篇。戲曲の部に。江戸開府以來。及び演劇脚本の發達を叙し。併せて其の  
文例を示し。第二篇。小説の部に。浮世草子。洒落本。人情本。草紙紙の  
發達より。遂に實錄物。讀本。滑稽本の變遷沿革に及ぼし。又文例をも示  
せり。第三篇。傳記の部に。小瀬甫庵。鈴木正三。井原西鶴。近松門左衛  
門。竹田出雲。並木宗輔。福内鬼外。山東京傳。曲亭馬琴。式亭三馬。十返舎  
一。九。爲永春水を首り。外數百名にかゝる。奇行逸話を採録し。殊に作者  
の肖像は勿論。淨瑠璃本。小説本の挿畫凡數十種。一々古風を模刻し  
て。當時の眞相を失はざらんことを務め。又年表。索引をも付載したれ  
ば。極めて人名の搜索に便なり。希くハ諸君子一本を御購讀の上。近來の  
奇書なりと賞し賜は。帯店の幸榮。之に遇さす。

正價 金四十錢  
郵税 金六錢

國 民 必 讀

服部 誠 一 先生 著

尚 武 評 論  
孫 吳 講 義

菊 判 合 本 全 壹 冊  
正 價 金 卅 五 錢 郵 稅 六 錢

本書ハ服部先生軍國主義論ニ感シ時世ノ必要ニ促サレ孫吳二書ノ要義ヲ徹密ニ講述セラレ且古今内外ノ實戰ヲ引例シテ之ニ對切壯快ナル評論ヲ下シ以テ武風鼓舞ノ材料ニ供セタル兵要書ニシテ速チ軍籍ニ登リ者ハ勿論而モ我國民トシテ尙武ノ必要ヲ知ル者ハ須ラク熱讀スヘキ刻下最モ有益ナル新著ナリ孫吳二氏ノ兵法ハ万世ノ不磨ノ兵綱ナルヲ以テ世々之ヲ講スル者アリト雖モ唯々其書ヲ讀クニ止リ未ダ之ヲ實例ニ照シテ研究評論シタル者アラズ本書ハ先生ノ新編論ニ出テ讀者ハ自ら感激奮興シ覺ニス勇力ヲシテ物知ラシム其尙武ノ時世ニ實益アルハ一讀テ俟テ後ヲ知ラサルナリ今ナ我邦ハ戰國トシテ兩國ヲ宣揚シ万邦ヲ援助セシメタリト雖モ益々武風ヲ鼓舞シ兵力ヲ養成スルニアラザンニ大強國トシテ東洋ニ雄飛シ以テ社稷ヲ泰山ノ基礎ニ堅固ニシテ能ハサルハ且眼者ノ首能ク知ル所ナリ豈ニ一境ニ安ンシ小安チ倫ムヘキノ秋ナランヤ國家ヲ盛ル者ハ前途大ニ武風ヲ振テ進ンテ兵事ヲ講セサルヘカラス先生ノ本書アル實ニ此ニ出ルナリ初モ日本國土ニ生レ固有ノ武風ニ養成セラレタル忠勇男兒ハ必讀セサルヘカラザル空前絶後ノ新著ナリ

◎本書發刊に際シあり服部氏著の孫吳講義と題指名を乞

發兌元

東京 誠之堂

從二位伯爵東久世通禧君題  
從三位子爵福羽美靜君題詞  
大教正本居豐顯大人閱

從五位末松謙澄先生叙  
從六位小中村清矩大人序  
松風增田于信君譯

### 新編紫史

一名通俗源氏物語

和 本 仕 立

合本全十卷(二十册)  
特約價賣(二册)金七十五錢  
期表紙付上等製本(二册)廿二錢

洋紙摺

壹冊(四和木)實價四十五錢  
上等美製洋裝(二冊)廿二錢

初編より四編迄廿四條既刊

新編紫史は源氏物語を通俗したるものなり夫源氏物語は我邦小説の巨擘にして空前絶後の大著感神泣鬼の妙筆なること古來既に説ありされは鎌倉時代より今日に至るまで學士文人これが注釋を施すもの殆四十家に下らす然とも猶其讀み難く解し易からざるを以て後世の人其書を耳にして其文を目にせず是を以て京傳馬琴以上には小説なしと爲して徒に支那西洋の神史に眷戀す豈悲しきわざならんや松風先生嘗て大學に在りて本邦の文學を修め文辭尤簡妙を推さる今此書を譯して容易くこれを通讀するを得るの便を與へられたり文は會て原書の意を失はず語は古雅に偏せず與俗に相らす坊間刊行の小説に比すれば眞に玉石の別あり抑本書の利益は意匠の絶妙のみならず當時の人情風俗及び京洛の景況宮中并に朝紳の有様等より一般の世態を詳に叙したれば人をして親しく一千年の時代を經歷せしむるの想あらしむは世態を詳の珍書たり將た讀まざるを愧つべきの妙史あり

●每篇郵稅六錢宛申受候

東京神田區西福田町一番地

誠

之

堂



中等教育漢文講習書

振拾次郎 深井鑑一郎 兩先生校註  
 東萊博義

- 才淵作詩眼 三島中洲編輯 四三歲四 古志學人 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 文章形容詞範 深井鑑一郎先生集註 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 史記列傳讀本 名取弘三 振拾次郎兩先生講述 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 漢學活論 名取弘三 振拾次郎兩先生講述 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 正文軌範講義 關山陽先生竹俣井上自撰入 河村北溪 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 日本外史講義 關山陽先生竹俣井上自撰入 河村北溪 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 日本政記講義 氏講時之輔 論語講義 孟 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 大學中庸講義 氏講時之輔 論語講義 孟 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 論語講義 孟 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 孟子講義 孟 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 以上各書 紙數一千四百餘頁 正價金一圓七十錢 小包銀六兩目比
- 山田先生校註 各册正價 四拾八錢
- 通科標註 小學 內篇 各册正價 四拾八錢
- 通科標註 小學 外篇 各册正價 四拾八錢
- 通科標註 孟子 各册正價 四拾八錢
- 通科標註 孟子 各册正價 四拾八錢

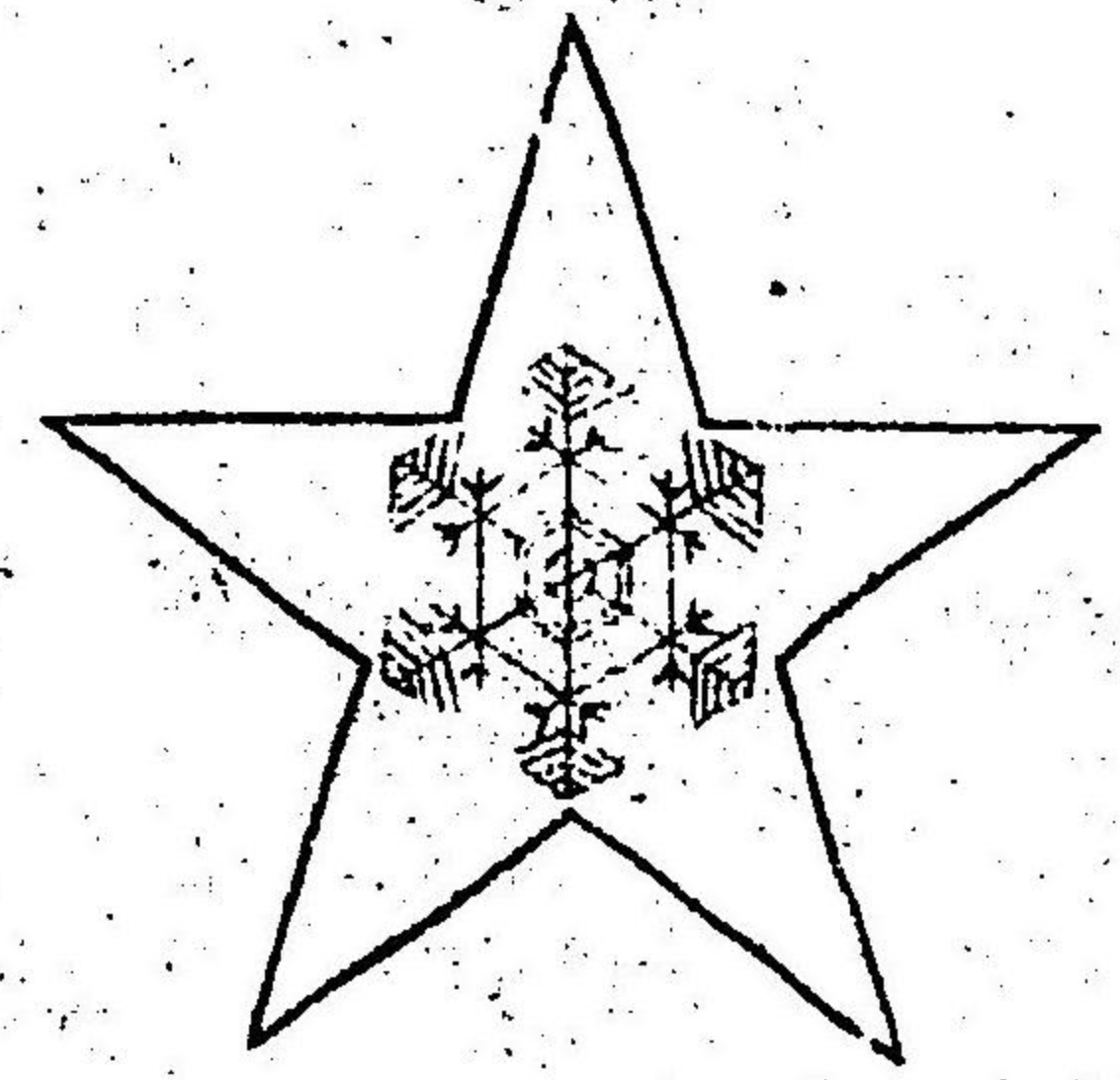
四書講義

- 尚武孫吳講義 評註 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 白文文章軌範 增田千倍 生田目經兩先生講義 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 古今和歌集講義 增田千倍 生田目經兩先生講義 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 十六夜日記講義 增田千倍 生田目經兩先生講義 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 百人一首講義 增田千倍 生田目經兩先生講義 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 竹取物語講義 增田千倍 生田目經兩先生講義 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 伊勢物語講義 增田千倍 生田目經兩先生講義 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 神皇正統記講義 增田千倍 生田目經兩先生講義 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 和文讀本問答 今泉定介先生校註 上田胤比古撰註 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 徒然草講義 今泉定介先生校註 上田胤比古撰註 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 土佐日記講義 今泉定介先生校註 上田胤比古撰註 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 土佐日記講義 今泉定介先生校註 上田胤比古撰註 郵正稅價 六冊 九拾五錢
- 四書講義 今泉定介先生校註 上田胤比古撰註 郵正稅價 六冊 九拾五錢

◎乞を名指御と書の著誰版出堂之誠し多書類の撰杜頃近◎意注

東京市神田區 西福町一丁目 誠堂書店 發行所 全國各書店

12



81

283

3